報会
特攻
平成18年2月

第66号

〒105-0001　東京都港区
虎ノ門3-6-8 第6森ビル
財団法人　特攻隊戦没者
慰霊平和祈念協会
電　話　03(3432)1090
ＦＡＸ　03(3432)5567

編集人　田中賢一
発行人　栗原　宏

今年の大晦日は特別寒かったが、かねてから思っていたことで、年越し詣でに家を出た。今夜ばかりは交通機関は夜通し運行している。

九段坂下より漆黒の空を見上げればあたかも巨人の如く、参道の照明に浮かび上がる大鳥居がそそり立つ。森々たる冷気を突いて、防寒衣に身を固めた若い人達が参道を進む。自分のことは忘れ、このさむいのによく来るものだと感心しながら歩を運ぶ。

神門に到れば、既に数百人の参詣者が開門を待っている。寂として声なく神気漂い、身の引き締まる思いである。23時30分開門、中鳥居の前まで進む。

零時ちょうど大太鼓の音と共に拝殿の前に至り、恭しく頭を垂れれば、英霊と共に平成十八年を迎えて、身も心も浄められた思いである。

その後神社心尽くしの温かい甘酒を頂戴し、しばし我に帰り生き返ったような満足感に浸る。毎年住所近くの神社に初詣をしているが、靖國神社初詣ほど心に迫るものはない。神様に甲乙をつける気はないが、御祭神と我々とは相通ずるものがある為かも知れぬ。我々だけではない、この大勢の若い参拝者にも御祭神に通ずる何かがあるのだろう。成田さんや川崎大師の方が参拝者は多いだろうが、参拝する気持ちは全々違うと思う。

年が明けても中共や韓国は小泉首相の靖國神社参拝に因縁をつけ、首脳会談も拒否しているという。彼等の国内事情に拠る事は明白であるが、そればかりではない。我が国内にも友好に名を借り、首相の靖國神社参拝の足をひっぱる政治家や経済人がいる。国論を分裂させようとする彼等の狙いは明白である。そのような反日分子には、寒空をついて初詣に来ている若者の爪の垢を煎じて飲ませたい気がする。

それにしてもマスコミが、この庶民の姿を報道しないのは困ったものだ。我々は世に芝蘭の化とならねばならぬ。

拝殿前

開門を待つ人々

（飯田正能記）

目次

靖國神社初詣 …… 1
靖國御祭神の声 …… 2
平成十八年初頭に当たり …… 6
特攻の御祭神に捧げる詩 …… 7
小泉首相の靖國参拝論評 …… 8
第六〇二海軍航空隊第一飛行隊戦記抄 …… 10
御祭神の幼い頃の正月 …… 15
さらば東京城よ …… 16
パレンバン空挺作戦と特攻 …… 18
誠特攻隊と靖國で還暦 …… 19
川南護国神社例祭に参列 …… 22
特殊潜行艇 …… 24
一野人の管見記 …… 26
我が詩集より …… 28
世田谷観音寺文化財紹介 …… 29
鎮魂 …… 30
畏友安田義人君の死を悼む …… 31
憲法と教育基本法の改正 …… 32
松井石根大将と興亜観音 …… 33
平成戯れ歌 …… 34
終戦に伴い自決した人々 …… 36
万葉集の歌と特攻隊員の歌 …… 38
［慰霊祭］明野39、回天40、予科練41
大東亜戦争開戦42
理事会・評議員会報告 …… 43
陸軍大尉若杉是俊 …… 46

靖國御祭神の声

声無き声という言葉がある。我々は和気の清麻呂ではないので神様の言葉を直接聞くことは出来ないが、英霊の遺書や遺詠を読むことにより、靖國の御祭神の仰せられることを知ることが出来る。英霊の遺書や遺詠は沢山残っているが、その中で必ず死ぬときまっている特攻隊員のものが比較的多いのは当然のことである。ここにその中から靖國神社に係わるものを拾ってみよう。

「特攻基地第二国分の記」より

沖縄作戦時鹿児島県溝辺町十三塚原（現在の鹿児島空港）に在った海軍特攻基地の記録

宮内　栄少尉　飛行予備学生出身
22歳　第三草薙隊　4月28日出撃
父母宛の遺書の一節
――折がありましたら、**靖國神社**で待っておりますから、面会に来て下さい。

島　澄夫少尉　飛行予備学生出身
25歳　第三八幡護皇隊　4月16日出撃
弟宛の遺書の一端
――達夫・広昭、俺は一足先にゆく、二人とも早晩後に続くのを信ず、二人のくる迄**靖國神社**で首を長くして待っているぞ。

時任正明少尉　飛行予備学生出身
25歳　第一草薙隊　4月6日出撃
父母宛の遺書の一節
――正明、桜花咲く**靖國の社**、智三人の兄上の許に、そして親友松本峯一の居る所に一足先に行きます。

靖國神社発行「英霊の言乃葉」より

植村眞久少尉　飛行予備学生出身
25歳　神風特別攻撃隊大和隊　19年10月26日比島海域に出撃
愛児への便りの一節
――お前が大きくなって、父に会いたい時は**九段**へいらっしゃい。そして心に深く念ずれば、必ずお父様のお顔がお前の心の中に浮かびますよ。

永尾　博中尉　飛行予備学生出身
22歳　第三草薙隊　20年4月28日出撃　沖縄近海
父母宛の遺書の一節
――父さん　大事な父さん　母さん　大事な母さん　永い間色々とお世話になりました。好子、寿子をよろしくお願ひ致します。
靖國の社頭でお目にかかりませう。では参ります。お身体お大事に。

米津芳太郎少尉　少候24期　26歳
富嶽隊　19年11月13日出撃　ルソン島東方洋上
母宛の遺書の一節
――親に先立つ不孝をお許し下さい。さりながら大君の御楯として**靖國の守護神**になる芳太郎のこと故母上もお欣び下さることゝ存じます。――

町田道教少尉　飛行予備学生出身
25歳　神風特別攻撃隊筑波隊　20年5月11日出撃　沖縄近海
母宛の遺書の一節
――それから若い盛りの綾子にもだいぶ苦労をかけました。化粧もせず、着物もきず、たゞ家の為に働いてくれるのを思うと全く頭が下ります。よい婿さんを見つけてやって下さい。サエ子ちゃんもよい子になるようお願ひ致します。私も**靖國神社**からそれを祈って居ります。

松尾巧一飛曹　乙飛17期　20歳　神風特別攻撃隊第三御楯隊　20年4月7日出撃　沖縄近海
両親宛の遺書の一節
――私の小遣が少しありますから、人に頼んでお送り致します。何かのたしにして下さい。
近所の人々、親族、知人、小学校時代の先生によろしく、妹にも……
後はお願ひします。では**靖國**へまいります。
昭和二十年四月六日午前十一時書

小川　清少尉　飛行予備学生出身
24歳　神風特別攻撃隊第七昭和隊　20年5月11日出撃　沖縄近海
両親宛の最後の便りの一節
――殊に母上様には御健康に注意なされお暮し下さるよう、なお又、皆々様の御繁栄祈ります。清は**靖國神社**に居ると共に、何時も何時も父母上様の周囲で幸福を祈りつゝ暮しております。
清は微笑んで征きます。出撃の日も、そして永遠に。

「都城疾風（はやて）特攻振武隊」より

沖縄戦で都城飛行場から出撃した陸軍特攻の記録

田中　治伍長　少飛13期　20歳　第六〇振武隊　5月20日出撃
父宛の遺書の一節
――永の御不孝平に御許し下さい。治は先に失礼致しますが、**靖國の社頭**よ

り皆様の御健康を祈ります。

若杉正喜伍長　少飛15期　20歳　第六〇振武隊　5月4日出撃

靖國の桜となりて薫る日の
　誇を胸に　秘めて飛立つ

永島福次郎少尉　特操1期　22歳　第二六振武隊　6月21日出撃

遺筆の一端

――**靖國**を安住の地と定めたり、我が心は静寂清明

――**靖國ノ御社**ニ咲ク若桜

――元気日増に旺盛　唯　一日千秋の思ひにて出撃の日を待って居ります。既に隊員五名悠久の大義に殉ぜらる。残る吾等　亦神鷲に続かん　飛機整備完了しだいなつかしの都城に転進　爆装完了沖縄へ……

再び会うことやなし
何時の日**靖國**で会う事ならんや

西宮忠雄少尉　特操1期　23歳　第二六振武隊　6月21日出撃

遺筆の一端

――**靖國**で共に飲まうか五色酒

花の都の**靖國神社**　酒豪　青年将校
一死元来不足論

浜田　斉伍長　少飛14期　20歳　第一七九振武隊　6月22日出撃

父母宛の遺書の一節

――斉は男子の本懐これに過るはなしと喜び笑って死にます。では次は**靖國神社**にて

「陸軍最後の特攻基地」より

沖縄戦に万世より出撃した陸軍特攻の記録

大畠　寛伍長　仙台乗員養成所　20歳　第七四振武隊　4月7日出撃

辞　世

さくら　さくら若桜
　明日は**九段の花**と咲く

荒木幸雄伍長　少飛15期　18歳　第七二振武隊　5月27日出撃

最後の便りの一節

――本日（廿七日）出発します。必ず大戦巣を挙げます。桜咲く**九段**で待っています。どうぞ御身御大切に

　弟達隣組の皆様に宣敷

瀬谷隆茂軍曹　仙台乗員養成所　20歳　第四三二振武隊　5月26日出撃

両親宛の遺書二通の一節

――御両親様どうか何時までもいつまでもお元気で皇国の為に御健闘下さい。では**靖國**で会う日を楽しみに隆茂は征きます。

――明日は戦友が待っている**靖國神社**に行く事が出来るのです。日本男子と生れ本懐これに過ぎるものありません。お父さんお母さん、隆茂は本当に幸福です。では又**靖國**でお会ひしませう。待って居ます。

若尾達夫軍曹　古河乗員養成所　21歳　第四三二振武隊　5月26日出撃

同僚の遺品の中にあった一文

松本兄、君とは古河、仙台、平安鎮といつも一緒だったね。愈々大望の特攻隊に召されて、これからも亦死を共にする同じ隊とは……思えば山あり河ありの幾星霜、一緒に散らう、そして**靖國**でまた一緒にならう。

花でさへ　潔よく散る若桜
　大和男の子の俺達が
御国の為に　散るのなら
　何の桜に負けやうぞ
日の本の　男に生れ光栄は
　死して屍は帰らずも
魂永久に　**靖國**の
　護りの神と我ならん

岸田盛夫伍長　少飛13期　21歳　第六四振武隊　6月11日出撃

出撃前夜の手記の末尾

――俺には**靖國神社**に弟が待っている。道案内を弟に頼むんだ。羨ましかろう。

「知覧特別攻撃隊」より

沖縄戦に鹿児島県知覧を出撃した陸軍特攻の記録

佐藤新平曹長　仙台乗員養成所　24歳　第七九振武隊　4月19日出撃

留魂録（日記）より

三月二十九日

――同期も大分戦死とのこと、**靖國神社**の同期生会に立派な武勇伝の一席、土産に出来る如く努力せむ。

四月一日

お母さんへ――あの時お母さんと東京を歩いた思出は、極楽へ行ってからも、楽しいなつかしい思出となることでしょう。

あの大きな鳥居のあった**靖國神社**へ今度新平が祭られるのですよ……手をつないでお参りしましたね。

浅川又之少尉　幹候9期　23歳　第四三振武隊　4月6日出撃

兄宛の辞世の歌

　桜花と散り**九段**に還るを夢に見つ
敵艦屠らん　我は征くなり

榊原吉一軍曹　仙台乗員養成所　20歳　第六三振武隊　6月7日出撃

父母宛の遺書の一節

――**九段**にて再会望みます。

「サヨウナラ」「サヨウナラ」

靖國神社編「いざさらば我はみくにの山桜」より

富沢幸光中尉　飛行予備学生出身　22歳　神風特別攻撃隊第一九金剛隊　20年1月5日出撃　ルソン島近海

父母宛の手紙の一節

――お正月もきました。幸光は**靖國**で二十四歳を迎えることにしました。**靖國神社**の餅は大きいですからね。

安則盛三中尉　飛行予備学生出身　21歳　神風特別攻撃隊第七昭和隊　20年5月11日出撃

本文の説明より

安則中尉は四男、そして五人兄弟の中ただ一人の戦死者となった。すべてを見通していたかのような安則中尉の辞世は

はらからの五人そろって旗のもと
一足先に　四男坊征く

「五月十一日の命日には**靖國神社**に参拝してやってくれ」という父の遺言を守り、三男の三作さんは命日祭である永代神楽祭に毎年参列している。

「特攻隊遺詠集」より

特攻隊戦没者慰霊協会発行の本で、特攻隊員が出撃にあたり心情を吐露した詩歌約八百点を、解説を付して記述したもの。

高石邦雄大尉　陸士54期　24歳　航空特攻石腸隊長　19年12月5日出撃　比島方面

大君の醜の御楯となりし身は
靖國社頭の花と咲かなむ

天野三郎少尉　陸士57期　22歳　航空特攻一宇隊　12月5日出撃　比島方面

（妹天野和子の歌）

靖國の社に向いて合掌す
レイテの島に散りし兄見ゆ

福山正通中尉　海兵72期　23歳　神風特攻隊金剛隊　20年1月5日出撃　比島方面

たらちねのちちは迎えん**靖國**に
明日はゆくなり南溟の空

磯部　豊中尉　飛行予備学生　22歳　神風特攻隊金剛隊　20年1月5日出撃　比島方面

我も又還らぬ友の跡追いて
靖國の宮の若桜と散る

島村中一飛曹　乙飛15期　20歳　第1神雷桜花隊　20年3月21日出撃　沖縄方面

大君の辺にこそ散らん櫻花
今度咲く日は**九段の社**

粕谷義蔵少尉　乙飛4期　27歳　第1神雷隊　20年3月21日出撃

覚悟して大海原に羽撃（はばたき）の
響きは永久に**靖國の社**

棚橋芳雄二飛曹　丙特飛14期　22歳　桜花隊　20年3月21日出撃

若鷲は南の空に飛び立ちて
還るねぐらは**靖國の森**

長谷川実大尉　陸士55期　24歳　第20振武隊　20年4月2日出撃　沖縄方面

春まだき**九段の花**と咲き散りて
勝ちみ戦の基開かん

浅川又之少尉　幹候9期　23歳　第43振武隊長　20年4月6日出撃　沖縄方面

桜花（はな）と散り**九段**に還るを夢に見つ
敵艦屠らん我は征くなり

清水　定伍長　少飛12期　21歳　第44振武隊　20年4月7日知覧出撃　沖縄方面

いざ征かん弾も敵機も何かせん
今日は**九段の花**と咲く身は

大畠　寛伍長　仙台乗員養成所　14期　19歳　第74振武隊　20年4月7日万世出撃　沖縄方面

さくらさくら若桜今日は散りしも
明日は**九段の花**と咲く

梅村要三伍長　印旛乗員養成所　19歳　75振武隊　20年4月16日万世出撃　沖縄方面

錦着て白木の箱で**九段坂**
いざ吾征かん特攻隊

田熊克省少尉　海軍飛行予備学生13期　27歳　菊水部隊天桜隊　20年4月16日串良出撃　沖縄方面

大君の御楯となりて吾は今
翼休めん　**靖國の森**

服部武雄伍長　少飛14期　19歳　第105振武隊　20年5月25日知覧出撃　沖縄方面

国の為生命捧げし若桜
弥生の空は　**九段坂上**

若杉正喜伍長　少飛14期　20歳　第60振武隊　20年5月4日都城東出撃　沖縄方面

靖國の桜となりて薫る日の
誇を胸に　秘めて飛立つ

磯貝　巌中尉　海軍飛行予備学生24歳　第5神剣隊　20年5月4日鹿屋出撃　沖縄方面

靖國の花と咲かなむわれもまた
いくさの庭に散りし友らと

中内静雄二飛曹　乙特飛1期　18歳　第8神雷攻撃隊　20年5月11日鹿屋出撃　沖縄方面

身はたとへ南の海に朽ちぬとも
やがて**九段**の　花と咲くらむ

近藤　豊伍長　少飛15期　18歳　第111振武隊　20年6月3日　知覧出撃　沖縄方面

轟沈の空は青空**靖國**に
笑顔で迎へる　母の面影

高村統一郎少尉　特操1期　27歳　第112振武隊　20年6月3日知覧出撃　沖縄方面

我がつとめ果して逢はん**九段坂**
桜の庭で　姉の待つらむ

巽　精造少尉　幹候9期　24歳　第64振武隊　20年6月11日万世出撃　沖縄方面

俺の住家は**九段**と決めたよ
しばし浮き世は仮のやどよ

座間重信中尉　陸士56期　23歳　神翔攻撃隊　20年4月11日　ニコパル諸島

大君の為にぞ散れと教ふらん
靖國社頭の　若き桜は

関　三郎軍曹　義烈空挺隊　奥山隊　20年5月24日健軍出撃　沖縄読谷飛行場に向かう

よしや身は千々に散るとも来る春に
また咲き出でん**靖國の宮**

山本正記伍長　特幹1期　20歳　海上挺進第17戦隊　20年2月10日　マニラ湾

靖國の社にしづまる武士（もののふ）の
み霊に続く　若桜かな

宗像幹夫伍長　特幹1期　20歳　海上挺進第6戦隊　20年2月13日　比島リサール州

征けば帰らぬあづさ弓
靖國の社　我を待つらん

引田耕一郎少尉　幹候10期　23歳　海上挺進第2戦隊　20年3月28日　沖縄慶良間

国の為嵐に向う山桜
咲くは何処ぞ　**靖國の杜**

木村　実少尉　幹候10期　23歳　海上挺進第10戦隊　20年7月19日　ルソン島地上戦闘

憂国丈夫大義　**九段社頭**謝久闊

久司博敏曹長　海上挺進第26戦隊　20年5月13日　沖縄地上戦闘

若桜国の鎮めと散りしとも
永久に咲きませ　**靖國乃花**

古野繁実中尉　海兵67期　24歳　真珠湾攻撃特殊潜航艇々長　16年12月8日　ハワイ

靖國で会う嬉しさや今朝の空
（父に送った句）

原　敏郎中尉　予備学生3期　28歳　回天金剛隊伊47潜　20年1月12日　ニューギニアホーランジヤ

靖國の桜と咲かんとこしえに
南の海に果つるこの身も

加賀谷　武大尉　海兵71期　24歳　回天金剛隊伊36潜　20年1月12日　ウルシー泊地

驕敵を三途の川迄吹き飛ばし
身は**九段の　花**と咲かなむ

このようにその他の書物からも引用すれば、靖國神社に係わるものは数限りなくあろう。

このように御祭神の御心を知れば知るほど、中共や韓国が日本の総理大臣の靖國神社参拝に干渉することに、憤りを覚える。彼らに御祭神の御心を説いても無意味だが、これらの国の言い分に迎合する日本人、就中政治経済の要衝の地位にあるものには篤と教えねばならぬ。八月十五日に参拝した二十万五千人を始めとし、多くの庶民には通じていることなのに。

隣国との友好や経済上の都合とこれとは、全く別次元の問題であるのに、もっと純粋な気持ちを取り戻さねばならぬ。

御祭神のみならず、ある遺族に次の歌がある。

かくばかりみにくき国となりたれば捧げし人のただに惜しまる

みにくい国の一つに隣国の言分に屈することがあるのは論をまたない。

平成十八年初頭に当たり

山本　卓眞

会員の皆様、良い新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

当協会の会員数は平成十五年初頭で二四六〇名でしたが、皆様方のご協力と協会からの呼びかけにより、十七年初頭には三六六七名に増加充実することができました。改めて各位のご努力、ご協力に感謝すると共に、新会員を歓迎致します。また今後も宜しくお願い致します。

昨年は災害の多い年でした。インド洋地震そのものは一昨年でしたが、最近ではM9.4と再評価された、最大規模の津波の被害が明らかになったのは、年が明けてからでした。九州の玄海島地震、宮崎の台風被害と国内での被害は世界的に見れば大きい方ではありませんでした。パキスタンの地震被害も大きく、インドネシアに続いて此処でも自衛隊が協力し、国際貢献活動が広がっています。米国のハリケーン災害の大きさも想像以上でしたが、日本の台風同様エネルギー量が増加しているように見えます。

十一月、紀宮様がご結婚され清子さんとなられたのは慶事ではありますが臣籍降下のご苦労も偲ばれます。

一昨年三月、特攻六十周年慰霊祭にご臨席頂いた、三笠宮崇仁親王殿下には昨年十二月、満年齢で卒寿を迎えられました。皆様と共にお慶び申し上げたいと存じます。

世田谷特攻観音寺の修復募金については会員の方々のご芳志を頂き、お陰で修復も秋の慰霊祭に間に合うよう完成されました。ご協力にお礼申し上げます。ご住職からも丁重なお礼状を頂いております。

さて終戦六十周年も過ぎ戦友の数も減少し遺族も代替わりが進むなど、慰霊事業継承の将来は楽観を許さない状況が予想されます。このため昨年七月、三笠宮崇仁親王殿下を名誉総裁に戴き、瀬島龍三当会名誉会長を会長とする、財団法人、大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会が発足しました。当協会の菅原理事長も新財団の理事を兼務しています。会員の方々からは屋上屋を重ねるとか、会費の二重払いなどの指摘もあり、もっともではありますが、将来の慰霊団体集約方向に備えての措置に伴う過渡的な問題とご了解願いたいと思います。

ともかく戦没者の慰霊は、国の為命を捧げた人々への、人間として当然の努めであり、慰霊、奉賛、顕彰なき所、国の為、任務の為、危険を顧みず全力を尽くす人は無くなり、亡国を招くでしょう。事は一国の存立、安全保障にかかわる精神的支柱であると言えます。一朝ことある時、進んで国の為戦うと答える若者が過半数の諸外国に対し、日本の若者の過半数は逃げると答えるとの調査結果があります。事態を真剣に受け止め、憲法改正、教育基本法改正を進めるべきでしょう。同時にできることから始める意味で、会員の皆様には後継者あるいは若い人の加入養成を図るよう、重ねてお願い致します。

小泉首相の靖國神社参拝に関しては賛成が反対を上回っているようですが、中国、韓国との関係悪化を心配する新聞、雑誌の記事が目につきます。ここでは日中関係につき次の三点を指摘したいと思います。

まず中国は一党独裁、強権の軍事覇権国であり、自由、人権は保証されていないと言うことです。中国のビジネスは常にそのリスクを配慮、覚悟する必要があります。またアジア共同体の形成についても常にこの点に触れて、中国の変化を促すべきでしょう。いずれ十年ぐらいのスパンでの中国の政体、為政者の変化も予想され、それまでの国交冷却ぐらいでたじろがないよう腹を括るべきでしょう。

第二は首脳会談が行われなくても、経済交流は進むだろうと言うことです。中国にとって経済成長は政権安定の為の最優先課題であり、成長のみならず、技術、エネルギー、資源、水、環境など課題の解決の為にも日本の協力は重要と見られるからです。一方経済人は中国に操作されて国論の分裂に手を貸さぬよう注意も必要です。

第三、日中間の最大懸念は中国側の軍拡と海洋進出行動にあります。当面中国は戦争を起こすほどの状況ではないと思いますが、南シナ海でのフィリピン、ベトナムの島嶼侵略の歴史のような行動を、東シナ海で取る可能性は否定できないでしょう。日本は抑止力強化を急ぐべきで、この点自民党ですらも危機感不足と見られます。敵ミサイル基地への精密反撃の研究予算も当然復活されるべきでしょう。

一方幕末から明治にかけて先人達は欧米の侵略を防ぐ為、日朝支三国の協力を図ったり（勝海舟）アジア諸国協力による繁栄を願ったり（河口慧海）しました。当時の理想とは程遠い現状ですが、アジアの文化多様性から見て、緊張、警戒と、友好経済交流の両面の関係はかなり長年にわたって続くものと覚悟し、それでもせめてEU内程度の国家間較差とすべく共存共栄を志すのが日本の歴史的使命であるように思います。

特攻の御祭神に捧げる詩（うた）

田中　賢一

詩は志を言う

「詩は志の之く所なり。心に在るを志となし、言に発するを詩となす。情中に動いて、言に形（あらわ）る。之を言うも足らず、故に之を磋嘆す。之を嗟嘆するも足らず、故に之を永歌す……」とは毛氏伝の序文にある。

（毛とは漢時代の学者で、古典の詩経の注釈書を公にし、権威ある書物とされている。伝とは解釈書のこと）

この一言を更に分析してみるに、ものごとに感じ情が起きる、その情がある目的に向かい意識的に動いてゆくのが志である。従って情と志は一体のものということができる。そしてその情が言葉になって現れるのであるが、唯言うだけでは足りない。そこには感情が籠もっていなければならない。そしてその発露は詩歌にほかならない。

前置はこれまでとし、我々が情を最も振起するのは、特攻隊の史実である。そこで毛氏の伝に則り、志の窮極ともいうべき自作腰折れの詩いくつかを掲げてみる。

靖國神社の特攻御祭神

九段の桜　棚引きて
鎮まる御霊　温かく
なごめ奉るか春の風
心浄まる　神のにわ

御国に嵐　迫るとき
先駆け咲きし　桜花
散て残せし色と香は
世を靖國と護りゆく

共に誓いしかの友よ
幽明分かち　六十年
ぬかずく毎に新なる
おもひを合わす　掌

宮居に鎮まる我が友は
匂うが如き　若き武者
手調子とりて歌いたる
同期の桜　聞こえくる

かなしき命つみかさね
護りきたりし国なれや
後継ぐ人は如何ならむ
離騒の念の絶ゆるなし

戦没特攻隊員鎮魂歌

天地支うる正大の　気宇鎮まりて神州に
秀麗仰ぐ富士の嶺　万朶棚引く桜花

侵す夷狄の猛くして　死もて護らん大八洲
神風よぶか敵艦を　屠りしをのこ特攻隊

菊水の旗いくたびか　我が陣頭に翻り
天駆けり行き波潜り　わだつみ揺るがす回天譜

抜山蓋世の勇あるも　時に利あらず騅逝かず
湧き立つ雲は続けども　落日かへす術はなし

悲願空しく国敗れ　残りしものは唯山河
ますらをの歌と絶えたり　祖霊何処に在すらん

後に続くを信ずると　莞爾と征きし友垣の
遺せし言葉我が胸に　消ゆることなく六十年

お国の為ということの　絶えて久しき現世に
我ら思いわずらいて　遊魂如何に鎮めんや

弥生の空に靖國の　宮居に詣でる人々の
額突く姿まごころを　みそなわせあれ祭神

小泉首相の靖國神社参拝論評

田中　賢一

小泉首相は例大祭の第一日にあたる十月十七日に靖國神社に参拝した。そのことは一応評価してよい。しかし、国民を代表する総理大臣として、堂々と正式に昇殿参拝しないのか。一般国民とおなじようにと言っているが、我々庶民はそんなことを望んでいない。御祭神も総理大臣に参拝してもらいたいとお思いになっておられるであろう。ポケットからいくらかの金を出して賽銭箱に投げ込んだという。庶民的にと思ったのだろうが、軽率の謗りは免れない。しかも私的参拝だと言っている。そうすることによって中国や韓国の抗議を和らげるとおもったのか、それとも先般起きた大阪高裁のねじれ判決を意識した為なのか。どんな形式であろうとも中国や韓国が難癖をつけるのは判っている。彼らは別に狙いがあって文句を言っているのだから、ほざかせておけばよい。大阪高裁の件については後でのべる。

四年前のことだが、小泉首相は終戦の日である八月十五日に参拝すると言っておいて、腰砕けとなり十三日に参拝した。靖國神社の御祭神は大東亜戦争だけではないのだから、春秋の例大祭に参拝するのが筋道である。過去の例は次の通り。

戦後靖國神社に参拝した現職首相

（昭和）

東久　爾宮	20年８月18日に１回
幣原喜重郎	20年10月、11月に２回
吉田　　茂	26～29年の例大祭などに２回
岸　　信介	32、33年の例大祭に２回
池田　勇人	35～38年の例大祭に５回
佐藤　栄作	40～47年春秋例大祭などに11回
田中　角栄	47～49年の春秋例大祭などに６回
三木　武夫	50、51年の春秋例大祭に３回（内８月15日１回）
福田　赳夫	52、53年に春秋例大祭など４回
大平　正芳	54、55年の春秋例大祭に３回
鈴木　善幸	55、57年の春秋例大祭など８回
中曽根康弘	58～60年の春秋例大祭など10回（内８月15日３回）

（平成）

橋本竜太郎	平日に１回
小泉純一郎	13～17年に５回

中国は何故日本の首相が靖國神社に参拝すると反発するのか

日中友好条約には内政不干渉と謳っておるにも拘らずこのように反発し、首脳会談を拒否すると言っている。国交を断絶するような態度であるが、それは一にも二にも彼らの国内事情によるのである。日本の首相が靖國神社を参拝するのは、十三億の人民の感情を逆撫ですると言うが、それは真赤な偽りである。彼の国には五〇もの民族がおり、文明の恩恵を受けているのは主として漢民族で、しかも都会に住んでいる者だけである。私は戦争中、騎兵聯隊で内蒙古の包頭の西北百粁の安北という所に居たことがある。三十年ほど前にこの付近を旅行してみたが、辺境の地に入ると昔と変らぬ風景で、百姓は原始的農耕を営んでいた。この農民たち日本の靖國神社など知るはずがない。十三億の人民の感情を逆撫でするなどと言うが真赤な偽り。人民のうちで、恵まれている筈の漢民族でも、都市と田舎では貧富の差が甚だしく、しかも農民の中には、ダムを造るとか工場地帯造成とかで、農地を無償に近い金額で取り上げられた者が四千万もいるという。しかも役人は建設業者から賄賂は取り放題ときている。中央に出てきて政府に訴えても解決したためしがない。国内に渦巻く不平不満を対外問題でまぎらわそうとしている。

現在中共政権内で軍の発言力は極めて強いと言われている。軍は本質上眼は外に注がれている。その軍部の欲望を満たすためには、仮想敵国を設け対外的緊張をもとめたい。そのような国内事情で日本に食いついているのである。

彼らがこのことについて食付くのにはもう一つの理由がある。日本の政治家のなかには国を思うの情など全くなく権力欲で首相の靖國神社参拝に反対する者がいる。具体的なことは後で述べるとし、反日日本人は財界にもいる。中国人を怒らせると商売上不利であると考える輩である。政財界にくさびを打ち込むのも彼らのねらいである。

日本の企業が中国に進出している製造業や大型店舗で働いている現地人は九千万人もいるという。それらの企業が不利になれば失業者が出るわけで、冷静を取り戻しつつあるようにもみえる。訪中した奥田経団連会長は、昨年九月三十日胡錦涛首席と会談したが、靖國問題については何も言わなかったという。権謀術数渦巻く彼らのことだから何を思っているのか、油断ならない。

政局の中枢にいる反日政治家

その最たる者は河野洋平である。平成七年村山政権の外務大臣だった河野は、中国に向かうチャーター機が天候不良で台湾に緊急着陸した時、機内から一歩も出ないで、北京に到着してから「私は台北の地を一歩も踏んでいない」と、おべっかをつかったという。そんな情けない腑抜けが衆議院議長と

は我々の方が情けなくなる。「河野洋平」ではなく「江（江沢民）の傭兵だ」と当時言われた。

一昨年九月二十二日河野は中共詣でをして、胡錦涛首席と会談した。その時相手の歓心を買うように、「当面の急務は靖國神社問題を妥当に処理することだ」と述べ、自分が小泉首相の靖國神社参拝をやめさせるようなことを言った。

昨年六月一日、衆議院議長河野洋平は、海部俊樹・宮沢喜一・村山富市・森喜朗・橋本竜太郎五人の元首相を招き会談し、小泉首相の靖國神社参拝は「慎重の上にも慎重に考えるべきである」との認識で一致したという。そして六月七日小泉首相に面会を求めこのことを伝えた。さらに「二十年前、当時の中曽根首相が一度参拝した後、近隣諸国の意見等考えてやめた。それ以来中曽根氏の判断が歴代首相の判断になっているので、よく考えてもらいたい」と述べたという。

河野に呼ばれて集まってきた五人も情けない男達、それと河野が言うとおり当時の中曽根首相の信念のなさ、これも同罪と言うべきである。中曽根だけは河野の招集に応じなかったので、小泉首相に話すとき昔のことを持ち出したのだろう。まだまだ言うべきことは沢山あり、慰安婦問題もこの男が元凶だが、靖國神社と関係ないのでここではのべない。

法匪　裁判官

小泉首相は、昨年までは礼服を着用し昇殿し、内閣総理大臣と署名し、公式に参拝した。ところが今年は平服のままで拝殿の前で、ポケットから小銭を出して賽銭箱に投げ入れ拝礼した。それについてはその直前にあった大阪高裁の判決を意識したと思われる。

台湾人遺族等が提訴した「台湾靖國訴訟」の判決が大阪高裁で九月十三日にあった。大谷裁判長は、小泉首相の靖國神社参拝に関し、損害賠償の請求については認めないとして原告の控訴を棄却した。国側の勝訴であるが、傍論において、神社の本殿において祭神と向き合って拝礼する行為は祭神を畏敬崇拝する宗教的意義の深い行為で、国が特定の宗教に対する助長、促進になると認められるので、憲法違反であると述べた。

これは傍論であるから被告である国を拘束するものではないが、国が勝訴しているので上告はできない。裁判官の独りごとと思えばそれまでだが、憲法違反などと大それたことを述べるのは、思い上がりも甚だしい。

裁判長はその前に、靖國神社が戦没者追悼の施設であると認めている者が多いとも言っている。しからば本殿で拝礼することは憲法以前の問題と言わざるを得ない。この裁判官は法律について如何に教えられ、どんな勉強をしたのか知らないが、法律以前の常識というものが全く欠如した不完全な人間である。このような裁判官を法匪という。

小泉首相は中共の言いがかりをはねのけて参拝したのだから、このような法匪のたわごとなどに拘る必要は毫もない筈だ。一国の首相らしく堂々参拝すべきである。そして神社なのだから神社の礼式に従って参拝するのが当然である。これをもって特定宗教を助長促進することにはならない。それは仏教の葬式に行けば焼香するのと同様の事である。以前中曽根首相が昇殿参拝したとき、神式のお払いを拒否したことに対し、時の松平宮司は土足で上ってきたようなものだと言ったが、全くその通りである。

小泉首相の靖國神社参拝後記者団に答えたことについて

……今日の平和というものは我々生きている人だけで成り立っているんじゃない。心ならずも戦争に赴いて命を失った方々の尊い犠牲の上に成り立っているんだということを、片時も忘れてはならないと思う……

「心ならずも戦争に赴いて」の一言は御祭神を侮辱すること甚だしい。お国の為に進んで一命を投げ出した英霊は無数におられるではないか。

首相は東京裁判史観にもとずく戦後の誤った教育を受け、いまだ抜け切っていない。戦争は悪だときめているから、心ならずも戦争に赴いたと思いこんでいるのだろう。極端な言方をすれば、靖國の御祭神は悪党の一味となってしまう。大東亜戦争の意義本質から勉強してもらわなければならない。それともう一つ、今回は言っていないが中国に弁解めいて靖國神社で不戦を誓ったと言ったことが何回かある。先般の終戦の日には二十万五千の庶民が参拝したが、不戦を誓いに参拝に来た者など一人もなかったろう。毎年一回は参拝すると決心し実行しているのは了とするが、正真正銘の国民の代表になってもらいたい。

この人達不戦を誓いに行ったのか

第六〇一海軍航空隊第一飛行隊
戦記抄（続）

宮下　八郎　編

沖縄航空作戦

彗星爆撃機整備分隊の我々は石岡駅より特別に仕立てた軍用列車にて、鹿児島県国分基地に前進した。

国分基地は鹿児島湾に面した煙草畑の中に開戦直前に設けられた飛行場であり、北には霧島山がそびえてすぐ近く迄その裳を引いていて、南は鹿児島湾を隔てて櫻島が熔岩の地層を見せ、西南の風のときは煙がかぶさってくる。飛行場は火山灰の土質らしく芝は生えがよくないので、飛行機の出発する時は砂塵で悩まされた。急設の飛行場で格納庫も兵舎も粗末で設備も無く、飛行場の隅の掘建小屋に宿泊し飛行機の来るのを待った。

三月二十八日飛行機隊到着の予定であったが、百里原基地で彗星一機が機銃の誤射で火災を起し、五〇〇キロ爆弾が爆発し隊員十六名が犠牲になった。この事故は出発直前に起きた不祥事で出発は取止めになった。

三月三十一日彗星爆撃機十四機一七〇〇国分基地に到着した。

四月一日彗星四機着、第一国分基地に進出した兵力は零戦三十八機、紫電八機、彗星十八機が揃った。刻々と迫りくる米機動部隊に対し、これで迎え撃つということである。

この特攻隊員を成功させるため、夜を徹して使用機を整備する整備員の苦労や責任感は筆舌にはつくせない。終日終夜受聴器に聞き入る電信員、又入手した敵情を散在している部隊の幹部に届けて廻る電報取次兵の苦労、これ等が集積して六〇一空と言う組織体の作戦能力が発揮されたのである。

作戦実施、第三御盾特別攻撃隊六〇一空隊

四月一日、早朝、敵攻略部隊が沖縄本島西岸に上陸開始の報を得て、これに対し翌二日黎明攻撃が発令された。

四月二日、優秀な搭乗員を選抜して彗星爆撃機四機が索敵攻撃のため発進したが、全機敵を見ず、高崎機の外帰着。

飛行機隊の編制、指揮官国安昇大尉一番機(操)中川飛曹長(偵)国安大尉は、飛行中敵を見ず、佐伯基地に不時着。二番機(操)倉知上飛曹(偵)村龜二飛曹は〇六四五帰着。三番機(操)高崎孝一中尉(偵)中岡静夫上飛曹は鹿児島湾にて戦死。四番機(操)安藤一飛曹(偵)小林二飛曹は鹿児島空に不時着。

四月三日、敵攻略部隊は沖縄島に上陸作戦中で、敵機動部隊で沖縄の南方及び北方にそれぞれ一群あって空中攻撃を阻止する体勢をとっている。六〇一空は敵の北方機動部隊に対して攻撃命令を受けた。午後三時戦闘機（零戦三十二機紫電八機）四十機前路掃蕩隊として出発、続いて彗星爆撃機十九機発進した。

攻撃第一飛行隊長国安大尉が率いて出発したが、隊長機は発動機不調のため引き返し、分隊長寺岡大尉指揮して攻撃を決行した。（この攻撃には七二一空爆装零戦三十機鹿屋基地より出撃）

飛行機隊編制及び戦闘状況は次の通り

1、国安大尉一番機(操)飛曹長中川紀雄
　　(偵)大　尉国安　昇
　二番機(操)上飛曹倉知宜明
　　(偵)二飛曹村滝良吉
　右二機発動機不調引き返す。

2、川辺少尉一番機(操)少　尉川辺　祫
　　(偵)上飛曹今村信久
　未帰還（戦死）
　二番機(操)少　尉杉浦　豊
　　(偵)二飛曹岩崎正文
　燃料タンク被弾の為奄美大島に不時着の際杉浦少尉戦死、岩崎二飛曹無事。

3、百瀬中尉一番機(操)一飛曹杉本孝雄
　　(偵)中　尉百瀬甚吾
　二番機(操)二飛曹南　喜市
　　(偵)二飛曹鈴木喜久男
　右二機は一六四〇戦艦又は大巡に直撃弾命中、一八四六喜界島に不時着。

4、松倉少尉一番機(操)少　尉松倉弘文
　　(偵)二飛曹大島　勇
　一七一五戦艦攻撃一七四〇喜界島に不時着。
　二番機(操)一飛曹星川清久
　　(偵)少　尉藤田忠信
　一七二〇予定地点に敵を見ず、一九一〇喜界島に不時着。

5、安部中尉一番機(操)中　尉安部茂夫
　　(偵)少　尉古橋達夫
　二番機(操)少　尉米谷克躬
　　(偵)二飛曹小田憲治
　一七三〇敵発見の電報発信後消息不明（戦死）。

6、庄屋少尉一番機(操)少　尉庄屋次郎
　　(偵)上飛曹富樫惣吉
　一七三〇予定地点に敵を見ず、喜界島に不時着。
　二番機(操)一飛曹安藤　勝
　　(偵)二飛曹小林久光
　発動機不調引き返す。

7、寺岡大尉一番機(操)大　尉寺岡達三
　　(偵)上飛曹五井武夫

寺岡大尉指揮して攻撃決行（戦死）。
二番機(操)一飛曹上田博重
(偵)二飛曹上川安則
発動機故障出発せず。
8、谷川少尉一番機(操)少　尉谷川隆夫
(偵)少　尉佐久間努
二番機(操)少　尉川合　仁
右二機予定地点に敵を見ず、一八一〇喜界島に不時着。
9、工藤少尉一番機(操)少　尉工藤双二
予定地点に敵を見ず喜界島に不時着。
二番機(操)上飛曹山内末吉
発動機不調引き返す。
三番機(操)飛　長茅原幸蔵
予定地点に敵を見ず、一八四五喜界島に不時着。
この日夕刻「菊水一号作戦」が一六四八発令された。
一、当部隊は沖縄方面の戦勢に鑑み、五日を期し可動兵力の大部を挙げ、昼夜にわたり敵攻略部隊に対し連続攻撃を加え、その攻略企図を破砕せんとす。
この命令によって敵が攻略を開始してから五日目、初めて攻略部隊に対する総攻撃を行うのであるが、時機を無くしたものというべきである。少なくとも攻略部隊に対する攻撃は上陸開始前に行わなければならないもので、四月一日には既に準備を終わり、総攻撃を待っているようにすべきであって正に手遅れであった。
四月五日、宇佐航空隊、名古屋航空隊、百里原航空隊各隊の九九艦上爆撃機特攻隊は国分基地に進出し六〇一空杉山司令の指揮下に入る様発令される。
四月六日、この日菊水一号作戦が発動されて沖縄攻略部隊に対して第一回空中総攻撃を実施、沖縄島北端九一度八十五浬の機動艦隊攻撃。
彗星爆撃機四機一六四五発進、指揮官百瀬中尉　(1)一番機(操)一飛曹杉本孝雄
(偵)中　尉百瀬甚吾
（戦死）
二番機(操)二飛曹南　喜市
(偵)二飛曹鈴木喜久男
一八三五戦艦艦尾に直撃弾命中帰途喜界島に不時着。
(2)川合少尉一番機(操)少　尉川合　仁
（戦死）
二番機(操)飛　長茅原幸蔵
帰途奄美大島に不時着。
四月七日、攻撃隊として彗星爆撃機十一機一一二〇発進、一三三〇乃至一四二〇の間に攻撃に成功した。
攻撃第一飛行隊長国安昇大尉指揮
第一小隊一番機(操)飛曹長中川紀雄
(偵)大　尉国安　昇
二番機(操)上飛曹倉知宣明
(偵)二飛曹村滝良吉
第二小隊一番機(操)少　尉松倉弘文
(偵)二飛曹大島　勇
二番機(操)一飛曹池田栄吉
(偵)二飛曹清水雅春
一三三七航空母艦二隻見ゆ、一三三八全軍突撃せよ、電報発信後未帰還（戦死）。
第三小隊一番機(操)少　尉庄屋次郎
(偵)上飛曹富樫惣吉
二番機(操)一飛曹上田博重
(偵)二飛曹上川安明
一四〇五敵飛行機見ゆ、一四〇〇敵部隊見ゆを発信後未帰還（戦死）。
第四小隊一番機(操)少　尉谷川隆夫
(偵)少　尉佐久間努
二番機(操)少　尉工藤双二
一四一二航空母艦見ゆ、一四一六我敵艦に突入中を発信未帰還（戦死）。
第五小隊一番機(操)一飛曹安藤　勝
(偵)二飛曹小林久光
二番機(操)上飛曹山内末広
三番機(操)一飛曹星川清久
発信電報なきも第一攻撃隊と行動を共にしたものと認む、未帰還（戦死）。
この攻撃には七二一空爆装零戦三〇機も参加し、戦果は、敵通信により判断するに航空母艦二隻沈没し、二隻撃破という輝かしいものであった。この攻撃隊十一機共全機確実に突入した。
攻撃第一飛行隊は国分基地に進出すると、四月三日全機出撃した。しかし国安飛行隊長以下数機は飛行機故障のため引き返し、先任分隊長寺岡大尉が率いて敵に突入したのであるが、以来国安飛行隊長は再三特攻攻撃に出たいと司令に申し出た。そこへ今日の出撃である。出撃命令を受けた後、飛行隊長は十一機の隊員を指揮所の横に集めて、「今日は待ちに待った出撃である。三日に突入した戦友の後を追って今日は確実に敵航空母艦に突入しよう」「今日こそ絶対に一機も帰らんぞ」と一同決意を堅めて出撃したとのことであった。
斯くして第一次国分基地進出部隊は多大の戦果を収めたが、大部分を消耗したので、百里原基地に残留訓練中の彗星隊を国分に進出させ、第一次進出部隊は百里原基地に後退して再編成する事になり、百里原基地に帰還する。
国分基地は隠密にしていたので、我々が作戦中は敵の攻撃は一度も受けなかったが、四月十六日初めて小型機の攻撃があり、更に十七日にはB29九機編隊三群の攻撃を受けるに到り、南九州の隠密航空隊も敵に発見されて午後集中攻撃を受けた。
第二次進出飛行機隊の指揮官渡辺清規大尉以下彗星爆撃機二〇機は、四月下旬より六月下旬迄、第二国分基地（国分基地より離れた山の中）に在り

て攻撃の機を覗って居たが好機を得ず。沖縄の戦闘は急速に進捗して沖縄の運命も時日の問題となった。そこで次に来るものは本土攻略である。関東地方の守備として、百里原基地へ引揚げた。

第一国分基地の碑

第二国分基地の碑

写真は編者挿入

関東の雄六〇一空

本土攻略に当たりて如何なる作戦に出るかは不明であるが、沖縄基地に航空兵力を進出し、日本本土に対して空中攻撃を強化して、軍需生産を破壊し日本の戦争の根本戦力を殺ぐと共に交通通信設備を破壊して半身不随の状態に陥れるであろう。関東地方に在る隊としては敵の空襲に対応する方策と直接関東方面に上陸作戦をする場合に対して対応する準備が必要である。

百里原基地の設備の整備

本土空襲は益々激化されるので、基地の諸設備も之に対応するため、先ず宿舎設備は総て飛行場の東側下吉影寄りに分散、半土中式として、松林の蔭に岡の斜面を利用して設備した。

飛行機は飛行場の周辺一粁乃至二粁離して林や民家を利用して隠ぺい分散する掩体を設備した。材料は供給されたが自力で設備するので、土浦海軍航空隊の予科練約二千名の応援を得て、宿営設備は五月中完成しその他は六月中に完成した。

飛行機の整備

飛行機の供給状態もよくなり、六月には彗星七十機、零戦百機は使用可能となる。五月、六月は空襲が激化して、訓練中に空襲で被害を受けた飛行機の修理で整備員の苦労も多かった。訓練を盛んにやっていった時空襲で七十機破損された事があった。この時の修理復旧作業で整備科は昼夜連続約十日間で修理完了した。この間数次の飛行場攻撃を受けたが、人員の被害は少なかったのだが、配備の防空砲台員三名と整備分隊員の今野兼雄整長が空襲中防空壕の中で三〇〇ボルトの高圧電線が漏電して戦死した。

攻撃第一飛行隊は隊長以下幹部が特攻攻撃に参加するので、隊長が戦死する毎に新編成で訓練を始めるため、老練な搭乗員と練度の低い者とが入隊して調子を合わせるのに隊長野村浩三大尉は苦労していた。訓練中の事故は尠なかったが、急降下爆撃訓練中に引起し時期が遅れて地上に激突殉職が二件あった。

本土決戦配備の展開

七月下旬本土攻略を行う企図を察知して次の通り展開。

一、戦闘三〇八飛行隊零戦約五十機は奈良県大和基地に進出。

一、戦闘三一〇飛行隊零戦約八十機は三重県鈴鹿基地に進出。

一、攻撃第三飛行隊彗星約五十機は六〇一空配属となり名古屋基地に進出。

一、攻撃第一飛行隊彗星約百機は百里原基地に残留し関東地方の作戦に従事。戦局とともにあわただしい半年であった。基地の移動に転戦にようやく百里原に隊員全部が集結して六〇一空全隊として行動したのは五、六月、七月半月であった。今別れたら次に会う時があるかどうか―七月十七日全隊を挙げて別れの宴を催した。この夜水戸附近は敵水上艦艇の砲撃を受けた。

七月十八日各隊は別れを惜しみながらそれぞれ配備基地に向って出発した。

百里原基地

七月下旬より本土作戦に備えて飛行機の使用を制限したので、飛行機を整備してテスト飛行の必要な機のみとなり飛行訓練は中止された。

米国艦隊が本土沿岸に近接して時々海岸を砲撃し、釜石（岩手）日立（茨城）磯浜（茨城）清水、浜松（静岡）等は相当の被害を受けた。敵戦闘機は本土全体に爆撃して来た。八月になって戦闘機を使用し始めたので、彗星爆撃機も禁を解かれて、関東海面の機動艦隊攻撃を実施し始めた。

八月九日特攻攻撃第四御盾特別攻撃隊

一二四〇敵機動艦隊航空母艦四隻を含む金華山の九〇度七〇浬の三〇浬圏内索敵攻撃は、四機宛三ヶ攻撃隊を編成し、第一攻撃隊は一四一〇発進、百里原より八〇度一六〇浬迄索敵進撃、第二攻撃隊は一四二一発進、百里原より八〇度一八〇浬迄索敵進撃、第三攻撃隊は一四二五発進、百里原より八〇度二〇〇浬迄索敵進撃。

指揮官渡辺大尉第一小隊

一番機(操)大　尉渡辺清規
(偵)中　尉島村周二

敵を見ず一七二五原町陸軍飛行場帰着。

二番機(操)一飛曹阿知波延夫
(偵)二飛曹竹田秋津

一五五〇金華山六〇度四五浬に戦艦五～七隻、巡洋艦一〇～一二隻、駆逐艦二〇～二五隻を発見せしも投下器故障の為攻撃せず、一六二八金崎陸軍飛行場に不時着。

三番機(操)中　尉田中幸二
(偵)一飛曹万善東一

未帰還（戦死）

四番機(操)上飛曹鈴木　実
(偵)一飛曹森本義則

一六〇〇発動機故障のため磐城陸軍飛行場に不時着。

第二小隊小隊長北村中尉

一番機(操)上飛曹板橋泰夫
(偵)中　尉北村久吉

二番機(操)上飛曹遠山　明
(偵)二飛曹渋谷文男

右二機未帰還（戦死）

三番機(操)上飛曹遠藤良三
(偵)一飛曹増岡輝彦

一四四八発進一六〇八「敵水上艦艇見ゆ金華山よりの方位一一〇度四〇浬」を打電後未帰還（戦死）。

四番機(操)一飛曹布家好雄
(偵)二飛曹林山次郎

一四二五発進せしも発動機故障にて引き返し第四小隊にて再出発。

第三小隊小隊長榊原中尉

一番機(操)中　尉榊原　靖
(偵)一飛曹岩部敬次郎

一四二五発進、一五五〇「敵飛行機見ゆ金華山よりの方位一二五度一四〇浬」を打電後未帰還（戦死）。

二番機(操)二飛曹原嶋久仁信
(偵)一飛曹原田敏夫

一六〇二「敵艦見ゆ」「我敵艦に突入中」を打電後未帰還（戦死）。

三番機(操)一飛曹南　喜市
(偵)一飛曹近藤　運

四番機(操)一飛曹広島忠夫

一四二七発進せしも発動機故障のため引き返し、第四小隊にて再出発。

敵機動部隊は金華山の一〇五度九五浬に移動の情報を得たので、これに対応するため発動機故障にて基地に引き返した三機を以て第四小隊にし、百里原基地より九〇度一八〇浬を進撃、一索敵攻撃。

第四小隊小隊長近藤一飛曹

一番機(操)一飛曹南　喜市
(偵)一飛曹近藤　運

一六四〇発進、一八〇八金華山の一〇四度一二〇浬に巡洋艦四隻発見爆撃（左舷至近弾）後F6F一機の攻撃を受け、プロペラ被弾一九三〇増田陸軍飛行場に不時着。

二番機(操)一飛曹広島忠夫

一六四〇発進、未帰還（戦死）。偵察第一〇二飛行隊の観測により一八一五頃巡洋艦に突入せるものの如し。

三番機(操)一飛曹布家好雄
(偵)二飛曹林山次郎

一六四〇発進索敵中一八一一発動機不調、一九一八増田陸軍飛行場に不時着。

八月十三日特攻攻撃第四御盾特別攻撃隊

間断なく来襲する敵戦闘機の隙間を少数機宛発進して攻撃を決行したので、発進困難で記録も不備、記憶も不確実であるため正確ではないが、概ね一三三〇より一五三〇頃で、天候不良のため取止めが発令されたが、当時の情況で「攻撃目標見ゆ」を打電したものもあるが戦果は詳らかではない。但し天候不良のため戦闘機の反撃を受けないので発進したものは成功の算大なり。

指揮官平尾大尉

第一小隊一番機(操)大　尉平尾義裕
(偵)中　尉吉橋恒信、

発進出来ず

二番機(操)中　尉小城亜細亜
(偵)上飛曹森　保

発進後未帰還（戦死）。

三番機(操)上飛曹笛田保雄
(偵)二飛曹金谷道正

四番機(操)二飛曹辻中鋭二
(偵)一飛曹田辺実治

三、四番機発進出来ず。

第二小隊一番機(操)中　尉藤田　毅
(偵)上飛曹合田博志

二番機(操)上飛曹佐藤司郎
(偵)二飛曹下野殖巳

三番機(操)二飛曹野原　昭
(偵)上飛曹石関伸二

四番機(操)二飛曹柿崎勇次郎
(偵)二飛曹三田村和二

第二小隊全機発進出来ず。

第三小隊一番機(操)中　尉平野　享
(偵)二飛曹加藤康夫

二番機(操)中　尉三橋栄治
(偵)一飛曹今井　勲

三番機(操)一飛曹武内良之
(偵)一飛曹生津賢祐

一、二、三番機未帰還（戦死）。

四番機(操)一飛曹岩木哲夫

発進出来ず。

八月十五日特攻攻撃第四御盾特別攻撃隊

正午を期して関東近海に遊弋中の機動部隊に対し総攻撃を行うので、午前に、航空母艦の飛行甲板破壊のため練度の高い搭乗員を以て特攻攻撃を決行した。当時敵戦闘機は本土上空を跳梁して出撃困難であった。

指揮官斎藤大尉

第一小隊一番機(操)飛曹長俵　良通
(偵)大　尉斎藤和也

発動機不調引き返す、帰途潜水艦撃沈。

二番機(操)中　尉谷山春男
(偵)一飛曹田島平三

戦闘機の攻撃を受け自爆（戦死）。

三番機(操)一飛曹田上初治
(偵)一飛曹田中　喬

未帰還（戦死）

四番機(操)一飛曹藤本　嶺
(偵)二飛曹新井唯夫

戦闘機の攻撃を受け自爆（戦死）。

第二小隊一番機(操)中　尉高臣亮詳
(偵)上飛曹新谷惇滋

二番機(操)二飛曹大島芳蔵
(偵)少　尉相馬八郎

右二機発動機故障の為引き返す。

三番機(操)上飛曹岩谷樺王
(偵)一飛曹溝口和彦

四番機(操)一飛曹永田与四郎
(偵)一飛曹矢上　保

右二機未帰還（戦死）

第三小隊一番機(操)上飛曹川合　寿
(偵)中　尉水上潤一

二番機(操)上飛曹山本好人
(偵)中　尉勝原通利

右二機未帰還（戦死）

三番機(操)一飛曹中村正義
(偵)一飛曹佐々木六郎

飛行機故障出発せず。

四番機(操)一飛曹弘光正治
(偵)二飛曹泉川　白

未帰還（戦死）

終戦の大詔を承り鉾を収む

総攻撃を行うので早朝より彗星爆撃機の攻撃準備をしていた。敵機が飛来して来たと思ったら突っ込んできた。指揮所の防空壕に入るのがやっとだったロケット弾を発射して機銃掃射して来た。まるで霰が降って来た様な音で、附近に彗星が燃料満載で八〇〇粁爆弾を搭載したが丸出しになっていったので、よく当たらなかったとヒヤリとした。

午前十時に特攻攻撃をする事になったが、敵P51が本土上空を跳梁しており、発進困難なので、敵襲が終わってから編隊ではなく単機で順次合間を縫って発進した。指揮官機操縦の俵飛曹長は同期なので帽子を振って見送ったが、胸中悲壮な気持ちであった。次いで総攻撃の準備で彗星の点検整備をしておいたら正午に天皇陛下の玉音放送があるので、それが終わってから出撃する事になり飛行機の電信機のレシーバーで聴いたが、雑音が多くて聞き取れなかった。只「万斛の涙を飲んで」と言うお言葉を聞いておかしいな？いよいよ本土決戦になるから各員一層頑張る様にとのお励ましのお言葉があるかと思っておったが、その時整備の先任分隊長徳矢大尉が自転車で飛んで来て「攻撃は取止めだ」と大声で言って来た。日本は無条件降伏したと全然信じられないことであり、指揮所で悲憤慷慨し涙がポロポロと止めどなく出て来た。昼食は戦闘配食でボタ餅であったが、忙しくて食べる暇なく攻撃中止になり胸がいっぱいで食べられなかった。張り切っていた気が一度に緩んでしまった様で、仕事も手につかない、いやまだ信じられないと攻撃準備して飛行場で待機していた。その内だんだん暗くなり夜七時のニュースを聞いて初めて納得した。昨夜まで灯火管制で真暗だったが、農家でも電燈を灯し、明りが点々と見えた。星が降る様に夜空一面に輝いていた。アー戦争は終わって生き延びたが、日本はこれからどうなるか、我々はどうなるか…。搭乗員は総員沖縄へ行くとか、整備員は使役に使われるとか、色々と憶測が飛んだ…。

十六日も全機出撃準備、燃料満載エンジン整備、何時でも出撃出来る用意をして飛行場で一日中待機していた。

十七日厚木空より零戦飛来し、大尉が降りて来て最後まで戦おうと呼び掛けて来た。

十八日夜、士官室に准士官以上集合があり、会議に入り副長吉富寛治中佐より「陛下より大詔が下ったのであるから、我々が変な反攻をして後に残る国民に迷惑を及ぼしてはならない。軽挙妄動は謹むよう部下を取り静めてもらいたい」との話があり、我々もその意見に同意して鉾を収めた。

十九日より彗星爆撃機を飛行場の列線に並べて、プロペラを取り外し前に並べた。米軍機が状況調査に飛来し、空中よりその状況を視察して行った。

解　隊

二十四日から復員業務が始まる、隊員を数次に分けて復員する様に予めその人名を予告して準備させて整々たる復員をした。連絡飛行に彗星三機を残しその整備をする為残留したが、米軍の命令で飛行機は飛ばせない事になり残務整理の要員が残留し、各基地の兵器の整理を待って幹部を鈴鹿基地に集

め九月下旬本部を名古屋基地に移した。
十月上旬彗星六機を米軍の指令により横須賀航空隊に空中輸送を行った後、本部を静岡県藤枝基地に移動、ここにて最後の残務を完結して十月下旬六〇一空は解隊を了したのであった。

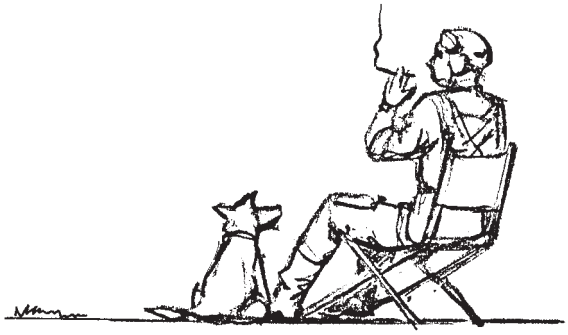
戦歴総合

㈠硫黄島作戦
二〇年二月一六日
関東地方初空襲
香取基地索敵攻撃六機戦死八名
二月二一日
彗星一二機硫黄島特攻作戦神風特別攻撃隊第二御楯隊
彗星一二機、戦死二二名、戦果空母等六隻以上沈没、大破

㈡沖縄作戦、攻撃隊国分基地進出
二〇年四月二日
第一回特攻彗星四機戦死二名
第三御楯特別攻撃隊六〇一空隊
四月三日
第二回特攻彗星十八機戦死九名
四月六日
第三回特攻彗星四機戦死三名
四月七日
第四回特攻彗星十一機戦死十九名
四月一七日
第五回特攻彗星五機戦死六名

㈢本土作戦　百里原基地
八月九日
第一回特攻彗星十二機戦死十三名
第四御楯特別攻撃隊六〇一空隊
八月十三日
第二回特攻彗星十二機戦死八名
八月十五日
第三回特攻午前中彗星十二機戦死十六名

作戦の総合
攻撃回数九回延機数八三機未帰還五三機　戦死者九八名、その他攻撃以外戦死三名　合掌
第六〇一海軍航空隊
攻撃第一飛行隊整備分隊士
整備兵曹長　宮下八郎謹記



靖國御祭神と我らの幼い頃の正月

い　犬も歩けば棒にあたる
ろ　論より証拠
は　花より団子
に　憎まれっ子世にはばかる
ほ　骨折り損のくたびれ儲け
へ　屁をひって尻つぼめ
と　年寄の冷や水
ち　塵積って山
り　律儀者の子沢山
ぬ　盗人の昼寝
る　るりもはりも照らせば光
を　老いては子に従う
わ　われ鍋にとじ蓋
か　かったいのかさ恨み
よ　よしのずいから天井のぞく
た　旅は道づれ世はなさけ
れ　れう薬口ににがし
そ　総領の甚六

つ　月夜に釜をぬかれる
ね　念には念をいれ
な　泣き面に蜂
ら　楽あれば苦あり
む　無理が通れば道理ひっこむ
う　嘘から出たまこと
ゐ　芋の煮えたのご存じない
の　のどもと過ぎれば熱さ忘れる
お　鬼に金棒
く　臭いものには蓋
や　安物買いの銭失い
ま　負けるが勝ち
け　芸は身を助く
ふ　ふみをやるにも書く手は持たぬ
こ　子は三界の首枷
え　えてに帆をあげ
て　亭主の好きな赤烏帽子
あ　頭隠して尻隠さず
さ　三べん回って煙草にしよ
き　聞いて極楽見て地獄
ゆ　油断大敵
め　目の上のこぶ
み　身から出た錆
し　知らぬが仏
ゑ　縁は異なもの味なもの
ひ　貧乏暇なし
も　門前の小僧習わぬ経読む
せ　背に腹はかえられぬ
す　粋は身を食う
京　京の夢大阪の夢

さらば東京城（トンキン）よ

特操二期　大久保　定孝

特操二期の会より三篇の投稿を得て、その一つは前号に載せた。その際特操二期を特攻二期とあるのは誤植に付訂正します。

ソ連の参戦

ソ連の対日宣戦布告を知ったのは、一九四五年（昭和二〇年）八月一〇日の未明でした。

その頃私は、満州の東京（トンキン）城飛行場で五九期士官候補生の操縦教育の任務についていました。ちょうどその日は、飛行訓練の休みの日と記憶しています。久しぶりで朝寝坊が出来るからと、前夜は遅くまで将校宿舎で仲間の教官たちと将棋を差していました。眠りについて間もなくのことでした。当番兵の「非常呼集です！」という叫び声に、驚いてとび起きました。ねむい目をこすりながら、急いで軍服に身をかため宿舎の外に出てみました。将校集会所が、教官たちの集合場所だという。外灯の光で、腕時計を見ました。まだ、午前三時を少し過ぎたばかりです。大陸の夏の夜は、短く、東の空がもう白々と明けかけていました。

仲間の教官たちと走って将校集会所に向かいました。隊長や先任の将校たちは、もうそこに姿を見せていました。みんな表情をこわばらせて、何かひそひそ話し合っています。緊迫した重々しい空気が、室内にたちこめていました。

全員の集合を見届けると、隊長は厳粛な口調で「八日、ソ連はついに日本に対して宣戦を布告して来た」と私たちに告げました。一瞬、集会所内に異様などよめきが起こりました。隊長は手でそれを制止しながら、続けました。「九日から、ソ連は戦闘状態に入ると通告し、すでに戦車部隊がソ満国境を越えてわが方に進攻を開始している。我々の今後の行動については、まだ具体的な何の命令もない。それまでは、各自の部署で冷静に待機せよ。くれぐれも軽挙妄動のないよう慎むこと。また、候補生ならびに兵たちに不安と動揺をきたすことのないよう、十分注意してくれ…」と。再びどよめきが起こり、やがてそれは、緊迫した空気にかわりました。

日ソ不可侵条約が、ソ連の一方的な意向で継続が破棄されたのは、その少し前だったと聞かされました。日本の敗北が濃厚となるやその機を逸せず連合軍に加わり、対日宣戦布告を敢行してきたのでしょう。一方日本軍は、日ソ不可侵条約が継続されるものと期待して、その年の始めまでに、国境警備についていた大部分の兵力を手薄になった南方各地に転進させていました。だから、この時のソ満国境は、全く無防備に近い状態にありました。ソ連の戦車部隊は、やすやすと国境を越えて満州の国土に進攻が出来たわけです。ソ連にしてやられた、ということができましょう。

集会所を出て、軍服を飛行服に着替えました。そして、あわただしく不安な気持で朝食をとりました。しばらくして伝令が来ました。操縦教官は全員直ちにA格納庫前に集合するように、との命令でした。

この日から三日間、人員の空輸作業が続けられました。候補生および整備関係兵士を、ひとまず後方の吉林まで後退させることになったのです。軍用列車の調達が、混乱のため思うように出来ないので、とりあえず飛行機で可能な限り移送しようという、緊急命令のようでした。私たち下級将校には、行動計画の細部は全く知り得ません。ともかく、当時東京城飛行場にあった古臭い九九式高等練習機と双発練習機各数機を使って、この任務を果たすことにしました。双発練習機の操縦経験がない私は、高練に乗って整備関係の兵士の移送に当たりました。

雲の多い、雨模様の日が続いていました。視界飛行の困難な日が多く、もっぱら地図と羅針盤に頼る計器飛行を行いました。東京城と吉林との距離は、約二三〇キロだったと思います。高練の巡航速度は、時速一八〇キロです。雑時間も含めて往復に約三時間はかかります。双方の飛行場には夜間離着陸の施設がなかったので、昼間だけの飛行ではせいぜい一日に三～四往復しか出来ませんでした。いつ現れるかわからないソ連機の脅威の中で、それでも私たちは無装備の練習機で果敢に任務の遂行に励みました。

山峡での雲中飛行

移送任務に就いてから二日目のことです。その日も、朝から雨雲が低くたれこめ、いまにも降り出しそうな天候でした。

後座席に整備兵を二人同乗させ、私は東京城飛行場をあとに吉林へ向かいました。離陸後直ちに雲中飛行に移り、間もなく雲上へ出ました。高度計は八五〇米を指し、頭上には抜けるような青空が広がっています。白く輝く雲面をすれすれに、滑るように飛行を続け

ました。地上で抱いていた不安と悲壮感は、青い空と白い雲の織りなす壮大な景観の中ですっかり消え去っていました。

バックミラーを覗くと、二人の整備兵は狭い座席に抱き合うようにして表情をこわばらせています。二人とも少年飛行兵出身で、まだ二〇歳前の少年でした。「一時間ちょっとの辛抱だ、窮屈だろうが我慢しろよ…」レシーバーを通して、私は二人をいたわり励ましました。少年兵は軽く頷いたが、相変わらず緊張を続けています。

四、五〇分雲上飛行をしていると、前方に大きく雲の切れ目が見えてきました。地点確認のために、降下しようと、右旋回しながらゆっくり雲下に出ました。赤茶けた大地と雨に濡れた緑が、靄の中にかすんで見えます。その中を鉄路が一本、南北に走っていました。地図と照合してここが老爺嶺に近い集落であることがわかりました。この鉄路を北へ少し進むと老爺嶺を越えて吉林に向かう鉄道があるはずです。それに沿って視界飛行を続けよう、とっさの判断で私はそう決めました。

雨はやんでいましたが、依然として厚い雲が地表すれすれに覆っていました。高度一〇〇～一五〇米の低空飛行しか出来ません。障害物を見とどけながら、私は慎重に操縦桿を握り続けました。鉄道線路の上を、約十五分ぐらい飛ぶと、集落が尽き、谷間に出ました。ここからが難所として有名な老爺嶺か、と独り心でつぶやく。と、突然前方に大きな黒い塊りが現れました。山だ！。ついさっきまで眼下に見えていた線路は、もう視界にはありません。私は反射的に急旋回をして、それを避けました。雲はすっかり谷を埋め、視界はほとんどゼロ状態です。機体のすぐ下で、針葉樹の葉が機体の風圧に大きく揺れるのが見えるだけ。絶えず前方に迫ってくる黒い大きな塊りを避けながら、私は必死になって右に左に急旋回や急上昇を繰り返しました。同乗者に万一のことがあってはならない、緊張と不安とが極度に凝縮された一瞬でした。それは、僅か数分の、いやもっと短い時間だったのかもわかりません。しかし、曲りくねった谷間と山腹での雲中飛行は、私にとってたとえようのない長く苦しい時間でした。

ようやく機体は雲の上に浮かびました。起伏の多い雲頂が、太陽の光にまだらな影をつくっています。それは雲下の、気流の激しさを現していました。この下に、壮大な老爺嶺の山脈があるのだ、そう思いながら未だ静まらない胸の鼓動を抑えてバックミラーを見ました。少年兵の顔は、まだ青ざめています。おそらく彼らは、私以上に生命の危険を感じておったのでしょう。私は黙ったまま、吉林の方向に機首を修正してレバーを全開しました。

この日老爺嶺で、教官と二名の兵が殉職しました。機体もろとも、山壁に激突したということです。その知らせが老爺嶺の駅長から教育隊に届いたのは、翌日の午後のことでした。

燃える施設

ソ連の戦車部隊は、刻々と牡丹江市に近づいていました。しかしこれをくいとめる戦闘力は、私たち教育部隊にはありませんでした。主力部隊を南方に移してしまった関東軍にも、もちろんその力はありません。私たちの不安と焦りは、日ごとに濃くなっていました。いまはただ、安全な後方地点に、候補生や整備兵を一刻も早く移送するだけです。私たちは全力をあげて、悪天候と闘いながら任務の遂行にあたりました。

任務がすっかり完了した一四日に、牡丹江市の北一〇キロの地点にまでソ連軍が進攻して来た、という知らせを受けました。東京城も、こうなったら時間の問題です。その日、東京城飛行場に最後まで残留していた私たち十数人の者に、飛行場の施設や物資を全部焼き払って奉天市へ集結するように、との命令が伝達されました。ソ連軍にまざまざと施設や物資を占拠させたくない、という計らいだったのでしょう。悲壮な命令でしたが、いまはもうそれを実行する以外に手だてはありませんでした。私は油だらけの飛行服姿に軍刀だけを持ち、そのほかの軍衣や私物類はすべて建物内に投げ捨てました。その中には、万一のときにと前もって引き伸ばしておいた四ッ切大の遺影用写真も入っていました。文字通り着のみ着のままの姿になったわけです。そして焼却を見届けた後すぐ離陸できるように、飛行機を滑走路に待機させました。

準備が終わると、すべての建物内に残っていたガソリンを全部撒きちらし、次々に火を放ちました。またたく間に真っ赤な火の手があがり、建物内に燃え広がり、やがて激しく音をたてて炎と黒煙が施設を包みます。私たちは、一歩一歩後退しながら、この光景を眺めていました。あまりの沈痛さに、誰一人声を出す者はいません。

正義だったはずの戦いが、いままさに敗れる瞬間でした。

ふと、私の心に、故郷の母や肉親の顔がかすめました。

やがて私達は、編隊を組んで上空から東京城飛行場に別れを告げました。僅か数か月足らずの生活でしたが、数々の教育と懐かしい思い出を心に残してくれた東京城でした。再び見ることもないだろうその東京城飛行場に、私は胸の中で繰り返し繰り返し「さらば、東京城よ…」と叫び続けました。

まだ黒煙が、曇り空の下にたちこめ、地上には余燼のくすぶりが見えていました。

この写真高練だが東京城ではない

パレンバン空挺作戦当時の特攻精神

田中　賢一

2月14日が巡りくると、あの当時のことが思い出される。私は第一挺進団司令部の部員だった。あの頃は特攻という言葉はなかったが、今考えると特攻と名付けられる行動が多々あった。

カハン飛行場で協力飛行部隊と最後の打ち合わせがあった。航行援護に任ずる飛行隊は二個戦隊あったが、一人の戦隊長が発言した。降下後30分間上空に在って援護してくれと言われるが、若しその前に敵戦闘機と出会い、増槽を捨てて空中戦を行ったら、30分の在空は不可能だと。我々もそれには納得した。

その時64戦隊長の加藤さんは、どうした訳か遅れて現れ、何の話だと聞いた。飛行集団の参謀が今の問題を説明すると、加藤さんは「30分在空せよと言われれば我が戦隊は在空します」決意を込めて発言された。撚料尽きて帰れなくなったらどうするかと、誰も尋ねないのでこの話はそれで終わり、次の議題に移った。

私は操縦者ではないので専門知識はないが、加藤さんは増槽を付けたまま空中戦をやる自信があったのか、それとも撚料尽きたら敵飛行場に着陸する気だったのか、端末の部員で尋ねるのも控えていた。

初めに発言された戦隊長は59戦隊の中尾治六さんで、加藤さん共々その後戦死されてしまった。

第一挺進団は初め南方軍直轄だったが、17年1月31日第三飛行集団に配属になった。その時の命令では、第三飛行集団の挺進団の用途について、パレンバン飛行場の奪取に使い、なしうれば精油所を奪取させろとなっていた。我々は内地を出る時からパレンバン精油所奪取が任務と心得ていた。それがため日石の鶴見精油所に専習員を出して、精油所について研修させていた。南方軍の命令は意外な感じを持ち、マレーのスンゲーパタニーに前進し、飛行集団と接渉中のところ、鶴見の精油所で研修を受けた徳永中尉が司令部に現れ、私の中隊（第2聯隊第1中隊）を精油所に直接降下させてくれと申し出た。

司令部でもこのことについては迷っていた。精油所奪取は国策そのものであるが、南方軍の命令は遵守しなければならない。高級部員の木下中佐は徳永に言った。「輸送機が少ないので、中隊といっても一〇〇人くらいしか連れて行けないし、それに事前の対地攻撃も不可能だ。地上戦闘を支援する航空攻撃も期待できないが、それでも出来ると思うのか」と問うた。それに対し、徳永は「できます。やります」と決意を漲らせて答えた。

これによって挺進団としての決心は決まった。但し降下適地は極めて狭小で、しかも精油所に沿って陣地があればその火制下になる。しかし躊躇すべきではないと、飛行集団の計画で一部を初めから精油所攻撃に指向することになった。

その結果は大成功だった。精油所は小流を隔てて二つあって、大きい方（BPM）はその日のうちに要所を奪取し、夜の逆襲を撃退して完全に占領した。小さい方（NKPM）は接近路が制限されていたのと、小隊長が戦死してしまったので、明方までには占領できず一部破壊をゆるしたが、敵が逃げたので翌日突入した。

我が方の損害は、戦死小隊長1名を含み6名、物料投下機1機が対空火器で撃墜された。

断じて行えば鬼神も避く。後から考えれば単に騎虎の勢いに過ぎないように思うが、あれだけの覚悟をしたのは後にいう特攻精神に通ずるものがあったと思う。

誠特攻隊と靖國で還暦の想いが実現

元特別幹部候補生　深井　正昭

戦局も日ごとに厳しさを加えて来た昭和二十年三月、群馬県の前橋飛行場（地元では堤ヶ岡飛行場と呼んでいた）で特攻訓練を行って同年四月宮崎県の新田原飛行場から出撃、沖縄本島読谷村・残波岬沖の敵艦船群に体当たり攻撃を敢行して散華した陸軍航空特別攻撃隊・誠第36、37、38飛行隊については、同第37隊隊長小林敏男少尉（戦没後大尉）の昭和二十年元旦から突入前日の同年四月五日までの日誌が、戦後四十五年を経て同期（太刀洗陸軍飛行学校木脇教育隊出身）の金　文男氏等関係者のご努力によって発見され、その行動の大要が判明している。

同特攻隊は太刀洗陸軍飛行学校の閉鎖に伴って、同年二月十四日本校を始め傘下各地教育隊の教官、助教たちで組織された特攻隊で、台北に司令部を置く第八飛行師団（師団長山本健児中将）に所属したが、台湾へ飛ぶ飛行機も無く、特攻機（九八直協）受領に下志津に集結して編成式が行われ、千葉県銚子飛行場→前橋飛行場と移動して訓練を重ねた特攻隊であった。

三月五日前橋に展開して給与も充分には行き届かなかったようで、また陸軍記念日を控えて隊員たちの士気高揚のためにもと、小林隊長（水戸市生・水戸商卒・甲幹七期・近衛第二連隊＝前橋陸軍予備士官学校出身）は自ら飛行場近くの清里村農会そして群馬県庁、高崎ハム工場、専売局、税務署、高崎の歩兵部隊などを歴訪して物資の調達に奔走し、更に大命の貫徹には隊員の一致団結こそが緊要として「誠隊歌」を作詞して、作曲を国民歌謡「椰子の実」を作曲された大中寅二先生に依頼し、三月十八日には同飛行場で関係者や地元国民学校の生徒たちも参加し、招かれた大中先生がタクトを執られ盛大に誠隊歌の発表会も行われた。

第一節の歌詞（二、三、四節…略）

大和島根に生を享け
太刀洗にて鍛はれし
吾等十二の若桜
特攻隊の命受けぬ
いざいざ征かむ正気隊（誠隊）

誠三隊36人の特攻隊員たちの前橋飛行場展開は約二十日間ばかりであったが、その間暖かな地元の人たちや高崎、前橋の女学生たちによるマスコット人形の贈呈慰問と交流、隊員一同による伊香保温泉での別離の宴と東京・王子国民学校の集団疎開学童やその寮母たちとの楽しい交歓の一刻などを過ごしており、第37隊の小屋哲郎軍曹（戦没後少尉）は伊香保温泉での印象などを次のように詠んでいる。

『生も死も忘れた俺は伊香保にて
　梅の香りと湯の香によわむ』
『花も咲く香もかんばし伊香保かな』

小屋軍曹の短歌と俳句は王子第三国民学校疎開学童の学寮に指定された塚越旅館の大広間での宴席にお給仕係として活躍した黒宮寮母（現姓岩崎）さんの求めに応じて半紙に筆を走らせ手渡された遺筆で、大切に保存されていたが数年前に岩崎さんから鹿児島県のご遺族に贈られ、現在は知覧特攻平和会館に展示されている。

宿泊の翌日学童たちと記念写真を撮った隊員一同は、石段の温泉街を歩いて近くの森秋旅館を訪れ、玄関前の庭にコードをいっぱいに引いた蓄音機の前に車座となってベートーベンの第五や第九「運命」「告別」など幾つかの曲を聴き、名残りを惜しみながら伊香保の山を下ったと言う。その折、同旅館の和枝（長女・二十歳）さんに書き送った詩が残されている。

『ある特攻隊員の詠める』
いで湯の街の　ともしびに
若人われの　血は騒ぐ
今宵のまどゐ　いつの世か
繰り返すべき　時やある
征きてかえらぬ　春秋の
さだめ尽きせぬ　世のならい
若人われの　胸の血を
とりて記さん　筆やある

三月二十日二機の飛行機が伊香保温泉の上空に飛来して旅館の上空を超低空で飛んだ。愉しかった一夜のお礼と別離の挨拶であったろう。二度三度と旋回を繰り返しながら白いマフラーを力一杯に振って、翼を左右に傾けながら飛び去って行った。（疎開学童・三国蓉子さんの記憶＝東京都北区在住）

同日一四〇〇師団長（下田　龍栄門閣下？）飛行場到着。一六〇〇より神儀・出陣式が本部前で行われ、引き続いて会食になったが「隊員の態度が不可なり」とかの理由で師団長が中座してしまい、席上にサッと冷たい空気が漲ったが、『最早ささたること論ずるに足らず、吾等が願いは只々大任の達成あるのみ。』と小林隊長の日誌には記されている。

誠36、37、38特攻隊の群馬滞在は短い期間ではあったが、地元の人たちに数々の思い出やエピソードを遺して三月二十四日に第一陣、同二十六日第二陣が九州の基地を目指して飛び立って行ったのであった。

誠第36飛行隊岡部三郎伍長（香川県出身　大日本航空青年団、戦没後少尉）は堤ヶ岡を去るに当たり、日頃何かとお世話になっていた飛行場近くの農家に書簡を託し、前橋高等女学校へ届けて貰いたいと依頼した。

可愛いマスコット人形を作って贈ってくれた前橋高女四年生たちの一人、細野光枝さんからの人形の背中に、小さく折り畳まれた半紙が縫い付けてあり、開いて見ると彼女自筆の『血書』の手紙であり、若き女性の健気な心情を慮り、岡部伍長はじめ隊員一同粛然として声も無く、激しい感情が胸中に去来したことであったろう。

誠第36飛行隊　岡部三郎少尉
日の丸の鉢巻は本文中より東京淀橋の関東高女生が寄贈したものと思われる

以下岡部伍長から細野さんに宛てた『徒々記』と題する礼状の全文である。

徒　々　記　（原文のまま）

特攻精神に激す魂の乙女
県立前橋高等女学校
細野　光枝様に礼す
陸軍特別攻撃隊員　岡部生

この一片を浅間の噴煙の如き烈々たる愛国の至情を宿す上毛前橋の心なる貴妹に寄す

あなたの血潮　あなたの血潮
私は今じっと見ている
貴妹の心の底に湧き出づる
愛国の情熱を
真白の中に真赤な日の丸の様に
純情の中に万象を焼盡す熱火
それが貴妹の　日本精神なのだ
私達は開封の一瞬
一語も発することができなかった
私はその次に襲ふ自己卑少を
私達が　私達がうんと修養して
もっと自己の内なるものに強き
省みの日を送らなければいけない
特攻隊　貴妹の魂はこれで一杯だ
愛国心貴妹の魂は此れで一杯なのだ
むしろ私達は貴妹の強い特攻精神に
魅せしめられた
総てのものが黙々として一言も発せない
私達は今日が基地出発の日
もう高崎や前橋には来ることはない
黙々として　最後を白梅の香り高く
送らう　意　決したり
貴妹の魂を内に深く蔵して
吾が故山なる台湾沖に
火の玉となりて突込んで行こう
その日までそのなす日まで
私達は貴妹の様な魂の指導者に
多く會いたい
そして死の一瞬まで美しい日本精神
の把握につとめよう

榛名山上白雲の去来無心にして
生心を入るゝに地なし　されど
噴煙浅間は吾れに多くのものを与ふ

昭和二十年三月二十四日

戦後三十年を経て、この『徒々記』を公開する決心をしたことについて細野さんは「戦争中の思い出として大切にしまって置いたものですが、戦争を知らない後輩達に戦争の悲しさ、悲惨さを知ってもらうための一助としてお役に立てばと思い決心しました。特攻隊の岡部さんも私一人の手許に置くよりも、その方が喜んで下さると思います。」として、右手の人差し指を切り、したたる血で和紙に直接、カタカナで「銃後のことは心配せずにお国のために頑張って下さい。私も男に生れていたら特攻隊員になったでしょう。」というようなことを正確ではないが書いた記憶とのことである。

（昭和五十五年七月一日発行・前橋女子高校六十年史下巻等より抜粋）

飛行場の近くに自宅のある高崎高女三年生の三上登喜子さん（旧姓・静東京都在住）、今野公子さん（旧姓・畔見　埼玉県在住）と坂本喜代子さん（故人）たち仲良し三人組と誠飛行隊員との交流は、地の利を生かして飛行場に進出、『神鷲』と尊敬し憧憬して、温かく微笑ましく、また涙ぐましい交流は心に深く刻まれ、五月三日陸軍省発表の誠隊突入、感状上聞の記事に涙して、三人は翌早朝、隊員たちの遺詠遺墨を胸に、高崎市郊外の群馬県護国神社に参詣し哀悼の誠を捧げたのであった。

時は流れて六十年、この十月初旬、靖國神社から「岡部三郎少尉」のご遺影と遊就館で対面され、『岡部少尉のご遺影を展示するに至った、いきさつと同少尉の軍歴や人となりを知ってい

たら教えて欲しい』と申し出ている方がいる。名前や電話番号を先方に教えても宜しいかとの連絡であり、個人情報の保護が理由のようである。

隠す事でもないので承知したところ夜になって先方のご本人から弾んだ声の電話があり、また数日してご丁寧なお手紙などをご夫妻から頂戴した。

昭和十九年夏から秋のごく短い期間であったが、九州の飛行場に勤務していた岡部少尉（当時は伍長）と勤務地の飛行場に近い国民学校の四年生だった少女との慰問文のやり取りは、激化する戦局のため何時しかその消息が途絶えてしまった。

知性豊かに優しさの滲む文面に、自然に咲きながら自己を主張する草花や思い出の土地の風物などを巧みな水彩画で表現した『筑紫野』と題する絵文帳の贈送を受けて、その十数葉の最後には『明るく、正しく、強く成人なされんことを』と書かれていて、少女の胸にジーンと来るものがあり、以来現在まで六十年余『宝物』として大切に保存して「出来るものなら探してお会いしたい」と『岡部三郎』の姓名しか分かっていない飛行機乗りを、ご夫君とともに探し続けて来たとの事である。

正に戦後六十年。今年の八月十五日靖國神社を参拝して遊就館を見学、さしたる期待も無くて調べたご祭神ご遺影名簿に探し続けた「お名前」を発見した時の驚き、その胸中はとても言葉では表現も出来ず、初めて岡部少尉のご遺影と対面、眉目秀麗の美青年。『日の丸の鉢巻』をグッと締めその上に飛行帽をかぶり、一点を見つめる表情のすがすがしさは大悟の風貌そのもの、下方に『陸軍少尉　岡部三郎命　昭和二十年四月六日沖縄方面にて戦死・香川県』と注記があり、暫し黙然と不動の姿勢のまま立ち竦（すく）んでいたが、ご遺影と戦没地等から特攻隊として戦死されたことが推察できたとのことであり、手紙の末尾には『素晴らしい心の便りを残して歴史の渦の中に散って行った岡部少尉に対して、心から哀惜の念と鎮魂の誠切なる思いで一杯です。』と結ばれていて、戦後還暦の靖國神社で巡り会えた縁に深い感懐を覚えるとの礼状であった。

新装なった遊就館には、「靖國の神々」の遺書・遺品等展示室が設けられ、誠三隊二十三柱のご遺影の展示は既に完了されていたが、高女仲良し三人組の三上、今野さんたちの強い思い入れもあり岡部少尉を含め未展示の六隊員のご遺影を収集し、ご遺族のご了解も頂き、隊員の教え子たちであった特別幹部候補生有志（代表・金澤欣哉氏＝札幌市）と関係者の努力によって遊就館に申請し、展示が完了したばかりであった。

因みにこの誠第36、37、38飛行隊隊員一同による『寄せ書』発見については平成九年二月発行の会報『特攻』第三〇号で紹介させて頂いたが、現在遊就館の第一八展示室に同飛行隊一同の集合写真と誠第36飛行隊住田乾太郎隊長（本籍愛知県・甲幹七期・戦没後大尉）の伊香保温泉で墨書された次のご遺詠（元寮母　岩崎潤子さん奉納）とともに掲示されている。

『夜見ノ国ハ暗シト聞ケリ道連レニ
敵百万ヲ道連レ行カン』

『飛行機乗りと空飛ぶ鳥は
何処の御空ではてるやら』

戦後はまだまだ終わっていないことをしみじみと実感している。

（平成十七年十一月十五日記）

陸軍航空通信学校長岡教育隊の碑

本号訂正欄（41頁）に挙げておきましたが、65号47頁の碑は、平和鎮魂の碑（陸軍航空通信学校尾上教育隊跡）であります。原本の〝陸軍航空の鎮魂総集編〟が取り違えていました。よって、改めて陸軍航空通信学校　長岡教育隊跡碑の写真を掲げます。（写真提供　深井正昭氏）

川南護国神社例祭に参列して
思出の数々

田中　賢一

宮崎県児湯郡川南村（現在は町）は嘗て陸軍挺進部隊の基地のあった所で其所の護国神社には、地元出身の御祭神は六四三柱であるが、一万有余の挺進部隊の戦死者もお祀りしてあり、毎年十一月二十三日に町長が祭主となって町挙げての祭典が行われている。

私は毎年参列し我々の戦友だった御祭神に一文を奏上しているが、嘗ては約五十名も参加していた戦友が、逐年減少し今年は五名になってしまった。その代わり自衛隊空挺隊員だった者が多数参加し、それに都城の陸上自衛隊や新田原の航空自衛隊からも参加者があり、地元の人達にも面目を保っている。今回私の奏上文は、

空挺部隊の御祭神に捧げる

今年も思い出の川南に参りました。こうして霊鎮まる社のみ前に立つと、この地で訓練した亡き戦友達の面影が瞼に浮かびます。緒戦のパレンバン作戦は眩いばかりの勝利でしたが、十九年以降の比島方面の作戦、更に又義烈空挺隊の特攻作戦を顧みると、あの苛烈な戦局に処し、我々は救国の悲願に燃え、激しい訓練を積み、必勝の信念をもって戦に臨みました。私として特に忘れ難いのは、高千穂部隊と呼ばれた第二挺進団を送り出した時のことであります。十九年十月二十四日動員が下令され、挺進第三聯隊は翌日の未明には屯営を立ち、空母に乗る為佐世保に向かいました。ある人は最愛の妻にただ一言「達者で暮らせ」と言って、振り返ることもなく発ったと聞きました。この人達殆どが靖國の神となられました。この土地と残す家族に断ち難い思いがあったでしょう。しかし、それを振り切って進むのが当時のもののふでした。そのまずらおが此処に鎮まり在わすことを思えば、粛然たる感がいたします。

思い出多いこの郷、人の心の醇朴なまほろばに、どうか神鎮まり下さい。ここに追想の腰折れを捧げます。

川南追想譜

遠つみおやの神々の　歩み給いしこの郷に
訪い来れば懐かしく　語りかけなむ山や川
翠巒仰ぐ　尾鈴山　旭日きらめく　日向灘
唐瀬の原に武を練りし　あの青春の一齣に
哀歓頒ちし友がきの　数多戦に散りうせて
瞼に浮かぶ益荒男の　籠る霊屋に額突けば
大空に舞う落下傘　友が笑顔とかさなりて
思い果てなし老耄が　抱き続ける　追想譜

最後に地元出身の御祭神に申し上げます。私共は御生前のあなた方とは面識はございませんが、この土地柄に育まれたをのこなれば、さだめし勇敢に戦われたことと存じます。このように町民挙げてお祭り申し上げ、私共も真心もって合掌拝礼致しております。どうか御心泰く御鎮座下さい。

挺進部隊戦友代表　田中　賢一

例年地元の中学女生徒が神楽を奉納する

この地に来て思い出す事

私は陸軍挺進部隊の一員として緒戦の作戦にも参加したが、顧みて最も印象深いのは、比島方面に作戦した第二挺進団を送り出した時のことである。

挺進第三聯隊の動員は十九年十月二十四日に下令された。この時私は陸軍挺進練習部の下士官候補者隊長をしており、隊長室にいたが、練習部高級部付徳永大佐から呼び出しがあって、動員を知った。下士官候補者はすぐ原隊に帰せという。当時聯隊は戦時編制通りになっているので問題はないが、続いて動員下令されるであろう第二挺進団司令部は、挺進練習部で編成しなければならない。将校は動員計画で戦時命課がきまっていて、挺進団長は徳永賢治大佐、私は部員に内定していた。

徳永大佐は私に命じた。三聯隊は空母に乗って比島に向かうことになったので、直ぐに佐世保に行って準備せよと。中央からその指示があったのは午後だったと記憶する。私は夜の急行で佐世保にむかった。その前に下士官候補者隊に戻って解散を宣した。区隊長は練習部と聯隊から出ており五人いた。顧みればこの人達は全部戦死してしまった。准尉は一人、この人も戦死した。今でも一人一人の顔が鮮明に思い浮か

ぶ。

私は佐世保に行き先ず海軍と打合わせた。空母は隼鷹で間もなく入港するという。次いで重砲兵聯隊へ行き部隊の宿泊について打ち合わせて、聯隊長達の泊る宿を設営した。そうこうしているうちに部隊が到着したので、その晩は聯隊長の宿舎で一献汲み交わした。居並ぶ者、聯隊長白井恒春中佐、聯隊付土屋茂少佐、副官河野寿大尉、中隊長（番号順）松下兼道、桂善彦、大城隆、蓬田正之、重火器中隊長久富薫大尉。私にとっては皆昵懇な間柄だった。中でも白井聯隊長は十期も先輩ではあったが、高鍋における借家が隣だったので、家族ぐるみのお付き合いで、毎朝声を掛け合い家を出て、通勤バスの停留所へ向かうという深い御縁だった。

その晩は灯火管制のほの暗い室内で、特に気負うこともなく、また悲壮感もなく、寛いだ一時を過ごした。思えばあの顔触れのうちで大城大尉以外すべて帰らぬ人となった。大城大尉と久富大尉は第二次挺進部隊だったが、作戦打切りとなりルソン島で戦い、久富大尉は戦死し大城大尉は生き残った。そのほかの人はレイテに降下し、聯隊長と蓬田大尉以外は何処で戦死したのかさえも判らない。

話は元に戻り、将兵は翌日乗艦した。岸壁で見送った私に先日まで下士候隊にいた兵長連中は、私の前を通るとき懐かし気に敬礼してくれた。乗艦したら付けろと言われたとて伍長の階級章を見せた者もいた。規則では十二月一日任官なのに、聯隊長が専行したのであろう。新任の伍長達レイテに降下した者に一人の生存者もなく、ルソン島やネグロス島に戦った者に僅かに生還者があり、戦後二人ばかり出会った。

白井聯隊長に何か奥さんにお伝えすることはありませんかと申すと、何もないと言われ、私も追つけ参りますと言って別れた。

さて私は任務を終えて帰ってみると、徳永大佐が言うのには、稲本が戻って来て是非連れてってくれと言うので、部員を譲れとのこと。稲本少佐は以前三聯隊の本部付だったが、一年ほど前に航空士官学校付に転出していた。それが今度の動員で人が不足すると中央で思ったのか、練習部付として戻されてきた。

彼の言分は田中は第一回の時部員として戦場に出ている今度は俺の番だと、徳永大佐に強硬に食い下がったということだった。それに私の就くはずだった職は編制表では少佐である。彼は私より一年先輩で少佐、私はまだ大尉である。譲らざるを得なかった。結局私は練習部付としてとどまり、一ヶ月後に二代目の挺進戦車隊長に補せられ、内地に残った。

稲本少佐はレイテで戦死してしまった。志をともにした亡き人達に対する思いは尽きない。

ここで佐世保の宿で杯をかわした人達の最後について触れておきたい。

白井聯隊長については57号に「忘れ難い人」という題で既にのべた。

土屋少佐は聯隊長と共にブラウェン北飛行場に降下した。何十名かの部下を掌握し敵の施設などを破壊し大活躍したが、聯隊長の一行とは合流出来ず、第十六師団の歩兵第二十聯隊と一緒になって戦闘し、その最後は明らかでない。

河野副官は聯隊長に従い、ブラウェン確保を断念し287高地に在るとき、聯隊長に命ぜられ第十六師団に連絡に出て消息を断った。

松下第一中隊長は聯隊長と同じブラウェン北飛行場に降下した筈だが、全く消息が判らない。

桂第二中隊長はブラウェン南飛行場に降下する計画だったが、隣のサンパブロ飛行場に降下したらしい。米軍の資料によれば、この飛行場は大混乱に陥ったとある。この飛行場には第四聯隊の龜田大尉の指揮する一個小隊が降下することになっていた。一部は飛行場で十日まで頑張って玉砕し、主力はその前にブラウェン方向に移動したと述べているので、移動したのが桂中隊だろうと思うが、それ以上のことは判らない。

蓬田第四中隊長は降下直後から聯隊長と行動をともにし、軍司令部のあるカンキポットに辿り着いた。四聯隊の健全な者が軍司令部の護衛としてセブ島に脱出するとき、四聯隊第四中隊長の香月大尉が衰弱甚だしい蓬田大尉を連れて行こうとしたが、聯隊長の死んだこの地で死ぬとて肯んじなかった。

久富重火器中隊長はルソン島に残り、聯隊長無き後聯隊の残部を指揮して戦った。バレテ峠の戦闘などは戦史に輝く奮戦であるが、その後カガヤン河谷に転進し、飢餓甚だしい中よく部隊を統率して行動していた。八月一日ヒルモヘルモサという部落で病没した。

大城大尉は戦後自衛隊に入り、退職後交通事故で亡くなった。

左 白井聯隊長、右 河野副官

特殊潜航艇

―「海軍」編集委員会の本より―

発想、試作と生産開始

昭和七年のはじめ、当時艦政本部第一部第二課（水雷兵器担当）長であった岸本鹿子治大佐は、人間の乗った大型魚雷状の潜航艇をもって敵艦を襲撃し、魚雷を発射して必中を期する新兵器を着想した。これは日露戦争で横尾敬義少尉が魚雷を抱いて敵艦襲撃を企図した戦例にヒントを得たものである。その後、第一次大戦でイタリアが人間魚雷を使った戦例もあった。

潜航艇についての岸本大佐の最初の基本構想は次のとおりである。

一、人間が乗ること。

二、艦隊戦闘において集中的に使用するものとして、水中速力三〇節（米艦隊の一・五倍）とすること。

三、魚雷発射管を二門とすること。

四、航続力は彼我砲戦距離を基として、魚雷発射後は戦場に止まり、後でこれを収容することとし、六〇粁とすること。

これにより同年夏には、いちおうの成案を得た。そこで、機密保持と上申途中の反対を避けるため、順序を経ずに伏見宮軍令部総長に直接説明した。総長は「決死的ではあるが収容を考えており、決して必死ではない」ことを確めたうえ、本兵器の開発を決断し、これについての研究を海軍省に要求した。

研究を開始することとなった艦政本部では、委員組織で設計を開始し、極秘裡に短期間で設計を終わった。電池専用、水中速力二五節、航続距離六〇粁であった。

この設計で七年十月呉海軍工廠魚雷実験部に試作を命じ、翌八年八月以降乗員二名で各種の性能実験を行った。外洋実験も行って二二節／五〇分の好成績を得た。

軍令部は、この兵器を艦隊決戦に使うためには相当多数のものを使用することが不可欠であるので、その搭載艦建造の必要を認めた。搭載艦を前進部隊か主隊に随伴させて、展開時に適時発進させ、艇は自力をもって敵主力に近接して攻撃行動に移り、味方主力は敵をその海面に誘致するよう行動するという構想である。したがって、この兵器をもっていることは絶対に敵に知られてはならないので、本艇の機密保持を厳重にするとともに、搭載艦も水上機母艦として建造し、有事の場合、状況をみながら改造することにした。

昭和十四年七月、「甲標的」と仮称することに決定し、二基の製造を呉海軍工廠に発令した。翌十五年四月末に第一基が、同六月末に第二基が完成し、五月から実験を開始、七、八月にはこの二基を「千代田」に搭載して伊予灘にて発進実験を行い、二〇節での発進に成功した。二一・五節、約五十分の成績を得、相当の波浪でも襲撃可能の結論に達した。同年九月正式兵器に採用され、翌十六年八月末には母艦一隻分の一二基が完成した。また、これを搭載する「千歳」は昭和十三年七月、「千代田」は同年十二月竣工し、「日進」も建造中であった。

訓練開始

時局切迫に伴い各種準備も進捗しているので、特殊潜航艇部隊の整備に着手することになり、まず昭和十五年十一月十五日付で搭乗員として岩佐直治中尉と秋枝三郎中尉の二人が千代田乗組を命ぜられ、翌十六年一月十日には「千代田」が改装工事を終えて艦隊に編入された。一月中旬から広島県倉橋島大進付近で特殊潜航艇投下訓練を開始し、ついで基地を愛媛県三机湾に移し、三月十二日から同月二十日まで実験をかね、第一期訓練を行った。ついで四月十五日付で第一期搭乗士官一二名中一〇名と下士官一二名が発令された。

講習員と完成した特殊潜航艇は全部呉海軍航空隊沖の鳥小島を基地とし呉工廠魚雷実験部秘密室において取り扱い等の座学を、また海軍潜水学校で机上襲撃演習を行った。続いて呉工廠の曳船「呉丸」を母船として基地訓練を開始し、五月中旬には「千代田」からの投下訓練を行った。八月十八日の襲撃訓練においては魚雷を目標艦「千代田」に命中させ、八月二十日に第二期訓練を終った。

ハワイ作戦参加決定

訓練が進むにつれ、日米間の険悪な情勢も反映して搭乗員の間に彼我主力決戦の機会は少ないのではないか、それまで拱手傍観するのは忍び得ないから、これを潜水艦に搭載し、敵根拠地の港湾奇襲に使用すべきである、との議が盛りあがってきた。

そこで先任搭乗員岩佐中尉は、開戦劈頭敵艦隊

根拠地に潜入し奇襲を敢行することを研究し、原田千代田艦長に具申した。原田艦長はたまたま特殊潜航艇訓練状況を視察に来ていた、軍令部の潜水艦主務部員有泉龍之助中佐にこれを説明し、その同意を得て、九月初旬岩佐中尉を同道して聯合艦隊旗艦を訪れ、山本長官に特殊潜航艇をもってする真珠湾潜入攻撃計画の採用を懇願したが、山本長官は襲撃後艇員の収容の見込みのないような方法は採用できないと却下した。

搭乗員は生還など期していなかったが、特殊潜航艇から電波を出して潜水艦がその方位を測定し、これを水中信号で知らせるなど生還の可能性について研究し、さらに航続時間の延長を計り、ようやく奇襲作戦参加の承認を得たのであった。

特殊潜航艇の攻撃

岩佐中尉の熱烈な志願によって、特殊潜航艇による真珠湾攻撃が決定したのは昭和十六年十月十三日であるが、特殊潜航艇を潜水艦に搭載することも、局地港湾を攻撃することも、考慮されていなかったので、次の工事と実験を特急作業として行うことになった。

一、特殊潜航艇の電池の一部を卸して、気蓄器を搭載し潜航時間を延ばす。

二、特殊潜航艇の頭部に防潜網よけの輪と潜望鏡の保護索を取り付ける。

三、搭載中の特殊潜航艇と潜水艦の間に連絡電話を新設する。

四、潜水艦に搭載用架台と締め付け用バンドを設ける。

五、特殊潜航艇に万一の場合の自爆装置をつける。

第一潜水戦隊の丙型潜水艦五隻（伊16、伊18、伊20、伊22、伊24）を至急呉に回航して、改造工事に着手し、十一月十日までに工事といちおうの実験を終った。

十一月十八日広島湾を出撃した特別攻撃隊は、第三潜水隊司令佐々木半九大佐指揮のもとに一路ハワイに向かい、十二月七日日没後真珠湾口に潜航接近して、特殊潜航艇を発進させた。その後の状況は不明であるが、諸種の状況から戦艦一隻を撃沈したものと判定された。米側の資料によれば二隻は潜入に失敗、他の三隻は潜入に成功した模様であるが、物的戦果はなかったようである。しかし、わが海軍部内に特攻的精神を盛りあげた効果は甚大であった。

真珠湾口に突入した５隻の特殊潜航艇の壮烈な行為は、海軍部内にとどまらず広く日本国民の戦意を高揚させ“九軍神”として上下の尊敬を集めた。
写真前列右より、酒巻少尉、古野中尉、岩佐大尉、横山中尉、広尾少尉、後列右より稲垣三曹、横山一曹、佐々木一曹、上田二曹、片山二曹。酒巻少尉は人事不省のまま海浜に打ちあげられて捕われ、のち生還した。

オアフ島ベローズ海岸に打ちあげられた特殊潜航艇の一隻。

大東亜戦争開戦記念日に方り
一野人の管見記

会員　山﨑　重武

昭和十六年十二月八日発動された大東亜戦争特にその緒戦における諸作戦と、これら作戦と相前後して行われた欧州における諸作戦特に独軍の西方電撃作戦（一九四〇）、同対ソ東方作戦（一九四一）、並びに英米連合軍のノルマンディ上陸作戦（一九四四）等を比較考察して見よう。

1、第二次世界大戦前夜における欧州の軍事思想

軍事思想の基礎理念となったものは第一次大戦特に欧州における長期持久戦への反省であった。各国はこの反省の上に立ってそれぞれの国情に応ずる教義を確立した。（英のリデルハート、仏のドゴール、独のグーデリアン等はこの思想理念の具体的創始者である。）この思想の根底にあるのは敵の肉体（軍隊）を乱打するのではなく、敵の頭脳（指揮官）を混乱させ、これに一撃を加えて短期決戦に導くという思想であり、この目的のため最も重要な要素は速度であった。

軍縮の夢に酔って平和を謳歌していた日本はこのような軍事思想の進歩に全く気付かず軍備は全く遅れていた。漸くこれに気付いたのはノモンハン事件の惨敗であり、山下調査団の報告であった。殷鑑遠からず、混在再びイラク派遣自衛隊について一国平和主義に酔った日本人はオタオタするのみである。

因に第一次大戦ではマルヌ会戦後、両軍の相対峙する戦線は北は北海から南はアルプスに至る延々八〇〇粁に及び相互に一進一退屍山血河の攻防を繰り返し遂に両軍共国力を使い果した。

2、独軍の西方電撃戦と日本軍のマレー縦断作戦（シンガポール攻略）

第一次大戦において独軍はシュリーフェン計画に基き右翼を強力にして西方よりパリを包囲する如く攻勢をとったがマルヌの会戦で仏軍の反撃に遭い一敗地に塗れた。マルヌ会戦の敗因は①オランダ・ベルギーの要塞攻略及び諸河川運河の渡河に時間を要したことと数百粁に及ぶ行軍（歩兵は徒歩、砲兵輜重は輓馬）で人馬の肉体疲労はその極に達し且糧食弾薬の追送間に合わず戦力涸渇した部隊で戦わざるを得なかったためであった。この教訓の反省から第二次大戦においては次のような処置を講じ完全に開戦初頭から仏軍降伏まで連続不断の奇襲を加えて連合軍を圧倒し続けた。

a、オランダ、ベルギーの河川運河の渡河点及び要塞の攻略には空挺部隊（特に爆音を発しないグライダーを多用）の奇襲降下を使用した。

b、徒歩の歩兵に換えて装甲人員運搬車（APC）乗車歩兵を用い強力な戦車部隊に先導させた。

c、輓馬砲兵に代えて自走砲を採用して弾薬車を牽引し、重点地区には急降下爆撃による対地攻撃を加えた。

d、第一次大戦の攻勢ルート（英仏海峡に沿うフランドル西方地域）と同じ経路を辿ると見せかけ主力は通過不能と見られていたアルゴンヌの森（シュヴァルト・ヴァルツ…黒い森の意）とミューズ河を踏破して英仏軍を分断し英軍をダンケルクに封じ込めた。このため急遽編成されたウェイガン線は忽ち突破された。

e、英仏軍崩壊と見るや、機を見るに敏なヒットラーは直ちに戦捷を政治的勝利に結びつけた。

3、日本軍のマレー縦断作戦（シンガポール攻略）

大東亜戦争における日本軍の陸上作戦で右の独軍西方電撃戦に匹敵するのは第15軍（山下奉文中将麾下）のマレー作戦であろう。日英両軍の兵力編組・装備は独英仏軍のそれに比べ極めて小規模（特に装甲機械化の点において）であったが、進路の選定、攻撃法の多種多様奇抜さをもって奇襲の利を収め作戦速度を速めることができた。蓋し速度を重視したことにおいては独電撃戦と軌を一にすると言ってよい。

4、独軍の対ソ東方作戦

一九四一年六月二十二日ヒットラーのナチス独軍は独ソ中立条約を一方的に破棄しソ連国境を越えて一斉にソ連領内に雪崩れ込んだ。精鋭を誇る独軍は一方的にソ軍を撃破しその年の末にはモスクワ直前まで進撃を続けたが冬将軍と共に形勢逆転し、四年間悪戦苦闘を続けたが一九四五年両方より進攻する米英軍を背後にし逆にその年の四月ナチスドイツはソ連に降伏するに至った。

独軍敗戦の原因を簡単に要約すれば次のような理由が挙げられるのではないか。（独から見た）

ア、社会主義国家は脆弱であり赤軍は弱いと見て侮ったのではないか。

イ、ドイツ人から見てロシヤ人は鈍重であるから近代戦には適さないと見た。（第一次大戦における戦闘の教訓）

ウ、ロシア機甲軍の予想外の強さ（志気、戦車の性能、生産力共に）
エ、予想以上の寒気（耐寒装備不十分）
オ、道路等インフラの事前調査不十分（泥濘に対する方策不十分）
カ、攻略と戦略の不一致（ヒットラー取巻連中と将軍達の意見の相違）例えばモスクワ前面に迫った時機のモスクワ攻略続行かコーカサスの油田占領のため軍の転進かの問題
キ、正規軍と親衛SS軍の相克

追記　独ソ戦の実相については未だ不明の点が多い。それはソ連が戦史の発表を禁じたからである。禁じた理由は戦後の米ソ対立の時代にソ連国内の実相を知られることを恐れた為であると言われている。それ程独ソ戦においてソ連の受けた損害（特に人的）は大きかった様である。

5、日本軍の南方諸地域に対する上陸作戦と米英軍のノルマンディ上陸作戦

日本軍の上陸作戦は一般的に作戦部隊を一般船舶に積載し、海軍艦艇護衛の下に対空、対潜警戒を厳にしつつ数百、数千粁を航行し、泊地に進入した後、上陸掩護部隊をもって上陸障害物を排除し上陸地域を確保（橋頭堡）し主力上陸というパターンであった。これに対し、米英軍のノルマンディ上陸作戦は一衣帯水の英仏海峡を渡るのみであり、日本軍のそれとは全面的に様相が異なった。すなわち

1、圧倒的航空戦力をもって上陸地域に攻撃を加えた。
2、上陸以前に要域に空挺を降下させ空挺堡を確保した。
3、海上より上陸する部隊はその装備に応じ性能の異なる多種多様の揚陸用舟艇を使用した。またこのような特殊任務に応ずるため海兵隊（米）コマンド部隊（英）が編制（成）されるようになった。
4、航空、艦砲威力強大なため上着陸地域を広く確保することが可能であった。

6、真珠湾攻撃

この作戦は単に戦史に残る偉大な海戦であったと言うよりも、国家民族の興亡を賭けた大作戦であったという方が適切であろう。米国の著名な戦史家ゴードン・プランゲも「この作戦は雄大な民族の叙事詩であった。」と記述している。

以下真珠湾攻撃について若干の考察を試みる。

a、航空攻撃の発想と発展　源田実少佐が海軍大学校の卒業論文で航空戦力の卓越を説き「戦艦大和・武蔵は万里の長城と同様無用の長物である。」と述べたことは有名である。明治以来海軍はその範をイギリス海軍に採った。アングロサクソンは海洋民族として自由な発想を好む。この点は大陸民族である保守的ゲルマンとは異なる。従ってこの自由な発想が逐次拡大し、特に大西瀧次郎中将、山本五十六連合艦隊司令長官の作戦立案の中に取り組まれて行ったと見られる。

何事によらず自由な発想こそ文明進化の萌芽である。

b、海軍伝統　ワシントン条約、ロンドン条約において日本は英米に比べ艦艇の戦力比重を抑えられた。この時東郷元帥の言った「比重は抑えられても訓練に制限はなかろう。」という訓戒を守り月月火水木金金の猛訓練に励んだ。この精華がこの作戦で結集開花したということができる。また艦艇戦力劣勢打破のため窮余の策として航空戦力の充実、作戦採用があったと言うこともできる。窮すれば通ずである。

戦前の対米海軍戦略は「戦艦を中心に輪型陣を組んで西太平洋に来航する」という米艦隊に対し潜水艦をもってその戦力を漸減しながら最後には同じように戦艦を中心とする戦力で一挙に敵を撃破するという構想であった。

c、指揮官の性格と作戦指導

山本長官は賭博的勝負が好きで将棋では歩の使い方が巧かったという。こういう性格も真珠湾航空攻撃を促す一因になったと思われる。また第一次攻撃に続いて二撃、三撃を主張する第三戦隊司令官山口多聞少将と南雲機動部隊司令長官の一撃撤退の命令にも作戦思想は指揮官の性格によること大なり」と痛感させられる。

d、情報収集と奇襲策

「米国太平洋艦隊が何時、何処に、どのような状態にあるか」ということを知ることは攻撃奏功の最大要件であった。このため無線の傍受とオワフ島軍港の見張りに万全を期した。

また、艦隊行動の秘匿のため、南部・中部・北部の各接近路の中、最も航行困難にして天候不良ないし発見困難な北方接近路を選び無線は瀬戸内海の旗艦より発する放送のみとしたことも奇襲成功の要因であった。

e、戦術と技術の一致

海軍の戦闘は技術的考慮の上に成り立つ、米戦艦の甲板、舷側の強度に応ずる爆弾、魚雷の効果を実験し、これに応ずる爆弾・魚雷の製造・投

下高度及び位置を設定し、机上及び真珠湾に似た地形で猛訓練を重ねた。鹿児島錦江湾と城山付近の反覆訓練は有名であり、爆音のため付近の鶏は卵を産まなくなったという話が残っている。

f、作戦の効果とその影響

山本長官の構想によれば、「日米交戦の状態が永く続けば日米の国力から見て日本に勝目はないので、緒戦において日本に来攻するであろう米太平洋艦隊に殲滅的打撃を与えれば或は講和の機を得ることができるかも知れない」という一縷の望みがあり、この作戦を決行したと言われているがその結果は次のようであり彼の希望は夢と化した。

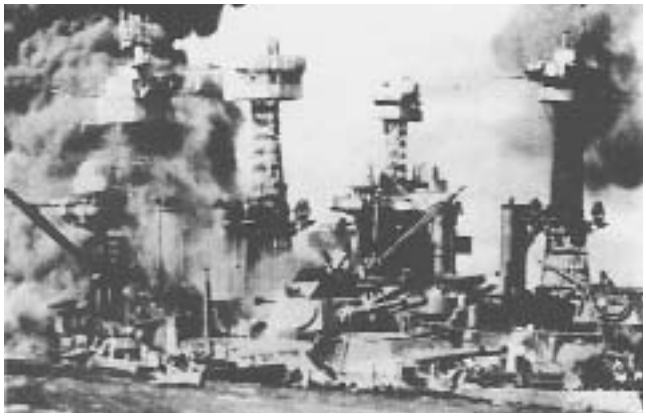
1、在米大使館の怠慢により最後通告の時刻を失したため老獪なルーズベルトに乗ぜられ「パール・ハーバーを忘れるな」の宣伝に利用され却って米国民の志気を昂揚する結果となった。

日本の航空戦力に目覚めた米海軍はその後空母艦隊を重視し空母を主力とする機動部隊が海戦の使命を制するようになった。

2、戦果の大に慢心を起こした日本海軍は、じ後の作戦が放漫に化して行った。印度洋作戦及び米濠遮断作戦のように徒に戦面を拡げ、攻勢終末線の限界を超え、じ後の作戦を逐次防勢的なものにした。

3、然しながら日本国民の志気を昂揚せしめた精神的効果は絶大で、じ後の作戦四年間の戦争の牽引力となり、最後は特攻攻撃の精華となり日本民族永遠の精神的糧となった事実を我々は忘れてはなるまい。

思うに「ペリー来航以来鬱屈した精神的対英米爆発であった」ということもできる。



ハワイで壊滅的被害を受けた米艦隊

山崎氏の戦史論を読み　ふと連想したこと

田中　賢一

これは全く分野を異にするが、国史学の泰斗平泉澄先生に次の一文がある

「およそ山は国界に属せりといへども、山を愛する人に属するなり。聖賢山に住む時、山之に属するが故に、樹木欝茂なり、禽獣霊秀なり、これ聖賢の徳をかうふらしむるゆゑなり。しるべし山は賢をこのむ實あり」とは道元禅師の語であるが、今その山を歴史に置き換へれば、以て世の唯物偏向を戒めるに足るであらう。

歴史は歴史を敬愛する人に属し、その門を開き、その手を執る。之に反して、無視し軽視する者に対しては、当然その面を蓋ひ、その袂を分つ。先人の情感、意志、努力を尊敬し、その教訓を信愛し、その志業を継承せんとする者に対して、歴史は無限の喜と力を与える。若し一定の公式にあてはめ、物の支出する所として把握しようとすれば、先人に声無く、歴史は影をうつさぬであらう

我が詩集より

会員　大和瀬克司

米国の非道をなじる

都市を焼き原子爆弾まで使い
無辜の民を殺戮し
軍事裁判では己れの非は頬被り
多くの日本人を処刑した
それが文明だと称え

原子爆弾

効果を試すため都市を使う
残忍の極み
「過はくりかえしません」と書いた
日本人のおろかさ
日本はトルーマンを許した
大統領よ
広島長崎に来て謝ったらどうだ

日本無力化の策謀

彼は恐れた　日本車を　特攻隊を
押し付けた憲法も　教育基本法も
狙いはそこにあった
東京裁判の茶番劇
これもその一つ
彼の策謀は成功した
成功させたのは日本人だ
いまだに尾を曳く東京裁判史観

世田谷観音寺文化財紹介(4)

七、地蔵菩薩

お地蔵様は、人々に替ってその苦を受けて下さると云うことで、身代り（代受苦）地蔵とも呼ばれている。

山門に至る参道の左側、代官屋敷（現客殿）の門の右前に鎮座されている。

原型は、京都六波羅密寺にある地蔵菩薩像で、代受苦は特攻烈士のお気持ちそのものであると云うことから、賢照和尚が20年位前に甲州の石屋に彫らせたものである。

八、さざれ石

代受苦菩薩に向って右にさざれ石がある。岐阜県揖斐郡春日村の産で、岐阜県文化財に指定されている。千鳥ヶ淵墓苑に納められる時に、当時の美山要蔵理事長から声が掛かって、観音寺も一枚乗って同じトラックで運び込まれたものである。

九、小田原代官屋敷

先代睦賢和尚は小田原代官屋敷を昭和14年に購入された。その当時は買手があれば、代官屋敷はどんどん手放されていたそうで、先代はその屋敷を生田の所有地に移築された。

近くに住んでいて戦前から交友のあった賀陽興宣氏が、自由の身となって政界入りを志した時に、先代は全面的に応援して賀陽氏は当選、自由党入りした。

以来睦賢和尚は、自由党の主要メンバーとは深い友誼関係で結ばれることになった。和尚は代官屋敷を自由党のクラブに提供すると申し出て、多分当時幹事長であったろう佐藤栄作氏が、何回か下見に来られたそうである。

処が昭和30年5月に先代が急逝されて話は沙汰止みとなり、この様な形の政界との交流は肌に合わない賢照和尚は、昭和32年に桜の大木10本位を伐採して現在地に移築、以来客殿として使用されている。

写真Aで右端に地蔵菩薩が写っているので、屋敷の位置関係はお判りであろう。客殿に向って右側、玄関の硝子格子戸の先濡れ縁の所が客間で（写真B）、毎月18日月例法要の後参会者が此の部屋で一時懇談の時を過す。

その先の庭先に唐楓の植木鉢がある（写真C）。寺内寿一元帥の祖父の代からで樹齢一四〇年、元帥が生前こよなく愛されていたそうである。元帥没後未亡人（小田原在住）が保管しておられたが、25～26年前に寄贈を受けたものである。

C．寺内寿一元帥が愛でた唐楓鉢

B．客殿右半分を望む

A．表門を通して玄関を望む

鎮魂（遺稿）

真言宗豊山派正福寺
住職　故　小久保　隆福

故小久保隆福師は、平成14年5月21日～24日に行われた沖縄特攻基地・洋上慰霊巡拝と、平成16年4月19日～25日にかけて行われた、台湾・宮古・石垣特攻基地慰霊巡拝行に参加されて、各所で行われた慰霊法要に導師役を果して下さいました。遷化（平成17年9月22日）の報に接し、謹んで御奉仕に感謝し、心から追悼の誠を捧げます。

（正福寺住所　〒369-1102　埼玉県大里郡川本町瀬山一四一　電話　〇四八―五八三―二六一二）

戦後六十年、半世紀である。青少年の凶悪なる犯罪、政界から経済界そしてついに学者から医学の世界にまで及んだ犯罪多発の日本、自己の我欲のことさらに考えられないようである。変わっていく日本国の姿が寒心にたえない。

戦争に負けたことがないという神話を信じ、天皇信仰によって国家から守られて来た二十二才の軍人には、大日本帝国が敗れるということは夢にだに考えられないことであった。しかし現実には敗れてしまった。日本は敗戦国になったのである。今まで信じていたものは、すべてが信じられなくなった。虚脱状態になった。ところが今その日本は、いまや物質的に豊かになり、食べるもの、着るものが自由に手に入る、昭和二〇年代には想像もできなかった物の豊かな世の中である。敗戦時日本列島は、中部地方中央フォッサマグナから真二つに分断され、米ソによって分割支配され、婦女子は自由にもてあそばれてしまうという流言まで飛び交った。私は自分自身が戦犯者であるように感じられて、おもてを歩くにもうしろめたく、生きていることにためらいをいだきつづけていた。うしろめたさから自決した軍人はたくさんいた。

私は昭和二十年八月六日、八時十分、広島で一発の原爆の直撃を受けた。全身血だらけとなり生死の境をさまよい、三日後にようやく海軍療養所に収容されて一命をとりとめた。この間軍刀はもっていたが遂に自決はできなかった。六十年過ぎた今も、第一線をはじめそれぞれの立場で散華した多くの将校、先輩、同級生のことなど、一日たりとも忘れることはできない。あしたの勤めに夕べの祈りに絶ゆることなく、我が青春時代からの心情を捧げて居る。

旧制中学二年生、十五才にもならぬ少年が、何のためらいもなく志願して飛行予科練生となり、勇躍霞ヶ浦の大空に舞い猛訓練の後、十八・九才で敵中に突っ込み、大空の華と散っていった。特攻の命令を受けた俊才の同級生は、最後の別れの挨拶に帰り、母のいます我が家の上空を二回三回と旋回し翼を振って永遠の別れを告げた。そして敵陣に突っ込みそのまま帰ってこなかった。

サイパンに散った二十三才の将校は、母親にいとまごいするために帰宅した。一人児長男のいとしき我が子の後ろ姿を見送った母親は、一言もいわず黙ったまま姿が見えなくなるまで見送った。のどに染み入るような酒を酌み交わし、父母に遺書を残して、生きて再び会うこと無く異境の地で戦病死した親友がいる。その遺書は今も仏壇に供えてある。

妻や子供を残し一瞬のうちに魔のヒカリとともに消えてしまった広島の第一陸軍病院に入院中の三十余才の部下だった上等兵。大陸の花嫁といふ名のもとに当時の満州に渡り二十一才の青春を終わった女子同級生。「火筒のひびき遠ざかる…」という歌を胸に秘め身を挺した従軍看護婦、元気な姿で出て征き、白木の箱となって友や先輩、妻や幼い遺児、我が子の胸に抱かれ「無言の凱旋」をした三〇〇万の勇士たち、どの人達も今思うだに胸がしめつけられる。陸軍士官学校、海軍兵学校、学徒出陣で学業半ばで征った先輩や同級生の俊秀を思うとその格別の悲しみと無念さは、今も昨日のごとくハッキリ眼前に浮かんでくる。

河崎義和著、『母の大罪』を読むと、戦争を背景にしょった母は立派すぎて悲しい。子に尽くし、子に全てを捧げた母の尊さに述べる言の葉がない。昭和二十一年四月二十六日巣鴨プリンスで日本人として初の絞首刑になった陸軍中尉、由利徹の母は「もし私が軍人一心に養育しなかったら倅は戦犯にならなかったのです。全くこのおろかな母の罪です。」と語っている。

昭和二〇年五月、上野音楽学校出身の二人の学徒兵は、佐賀県烏栖小学校の体育館で今生の別れにベートーヴェンの『月光』を弾いて「この戦争はいつか終ります。しかし今自分たちが死なければこの国を君達に残すことはできません」といって特攻隊員として敵に突っ込んだ。二人の声は、今も沖縄のわだつみに美しくきこえてくる。

我が家のすぐ裏にあった熊谷陸軍飛行学校で、少年飛行生の生徒隊長として訓育を担当した茨城県出身の藤井一（はじめ）少佐は、第四十五振武隊長として知覧から出撃し沖縄の空に散った。夫の固

い決意を知った妻ふくさんは「私たちがいたのでは後顧の憂いになり、思う存分の活躍ができないでしょうから、一足先に征って待っています」の主旨の遺書を残し、昭和十九年十二月十五日、厳寒の朝、晴着を着せた次女の千恵ちゃん（二才）をおんぶし、長女一子ちゃん（三才）の手と自分の手を紐で結んで、すぐ前の清き流れの荒川に入水自殺して夫の成功を祈った。急報で駆け付けた夫が前述のごとく知覧を出撃したのは五か月後の昭和二十年五月二十八日だった。この親子四人のお墓は筑波山を望む郷里の小高い丘の上に、寄り添うように今も祭られて居る。

私の被爆体験はこれまで黙して語らなかった。しかし近く我が命の終焉を迎えなければならないことを思うと、その一端を申し上げて諸霊に答えたいと思う。忘れもしない、それは仏通寺にて、山崎益州老師に師事して座禅をし、軍神とあがめられた杉本五郎中佐の墓参をすませて、広島の第一陸軍病院に入院中の部下上等兵を見舞うべく、市電に乗ったときである。昭和二十年八月六日朝八時十分であった。前方に乗っていたので真正面から「ヒカリ」をまともに全身に受けた。

全身、特に上半身、顔、喉、右膊は殺人光線と同時にガラスの破片が全体に降り懸かり、軍服を通して突き刺さった。唇は茸のようにめくりあがり、目は失明し、血だらけのまま電車の車体諸共吹き飛ばされ、ほうり出されてたおれてしまった。気絶したのである。

真夏の焼けつく太陽の暑さと、炎上してくる周囲の炎の熱風と煙で、気絶から覚醒させられた。軍刀を杖に立ち上がろうとしても力尽きて倒れてしまった。それを繰り返しているうちに目がやられて見えないことに気がついた。見えない目に指で唾を付け、親指と人差し指で半開きにしながらあてどもなく、血だらけ、傷だらけの人の波に合流して川岸に辿りついた。川の名は知らない。みんな水を求めての行動だったのであろう。川には人がポカリポカリ浮いて流されて居た。回りには母を求めつつ泣き叫びながら倒れていく子供達、我が子の名を呼びつつ火の付いたカンタン服のままでさまよい倒れていく母親、すべて血だらけで、阿修羅の巷地獄である。

翌朝、海軍のトラックで八本松の駅に運ばれ、自分の部隊にかつぎこまれ西条の海軍療養所に収容されたのが三日後であった。そして連日連夜軍医、看護婦、部下の崇高ともいうべき献身的なみとりによって命をとりとめた。輸血は二週間もつづけたそうである。そしてその年の暮れに父母の待つ家に帰ることができた。

三〇有余万人ものひとが死んでいった広島の被爆者の中で、今、自分が生き続けて居るのが不思議でならない。

毎年四月広島部隊の戦友と、靖國神社へ詣で、三百四十万の英霊に感謝と慰霊の誠を捧げている。命ある限り続けたいと思っている。

平成十二年四月桜花爛漫の二日、真言宗豊山派長寿会の副会長であり、名書家である菅生戒応大僧正先生に「鎮魂」の美しい文字を御揮毫いただき、それを碑に彫って建立した。

当日は広島部隊の元連隊長で、長崎にお住まいの九十四才になる老上官を始め、元特攻隊の将兵、私の寺の檀家で戦死せる四十三柱のご遺族の方々などにご参列いただきお焼香を賜った、長い長い念願であった「鎮魂」の碑を建立し開眼供養ができたのである。今あらためて全国戦没者の英霊に感謝の誠を捧げたいと思う。

合掌

平成十七年

畏友安田義人君の死を悼む

田中　賢一

御令室から喪中につきという葉書を頂き、御逝去を知った。十二月十日、九十才で亡くなったという。私は遅ればせながら次の拙い歌を添えて悔み状を差し上げた。

あらたまの若水汲みし人なきを
　み心しのび贈る腰折れ
在りし日の姿浮かびて尽きざるに
　よはひ思へば輪廻なるかな
逝く雲や流るる水と去りし人
　思い出のみはとはに留まる

この人とは戦争中は接する機会はなかったが、特攻協会の会員として知遇を得るに到った。加藤戦隊にあって17年5月22日に加藤戦隊長がアキャブ沖のベンガル湾上空で、散華なさった時の僚機だったと聞き近親感を抱き、往時のことを語り合った。戦隊長戦死のことを私はトングーに在って聞いた。バレンバン作戦でも、次の不成功に終ったラシオ空挺作戦でも、六十四戦隊は援護に任じてくれた。そんなことで二人の間には話題は絶えなかった。

この戦隊に在った我が同期生で朝鮮出身の崔鳴夏君が、マレー作戦で戦死した時の景況もこの人から聞いた。

いくさやみ六十年過ぎぬかたりべの
　また一人逝く悲しからずや

憲法と教育基本法の改正

―改正しなければ戦没特攻隊員の遺徳顕彰は出来ぬ―

会員　三沢　錬一

現在の国内における道義の頽廃と、対外的には中国や韓国から軽蔑内政干渉を招いていることの原因は、形而下は憲法と教育基本法にあり、形而上は東京裁判史観に洗脳せられたことにある。ここでは、前者、即ち憲法と教育基本法について私見をのべる。

現行憲法はGHQの役人が一夜で作った物であることは、衆知の通りで、第九条が著しく現状と乖離していることは、誰でも認識しているが、私は思うに、前文に言っていることは、亡国を促す憲法と言わざるを得ない。そこでは次の通り述べている。

「日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであって、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」と。

全くの他力本願と言おうか、念仏を唱えている間に国が滅ぼされる憲法である。

それから数行後には次のような驚くべき表現がある。

「われらは、いづれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならないのであって、云々」これは日本国の憲法であって、他国を規制するものではない。中共政府をして、ますます組し易いと思わせるだけである。中共や韓国の内政干渉の根底にはこのとぼけた憲法があるからだ。

北鮮のミサイルが我が国を狙っていても、この憲法は防いでくれると護憲論者は本当に思っているのか。

憲法について言うことは沢山あるが、あまりにもくだらな過ぎて、一日も早く自主憲法を制定してもらわねば、国滅んで憲法残ることになる。

次は教育基本法について。憲法は占領下の昭和二十一年十一月三日に交付されたが、教育基本法はそれを受けて、翌二十二年三月三十一日に制定された。この法律の前文に「日本国憲法の精神に則り」という文面がある通り、受け入れ難いことは至るところにある。端的に申せばどんな人間を養成しようかということについて、「個人の尊厳を重んじ、眞理と平和を希求する人間の育成を期するとともに、普遍的にしてしかも個性豊かな文化の創造を目指す教育を普及徹底しなければならない」と前文で謳っている。これを承けて第二条で「学問の自由を尊重し、実際生活に即し、自発的精神を養い、自他の敬愛と協力によって、文化の創造と発展に貢献するように努めなければならない」と述べている。

人のいい地球人を養成しようとしているのか。他の天体の生物が攻めてくるならば、地球人も必要あろうが、こんなことで激しい国際抗争に勝つことができるだろうか。虎視眈々としている隣国に地球人の集団が、対抗できる筈がない。日本人、大和民族としてまず必要なのは、祖先の足跡、すなわち国史の体得である。教育勅語を弊履の如く捨て去ったが、このことについて次の通り教えておられる。

「朕惟フニ我ガ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ」と。

そして日本国民として最も必要なことについて「我ガ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我ガ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス」と諭しておられる。これについで個人として備えるべき徳目について、父母に孝、兄弟に友、以下幾つかを挙げ、そして「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ」とある。これなくしてどうして豺狼の国に対抗できようか。

以上は国家防衛に関する欠陥であるが、最近の社会事象を見るに憂慮に堪えないことが多い。青少年の犯罪の多発、就中殺人等の凶悪犯の多いことである。現在の教育基本法は個性尊重とか自発的精神の涵養とかを強調する余り、学校教育や家庭の躾が放任に流れている。教育勅語では個人が具備すべき徳目がいくつか掲げられているが、未成年者教育で放任に流れるような弊害の入り込む余地は全くない。そして最後の一言が特に肯綮にあたっている。

「之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト倶ニ拳々服膺シテ咸其徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ」

教育こそ国を興す根本、教育基本法の改正こそ焦眉の急である。

松井石根大将と興亜観音

興亜観音を守る会
理事長　大和瀬克司

興亜観音に託された松井閣下の思いは、単に上海・南京戦線で戦死した日支両軍将兵の鎮魂慰霊だけでなく、更に大いなる思いが興亜の二文字に込められています。このことは次の一件によって理解できます。

戦後興亜観音をお守りしていた方々が、占領軍の思惑を考えれば興亜ではまずいのではなかろうか「光和観音」と改名した方がよいのではないかと相談し、当時巣鴨に収監されていた松井閣下にお話したそうです。閣下は代表者の話が改名のことにおよぶと、大喝一声「黙れ、改名など相ならぬ。どうしても改名しなければならぬのなら、即刻御仏を相模の海に沈めてしまえ」と、烈火の如く御怒りになられたとのことです。

閣下は何故それほどまでに興亜の文字にこだわられたのでしょうか。思うに閣下の胸中には、欧米の植民地として桎梏下に在った東亜諸民族を解放して、独立させたいという願望があったと思います。その願望は我が国の敗戦にも拘らず、戦後実現されたのであります。

何時の日か、大東亜戦争の結果独立した東亜諸民族の首脳が伊豆山に集合し、興亜観音を中心に胸襟を開いて、東亜永遠の平和を語り合う日が来ればと、空しい思いを抱いております。

昭和20年夏、熱海の自宅にて——朝夕２回、山道を登り観音堂に参詣する毎日であった

至道
無難
丁亥秋日
石根

至道ニ難無シ
昭和二十二年秋日
松井石根

出典　鑑智大師「信心銘」
至道無難（至道　難キコト無シ）
唯嫌揀択（タダ揀択ヲ嫌フノミ）

平成戯れ歌

作者　会員　山本　博史

編者敬白　会員の山本博史さんは、元騎兵将校で私と同じ騎兵第一旅団の隣聯隊に在隊され、知己の間柄で機智に富んだ仁。平成戯れ歌と称し、いろは四十八文字を頭につけた短切な語句で構成された歌を作り私に示される。平成六年以降作られた歌九十篇を集録して此の度出版された。はしがきに言う「江戸時代、庶民は為政者に対し街角などに、戯れ歌等を掲げ、皮肉ったとの故事に倣い、言いたい放題の独り言です」と。世情を批判したり、社会事象に意見を述べたり、語句軽妙、酒脱にして意を尽くして妙である。

この原稿を書いている時、十六才の少年が同級生の少女を殺したというニュースが入った。そこで次の一篇を紹介させてもらう。

田中　賢一

子供の犯罪

平成十二年五月

い　一体どうしているの？　子供の教育
ろ　ろくでもない　日教組
は　白日（ハクジツ）の下（モト）にさらされた教育
に　日本人を　こんなに
ほ　暴悪に　したのに
へ　へいっちゃらな顔している左翼政党と日教組
と　どうしてくれる心算（ツモリ）だろう
ち　小さな子供に植付ける権利ばかりで
り　理解に苦しむ
ぬ　ぬくぬく育った子供達
る　るるとのべてる私、僕の権利、権利
を　横行している　悪行は
わ　我（ワ）が儘（ママ）勝手に
か　我（ガ）を張ることばかり
よ　夜遊び　夜歩き　要注意
た　他（タ）を思いやる心のなさが
れ　冷酷な事件を引き起こす
そ　そのルーツを調べるならば
つ　つまりは親の教育、日教組の教育
ね　根っこは　すぐそばにある
な　蔑（ナイガシ）ろにしていた「しつけ」のために
ら　烙印（ラクイン）を子供がおされぬよう注意
む　無思慮な親が多過ぎる
う　ウェルネスを目ざす生き方を
い　意に介するよう教えなさい
の　野放図では変な子が育つ
お　親の責任だ！
く　首枷（クビカセ）だからとて

や 役割をおろそかにする勿れ
ま 蒔かぬ種は生えぬ
け ケアレスミス　だなんて
ふ 分(ブ)が悪いと　言いたがるが
こ 子は親を見て育つ
え えてして
て 手を抜いて育てた子が
あ アウトローになり易い
さ さー　皆で考えよう
き きっと　悪い子にならぬよう
ゆ ゆめ　おろそかに　する勿れ
め 目立ちたがりやも　引っ込み思案も
み みんな　いい子のはずなのに…
し 忸怩(ジクジ)たる思いの親もあるだろう
え エアーポケットにはいったような
ひ 比を見ない子供の犯罪
も もう待ったなしの　教育改革
せ 精一杯の力を込めて
す 推薦せねばなりません
ん んーん　再三子供の犯罪を書きました

靖國神社における特攻奉納演劇のお知らせ

「流れる雲よ～未来より愛を込めて」
原作「飛行機雲」草部文子（第三十八回ギャラクシー奨励賞受賞作品）
場所　遊就館前特設会場
日時　3月21日(火)　19時30分開演
　　3月22日(水)～25日(土)　19時開演
　　3月26日(日)予備日　19時開演
（上演時間　1時間30分）

料金　前売　四千五百円
　　当日　五千円
※特攻会員はいずれも五百円割引
チケットの予約・お問い合わせ
特攻会員と言って左記に電話又は当日窓口で伝えて下さい。
電話　〇三―三三七七―〇一九六

梅花の賛

さ庭の隅に咲く梅の
色も香りも細やかに
厳しい寒さ凌ぎきて
春の訪れ告げるとも
弥生わかたぬ梅の花

こち吹かばと詠った道真公、遠い平安の昔から伝えられている故事。梅の花は日本人の心情に訴えるものがある。桜のような華やかさはない。散り際の風情もないが、寒さを凌ぎ一輪づつ開くところにえもいえぬ趣がある。そして春陽を待たずに消えてゆく。
梅一りん一りんづつの暖かさ

唐の昔玄宗の妃だった梅妃は、居所悉く梅を植えていたので梅妃と呼ばれていた。楊貴妃に寵を奪われ、長門殿に空しく日を送っていた。玄宗は憐れに思い、珍しい玉を贈ったが受けず、一詩を奉った

桂葉双眉久しく描かず
残妝涙に和して紅裳を汚す
長門尽日梳洗無し
何ぞ必ずしも珍珠寂蓼を
　　慰めん

妝＝粧

終戦に伴い自決した人々

前々号（64号）に産経新聞の首題の件を掲載し、これに漏れているものを各期各会に求め、前号に掲載した。これはその続きである。まだ提出してない各期各会は調査のうえ早く提出されたい。

冒頭の［　］内は回答を寄せた者の所属氏名で、太字は自決者を示す。

［古河乗員養成所14期久貫兼資］

小泉金太郎軍曹　紺五三一部隊　古河乗員養成所出身　8月18日真室川飛行場に於いて自決。

若宮三郎軍曹　新潟養成所出身　8月15日京城飛行場離陸、付近の川原に自爆自決。

袴田寛之軍曹　第八四振武隊　京都養成所出身　8月15日木脇飛行場内に於いて自爆14日戦死と届け出て靖國神社の御祭神となっている。

［元挺進飛行戦隊畠山卓次］

塩田金吾大尉　所属する挺進飛行戦隊は、比島方面の作戦で壊滅状態となり、朝鮮咸興で戦力回復中終戦を迎えた。塩田大尉は或る任務で15日米子まで飛んだが、飛行場で我がこと終わりぬと拳銃で自決した。

［陸士47期衣笠勤二］

木本正生少佐　航空総軍参謀だった。8月15日玉音放送を聞き直ちに宿舎に入り割腹自決した。

［特幹一期深井正昭］

栗城良人軍曹　少飛10期特攻玄武飛行隊の一員で、8月22日襲潭庄の宿舎に於いて、隊長宛てに「自己の所信により生還するに忍び難く、自決する許しを乞う」旨の遺書を残し、拳銃で自決した。

「全国回天会長小灘利春」

橋口　寛大尉　海兵72期　平生突撃隊特攻隊長　8月18日未明、自分が出撃する予定だった回天の操縦席に第二種軍装で座り、胸を拳銃で二発撃ち自決した。日記の最後に「臣道を尽くし得ざるを恨む」と自決直前に記しており、また遺書の最後に「先駆けし期友に申し訳なし。神州遂に護持し得ず」と記した上、回天で戦没した同期生十名の名前を連ねている。

松尾秀輔少尉　海兵74期　大神突撃隊付　終戦を迎え、甲板士官として隊内諸業務を整理した後、8月25日夜大神突撃隊の練兵場で正座し、手榴弾を左胸に当て自決した。

畠中和夫大尉　海兵72期　第一〇一突撃隊艇長　終戦を迎え、第214艇（乗員5名）を指揮し佐伯基地を出発、沖縄目指し豊後水道を南下し、8月18日佐多岬沖に達したが、転輪羅針儀が故障した。畠中艇長は艇員に帰投を指示し、自らは拳銃で自決した。

［陸士57期岩澤漸二］

雨宮文彦中尉　陸士57期　野砲兵第三聯隊補充隊　8月16日愛知県守山市外感応寺裏山で「遥か東方を拝し我今日自決す」と書き残し、軍刀で頚動脈を切りハンカチで血を拭い鞘に納め、東方に向かい伏せて絶命していた。

鈴木勇三中尉　陸士57期　歩兵第一四四聯隊　聯隊旗手だったが、ビルマのモールメン南方に在って、終戦にあたり軍旗を奉焼した。その三日後の8月20日、奉焼した場所に来て拳銃で自決した。

杉原滋男中尉　陸士57期　飛行第五五戦隊付　8月16日大阪住吉区南港にて自爆　遺文　散ることを急げますらをさくらばな七分咲きでは枝もたわまず

西川俊彦中尉　陸士57期　第一六八振武隊　8月18日八日市飛行場発進　郷里の岩村田小学校々庭に遺書を投下し、母校の野沢中学校の上空を旋回し北に向かい、浅間山南斜面に自爆した。遺書の一節皇国勃興の暁までは浅間山頂に厳として活きております。

福田　滋中尉　陸士57期　第二六教育飛行隊

西谷真碌中尉　陸士57期　第二六教育飛行隊

後藤宰久中尉　陸士57期　第二六教育飛行隊

以上三名は8月20日竹田宮搭乗機護衛の帰途、奉天飛行場で編隊自爆。前々号（64号）参照。

戸田徳二中尉　軍官学校2期　満州国禁衛隊　8月15日禁衛隊反乱時自決

野上正一中尉　軍官学校2期　満州国第一高射砲隊　8月15日詔書を拝し我がことおわりぬと陣地内にて東方を拝し、拳銃で自決した。

野田　弘中尉　軍官学校2期　満州国軍官学校区隊長　8月15日新京に於いて自決。

江口兵二中尉　陸士57期　歩兵一〇四聯隊　南支広西省に在ったが、戦後虜因の辱めをうけずとて、21年1月11日自決した。

［58期吉田豊・谷尾侃］

後藤博正少尉　陸士58期　広島櫛ヶ浜陸軍病院入院中　8月20日軍刀により自決。

東　浩三中尉　陸士58期　各務原近くの山中にて8月17日軍刀にて割腹自決

斎藤友良少尉　陸士58期満州孫呉の一二三師団歩兵七〇聯隊8月17日拳銃にて自決。

鈴木照行（59期に延期）相武台雄健神社にて8月23日自決。

今富幸雄少尉　陸士58期

菅野昌敏少尉　陸士58期

右二名とも8月15日満州山城鎮にて二式高練で自爆。

［少飛会橋本正雄］

松本鎮治兵長　少飛15期　第22飛行戦隊　8月16日　金浦飛行場近傍の民家にて拳銃で自決。

会員の増加に一層の努力を

我が協会では春は靖國神社で、秋は特攻観音で慰霊顕彰行事を実施しているが、新聞やテレビに報じられることもなく、参列者の心を満たしているに過ぎない。

世に特攻隊の精神を宣揚するにはこの会報以外には無い。それが為には会員を増加することが喫緊事である。一会員が一名を入会させれば忽ち会員数は倍となる。皆さんの御尽力を期待いたします。

習志野自衛隊見学者に頒つ

陸上自衛隊空挺団の在る習志野駐屯地には、空挺館と称する資料館があり、昔の挺進部隊関係の資料が沢山展示してある。年間三千人にも及ぶ部外者が見学に訪れるので、その都度見学記念として、二枚一組の絵葉書を与えている。この絵葉書は義烈空挺隊及びレイテ作戦の第二挺進団の一兵士が、出撃前何かを書き遺している写真である。ここでは紙面の都合で義烈のものだけを紹介する。

この二枚の葉書を入れた封筒には、次の文面が印刷してある。

「この二つの写真は、夕刻に出撃を控え、一兵士が何かを書きのこしている。義烈空挺隊はもとより、第二挺進団にあっても、この日出撃したものに一人の生還者もない。

六十年後の我々に、この人達は何と言うであらうか。

『散る桜残る桜も散る桜』と或る特攻隊員は書きのこした。また或る人は、『後に続くを信ず』と言って出て征った。戦い熄んだ今日、後に続くとは、この史実と精神を後世に確かと語り伝えることである」

我が先人の残したもの

奥山に名もなき花と咲きたれど
散りてこの世に香りとどめん
今村美好曹長
（隊長は奥山道郎大尉）

よしや身は千々に散るとも来る春に
また咲きいでん靖國のみや
関　三郎軍曹

待つありて眺むる月の涼しさよ
新妻幸雄少尉

続くものありと思へばもののふの
道ひたすらにかけしをのこら

義烈空挺隊　出撃を夕刻に控え宿舎で何か書き残す一隊員

沖縄作戦のとき航空特攻を成立させるため、敵飛行場を一時制圧しようと義烈空挺隊が使われた。20年5月24日熊本の健軍飛行場を発進し沖縄に向かった。敵航空の主飛行場読谷は翌々日朝まで完全に機能を喪失した。

全日本空挺同志会

万葉集の防人の歌を読み 特攻隊員の遺詠を連想する①

田中　賢一

万葉集時代の防人は特攻隊ではないが、東国から遥々筑紫の国に赴くことは、特攻出撃にも近い心情にあったと思う。特攻隊員こそ昭和の防人だったという感を深くする。

父母によせる情

父母も花にもがもや草枕旅は行くとも撃ごて行かむ

右の一首は、佐野の郡の丈部の黒当。

父母は花であったらなあ。草の枕の旅に行くにしても、ささげて持って行こう。

大君の命かしこみ磯に触り海原渡る父母を置きて

右の一首は、助丁丈部の造人麻呂

大君の御命令をうけたまわって、岩に触れて海原をわたる。父母をおいて。助丁とは補助の壮丁で、十八、九歳の者をいう。

父母え斎ひて待たね筑紫なる水漬く白玉取りて来までに

右の一首は、川原の虫麻呂

父母よ、潔斎してお待ちください。筑紫にある水につかっている白玉を取ってくるまで。

わが母の袖持ち撫でてわが故に泣きし心を忘らえぬかも

右の一首は、山辺の郡の上丁物部の乎刀良

私の母が、袖持ち撫でて、私のゆえに泣いた心を忘れられないなあ。

母刀自も玉にもがもや頂きて角髪の中にあへ纏かまくも

右の一首は、津守の宿禰小黒栖。

お母さんが玉だったらなあ、大事にして髪の中にまぜて巻いておくのに。

月日やは過ぐは往けども父母が玉の姿は忘れ為なふも

右の一首は、都賀の郡の上丁中臣部足国。

月日は過ぎゆくが、父母の尊い姿は忘れられないなあ。

津の国の海のなぎさに船装ひ発し出も時に母が目もがも

右の一首は、塩屋の郡の上丁丈部の足人

摂津の国の海のなぎさで、舟よそおいをして、立ち出る時に、母の顔があったなあ。

わが門の五株柳いつもいつも母が恋ひすすなりましつしも

右の一首は、結城の郡の矢作部の真長

私の門辺の五本柳のように、母上が恋するように、おなりになったことだ。

防人の父母を思う真情の籠もった歌を拾えば、以上のようなものがあるが、さて昭和の防人は。

思はじと思えどとかく思い出す故郷の母健やかにおわせ

石川誠三中尉　回天搭乗員、伊58潜水艦にて出撃、20年1月12日グアム島アプラ港に対し回天発進、港内に突入。

還り来ぬ身にしあれども父母に告げずに行かんやまとをのこは

新藤　勝曹長　義烈空挺隊の一員、20年5月24日沖縄に向かい出撃。

母君よ嘆き給うな父君に家の栄えをゆきて先づ告げむ

西尾常三郎少佐　富嶽特攻隊々長、陸軍最初の航空特攻隊で、ルソン島クラーク発進、数次に亙り突入、西尾隊長が突入したのは19年11月13日。

いざさらば我は御国の山桜母の身元にかへり咲かなむ

緒方　襄中尉　第一神雷部隊桜花搭乗員、20年3月21日鹿屋を発進したが、桜花を切離す前に撃墜された。

母上の優しき誠亨け継ぎて永久に薫らん大和御空に

鷲見敏郎少尉　神風特別攻撃隊第一七生隊、20年4月6日鹿屋出撃沖縄へ。

明野忠魂塔の合祀慰霊祭

深山　明敏

薄曇の11月11日、明野忠魂塔の平成17年度合祀慰霊祭が陸上自衛隊明野駐屯地内の忠魂塔前において、顕彰会会員と自衛官が多数参列して厳粛に実施され、私は山本会長の代理として、明野陸軍飛行学校関係の英霊一千六百九十柱、並びに陸上自衛隊航空学校関係の殉職者15柱に追悼の誠を捧げ、献花・拝礼させていただきました。

明野忠魂塔の特色は、帝国陸軍航空部隊の殉国の英霊と陸上自衛隊航空学校の殉職者が合祀されていることであり、今回の慰霊祭においても、本年7月29日、対戦車ヘリコプター（ＡＨ―１Ｓ）の夜間飛行訓練間に、エプロンで燃料補給中、殉職された鈴木秀明3等陸佐（航空学校整備部第2整備班長）が合祀されました。

大空に夢を馳せて国のために殉じられた帝国陸軍と陸上自衛隊の航空兵の合祀慰霊祭を、明野忠魂塔顕彰会と陸上自衛隊航空学校が、毎年秋に合同で実施していることは、全国でも極めて珍しいことであり、良き伝統の継承として今後も引継がれていくものと信じております。

追悼の言葉で、谷口正義・顕彰会会長（山本光彦副会長代読）は、英霊が祖国の守護神として東亜の植民地解放・独立に貢献された遺徳を顕彰し、日本の平和と発展にご加護賜らんことを祈念されました。

また、富本啓一航空学校長は、殉職者・鈴木3佐の功績を称えるとともに、帝国陸軍航空部隊の伝統を継承し、英霊の犠牲を無駄にしないように新たなる日本の防衛・災害派遣及び国際平和協力業務等にかかわる活動で陸上航空部隊の増大する任務の完遂に努力していく覚悟を披瀝されました。

執行者、ご遺族（4家族9名）に続き、伊勢市長をはじめ近傍自治体の長及び隊友会長などの来賓の献花の後、参列者全員（約四百五十名）の献花・参拝が実施された後、陸上自衛隊中部方面音楽隊の慰霊演奏が行われました。

「抜刀隊」、「加藤隼戦闘隊」に続いて、イラクの人道復興支援任務に従事中の派遣部隊が無事に任務を達成して帰国されることを祈念する「復興」曲が演奏され、一同は非常に感銘を受けました。

航空学校のヘリコプターによる慰霊飛行では、故鈴木3佐を慰霊する対戦車ヘリコプターが先頭を飛行し、続く4機編隊は2番機を欠として忠魂塔上空を追悼飛行し、弔意を表してくれました。

最後に、遺族を代表して故鈴木3佐のご令嬢（看護学院生徒）が立派な挨拶をなさいました。安全を口癖にしていた亡父を中心に成り立っていた温かい家庭が一瞬のうちに中核を失った悲しみを健気にも乗り越え、父が一番喜んでくれていた看護師になる約束を果たし、人のために役立つ仕事に生き甲斐を見出して進む固い決意を述べるとともに、自衛隊の方々からの激励を受けて立ち直ることができたことや墓地への供花・参拝に対する感謝を述べ、災害派遣・イラク人道復興支援などの国際平和協力活動における無事の任務達成と自衛隊の活躍に対する期待を涙ながらに表明されました。航空機整備の道一筋に励み、定年を目前に突如として訪れた悲運を、ご遺族の皆さん方が立派に克服してくださるように、私どもはただ心から祈るばかりでございます。

明野忠魂塔顕彰会もご高齢の会員が目立つようになりましたが、今回の慰霊祭にも東北や九州からも参列され、合計百八十六名の方が生死を共にした昔の仲間の菩提を弔う敬虔なお姿には頭の下がる思いがいたしました。

幸いなことに、この明野忠魂塔の場合には、陸上自衛隊の空の勇士たちが、諸先輩の衣鉢を継いで将来にわたり確実に慰霊顕彰して行くことができるので、ご遺族などにとってせめてものお慰めになるのではないかと思っています。

英霊の安らかなご冥福とご遺族に対するご加護を心からお祈り申し上げて墓前を退いた次第であります。

平成十七年度回天烈士並びに回天搭載戦没潜水艦乗員追悼式の報告

評議員　小瀬　利春

山口県周南市の大津島で、本年度の回天追悼式が定例どおり第二日曜日に当たる十一月十三日に挙行された。

昭和三十年以来、連綿と続いてきた慰霊祭であるが、終戦六十周年の本年は様式を若干変更して開始時刻を繰上げ、午前十一時半から始まった。

北海道から九州までの各地から御遺族四六人が出席された。一般参列者は約三百人であった。新幹線徳山駅の南口に近い桟橋から高速艇またはフェリーの便を利用して大津島に渡るが、参加者が多かったためフェリーでも満員になり、次の便まで待たされた人が多かった。

御遺族に始まる全員の献花の折り、上空を慰霊飛行の三群が航過した。航空自衛隊第十二飛行教育団（防府北基地）のT―7練習機三機、海上自衛隊小月教育航空群（小月基地）のT―5練習機3機、同第七一航空隊（岩国基地）のUS―1A飛行艇一機であり、いずれも飛行時間の長い練達した操縦者による見事な編隊の慰霊飛行であった。

恒例の「大徳山太鼓・回天」が地元青年有志による真摯な演奏があり、加えて徳山商工会議所女性会の方々による舞踊「ああ回天」の奉納があった。式典終了後、今回は「ぜんざい」と御神酒が振舞われ、好評であった。

地元団体・回天顕彰会が慰霊祭を主催しているが、中心となって活動してきた理事がこの一年に三人も急逝する事態があった。何処も世代交代を迫られる時期であるが、より若手の海軍関係者や海陸空の自衛隊OBなど有志が代わって参加し、慰霊事業存続の見通しが固まったことはわれわれ元・隊員として感謝に堪えないところである。

慰霊飛行の編隊と回天記念館大星条旗

徳山商工会議所女性会　舞踊「ああ回天」
回天記念館前庭（平成17年11月13日）

事務局より

新入会員名簿

（平成17年10月1日～12月31日）

○**埼玉**　田代　愛　○**千葉**　山本博史　倉重　翼　○**東京**　松本貞治　小林広司　飯田正能　冨田和夫　馬場早苗　加藤　拓　○**神奈川**　森　善治　○**福井**　中山　石　○**山梨**　輿水　泉　○**愛知**　清水芳人　○**大阪**　原田　洋　○**兵庫**　上尾侑子　田川康吾　○**奈良**　小畠　洋　○**広島**　鹿山　光　○**高知**　岡田豊喜　○**福岡**　飯田正行　徳久美奈香　○**長崎**　岸川久之　○**宮崎**　今村敏男　後藤行孝　○**鹿児島**　吉田昭政

会員訃報

謹んで哀悼の意をささげます。

○福　島　石井　健喜（17・4）
○千　葉　佐瀬浅次郎（17・7）
　　神谷　　弘（17・10）
○東　京　杉山　吉男（16・3）
　　佃　　藤吾（17・10）
　　安田　　義人（17・12）
○神奈川　結束　　稔（15・　）
　　飯島　正矩（17・10）
○愛　知　伊藤　久男（17・6）
　　横井英太郎（16・11）
○大　阪　高橋　賢三（17・8）
○兵庫　川田　　匡（17・6）

終戦60周年 第38回豫科練戦没者慰霊祭

小倉　利之

17年10月30日（日）、豫科練戦没者海原会（桜井房一会長）慰霊祭が実施された。豫科練出身生存者達が集い、日本国のために尊い命を散らせていった全豫科練出身の亡き戦友の霊を慰めると共に、だれのため、何のために散華していったのか、真の平和の為に戦ったその殉国の精神を、正しく後世に伝えるために、会として豫科練教育機関の一つであった、土浦海軍航空隊跡地（現陸上自衛隊武器学校）の一角に記念庭園として「雄翔園」を造成し、園に隣接して「雄翔館」を建設した。

その場所で、全国から生存の同窓、ご遺族の方々約800名が、「雄翔園」の慰霊碑「豫科練二人像」の前に参集し、全豫科練戦没者約一万九千柱に対して「亡き同窓の御霊安らかに」と盛大な慰霊祭を行った。

当日は、菊薫り、秋らしくなり、曇り空であったが、清清しい日和となった。

式開始前に、地元飛行場からセスナの編隊が上空を通過、慰霊飛行があり、あの時、あの同期生と語ったことを思い出しているのではないかと、慰霊式の前の雰囲気をかもし出すには最適であったと思いました。式典は、陸上自衛隊の絶大なる支援を受け、財団法人「海原会」の実行委員会の周到な準備の中、実施された。

国旗掲揚（国家吹奏）、献火・弔銃が陸上自衛隊勝田駐屯地の音楽隊と教導隊員によって行われた。

高松宮妃殿下御歌奉詠

式辞、追悼の言葉、献花、来賓の言葉、遺族の言葉、若鷲の歌奉唱、奉納行事（音楽隊演奏、舞踊）で式典は滞りなく終了した。

参加者は、「雄翔館」を適宜参観、人間魚雷・回天・海竜・蛟竜、爆走モーターボート・震洋、人間爆弾・桜花、爆薬を抱えて敵艦に体当たりするフロッグマン・伏竜など、そのいずれもが若い豫科練を中核とするものであり、空と海上と海中一体となって戦ったのである。

直会は、基地内の体育館で行われました。謝辞、来賓挨拶、乾杯会食、アトラクション等が実施された。

当時の若者がいかにして戦い、何を考え死んでいったのか、豫科練の足跡が世界の平和の資と成ることを祈らざるを得ない、慰霊祭であった。

追悼の言葉を捧げる桜井房一海原会会長

陸自勝田駐屯地音楽隊

特攻平和観音堂 第二次改修費寄進者芳名録

（敬称略）

自17・10・1～12・31

○茨城県　谷沢美三雄
○千葉県　平野　保
○東京都　小松陽太郎　鈴木　一直
○新潟県　本井　昌
○静岡県　海野　俊作
○岡山県　安藤　英雄
○高知県　高橋こすみ
○沖縄県　賀数　恵輔

65号訂正

頁	段	行	
4	2	27	達合国→連合国
28	1	20	一遍の→一片の
28	4	27	まら→また
29	1	4	陸空→我が方
〃	3	11	第六航空→第六航空軍
33	2	15	着任をされた→が着任され
〃	3	4	偉客→偉容
46	1	15	昭和二年→四年
47	1		写真説明　陸軍航空通信学校長岡教育隊の碑→平和鎮魂の碑　陸軍航空通信学校尾上教育隊跡

大東亜戦争忠魂顕彰六十四年祭

平成17年12月8日（木）15時15分から靖國神社において「大東亜戦争忠魂顕彰六十四年祭」が執行された。国士館大学名誉教授金城和彦先生を代表とする「大東亜戦争忠魂顕彰会」の主催によるものである。

戦前・戦中派にとって、この日はまだ記憶に残る「大詔奉戴日」である。当日の読売新聞夕刊「よみうり寸評」によると「（12月8日）「大雪」も過ぎ、朝の冷え込みが厳しい。が、64年前の冷え込みはこんなものではなかった。昭和16年のこの朝、東京の最低気温は2・2度だった。午前7時にラジオの臨時ニュース。「大本営陸海軍部発表、12月8日午前6時、帝国陸海軍は本8日未明、西太平洋において、アメリカ、イギリス両軍と戦闘状態に入れり」館野守男アナウンサーがこれを2回繰り返した。これから3年8か月に及ぶ戦争の日々が続く。今年、敗戦から60年、終戦の8月15日に比べ、開戦の12月8日は忘れられがちだ……」と。戦争の是非を論ずるならば、この日に立ち返って、当時の状況を冷厳に見詰め直すべきであろう。

当日の午後、靖國の社頭は人もまばらであった。遊就館前の「特攻勇士の像」が斜陽に浮かび、その前にじっと佇む人の姿があった。

冬の日は短い。しんしんと冷え込む拝殿には、数十名の参列者が居並び、寂として声なく、森厳の気が辺りを包む。さすがに若い男女学生の姿が多く見受けられ、一層健気な気持ちを抱かせる。国歌斉唱の後、祭主祝詞奏上、修祓の儀、献饌の儀と祭事は続けられ祭文奏上となったが、この度は、創設されたばかりの首都大学東京法学部一年生和田弘幸君が奏上した。「明治維新以来日清、日露の戦争を経て、大東亜戦争に至るまでの我が国の果たした役割、列強の植民地政策からアジア諸民族を開放し、独立への道を切り開いた日本人の誇りを今一度取り戻さなければならない。かつて日本人は、清らかで美しい心を持ち、勤勉であって、アジア諸民族から尊敬の念を集め、希望の光を与えた。かつての日本人の心と姿を若者が率先して行動に表すべきである。これが英霊に応える道である」と。誠に立派な詞に感心させられた。

続いて、「海行かば」の独唱、「奉納吟・九段の櫻」の和歌・漢詩の吟詠、「荒城の月」「ふるさと」の合唱が奉納され、終わって、参列者一同本殿に昇殿、玉串を奉奠して深く英霊に感謝の誠を捧げた。（飯田正能記）

嘗ては十二月八日を大詔奉戴日と称し、軍隊はもとより各職場に於いてもこの詔書を奉読した。

米英ニ對スル宣戰ノ詔書

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ昭ニ忠誠勇武ナル汝有衆ニ示ス

朕茲ニ米國及英國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ陸海將兵ハ全力ヲ奮テ交戰ニ從事シ朕カ百僚有司ハ勵精職務ヲ奉行シ

朕カ衆庶ハ各〻其ノ本分ヲ盡シ億兆一心國家ノ總力ヲ擧ケテ征戰ノ目的ヲ達成スルニ遺算ナカラムコトヲ期セヨ抑〻東亞ノ安定ヲ確保シ以テ世界ノ平和ニ寄與スルハ丕顯ナル皇祖考丕承ナル皇考ノ作述セル遠猷ニシテ朕カ拳々措カサル所而シテ列國トノ交誼ヲ篤クシ萬邦共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ之亦帝國カ常ニ國交ノ要義ト爲ス所ナリ今ヤ不幸ニシテ米英兩國ト釁端ヲ開クニ至ル洵ニ已ムヲ得サルモノアリ豈朕カ志ナラムヤ中華民國政府曩ニ帝國ノ眞意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘテ東亞ノ平和ヲ攪亂シ遂ニ帝國ヲシテ干戈ヲ執ルニ至ラシメ茲ニ四年有餘ヲ經タリ幸ニ國民政府更新スルアリ帝國ハ之ト善隣ノ誼ヲ結ヒ相提攜スルニ至レルモ重慶ニ殘存スル政權ハ米英ノ庇蔭ヲ恃ミテ兄弟尚未タ牆ニ相鬩クヲ悛メス米英兩國ハ殘存政權ヲ支援シテ東亞ノ禍亂ヲ助長シ平和ノ美名ニ匿レテ東洋制覇ノ非望ヲ逞ウセムトス剰ヘ與國ヲ誘ヒ帝國ノ周邊ニ於テ武備ヲ增強シテ我ニ挑戰シ更ニ帝國ノ平和的通商ニ有ラユル妨害ヲ與ヘ遂ニ經濟斷交ヲ敢テシ帝國ノ生存ニ重大ナル脅威ヲ加フ朕ハ政府ヲシテ事態ヲ平和ノ裡ニ回復セシメムトシ隱忍久シキニ彌リタルモ彼ハ毫モ交讓ノ精神ナク徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメテ此ノ間却ツテ益〻經濟上軍事上ノ脅威ヲ增大シ以テ我ヲ屈從セシメムトス斯ノ如クニシテ推移セムカ東亞安定ニ關スル帝國積年ノ努力ハ悉ク水泡ニ歸シ帝國ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セリ事既ニ此ニ至ル帝國ハ今ヤ自存自衛ノ爲蹶然起ツテ一切ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナリ

皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ朕ハ汝有衆ノ忠誠勇武ニ信倚シ祖宗ノ遺業ヲ恢弘シ速ニ禍根ヲ芟除シテ東亞永遠ノ平和ヲ確立シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス

御名御璽

昭和十六年十二月八日

大東亜戦争と言う名称

対米英戦争開始の四日後十二月十二日の閣議で「今次ノ対米英戦争及今後情勢ノ推移ニ伴ヒ生起スルコトアルベキ戦争ハ支那事変ヲモ含メ大東亜戦争ト呼称ス」と決定した。爾来この名称があらゆる公文書にも、また一般の報道にも使われていた。

ところが敗戦による占領下、GHQより「大東亜戦争」なる名称の使用禁止を命じられ、「太平洋戦争」と呼ぶように指導された。米国と戦ったのは太平洋だが、インパール作戦や支那奥地の作戦が何で太平洋なのか。地理的に矛盾しているのは明瞭だが、絶対権力者の言うことには従わざるを得ない。

我が国が独立を回復した後も、押し付け憲法と同じく改めようとしない。そのことを思うと上記の祭典が「大東亜戦争」なる名称を掲げていることに大いなる意義を認める。

平成17年度第2回理事会・評議員会報告（平成17年12月10日開催）

理事長

議決された平成18年度事業計画は左記の通りであります。

一、方針

寄付行為にある事業目的に従い、次の方針に基づいて会の健全な運営を図る。

(1)会員の拡充と財政基盤の確立に努める。

(2)各種慰霊顕彰事業の実施と支援を行う。

(3)特攻隊の史実研究、調査及び資料の収集整備を行う。

(4)特別攻撃隊5訂版（最終版）の刊行を平成19年度に行うことを目標に作業を継続する。

二、各種事業

(1)例年にならい春秋の慰霊祭を実施する。

(2)全国各地における特攻隊戦没者慰霊顕彰事業への協力。

(3)マバラカット・クラーク特攻基地慰霊祭への参加。

(4)機関紙「特攻」の発行・配布。

(5)特攻隊に関する調査研究並びに資料収集に努める。

(6)平成17年7月に発足した（財）大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会に積極的協力と支援を行う。

(7)新会員の加入促進

イ、日本会議、自衛隊ＯＢ等諸団体並びに各会員に協力を求める。

ロ、ホームページの充実と刷新に努め、次世代会員の獲得に努める。

以上であります。なお、理事会で欠員中の評議員2名が選出され、左記2名の方が選任されました。

衣笠陽雄（アキオ）　陸自元第4師団長

小倉利之　海自元第211教育航空隊司令（艦載ヘリコプターパイロット、飛行約八千時間）

今年も昨年に引き続いて比島慰霊旅行を行うことに致しました。

別冊慰霊旅行報告に、昭和49年にマバラカット東飛行場跡に建立された第一次慰霊碑が、平成3年のピナツボ火山大噴火によって埋没して以来のマバラカット・クラーク地区の神風特攻隊慰霊祭の経緯に関して説明してありますので併せてご参照下さい。

平成17年10月25日の第31回神風慰霊祭・第8回世界平和都市宣言記念祭には、池口恵観和尚以下僧侶・信徒、徳田代議士率いる徳州会員、但馬人グループ（青壮年）、兵庫県議グループ現地間組工事関係者に、当協会参加者27人を含めて、150～200人の日本人が参加しました。

その中で当協会が最優先で遇せられ、協会が日本人各団体を代表して式辞を頼まれました。

201空戦友会は、昭和50年から慰霊碑がピナツボ火山の大噴火で完全に埋まるまで、毎年欠かさず東マバラカット飛行場跡の慰霊祭に参加して来ました。

神風特別攻撃隊初発進地で、現地フィリピン人が主催してくれているこの慰霊祭に、協会として毎年参加して地元への謝意を表しつつ、次世代へ慰霊祭参加の継承を計るべきではないか、と考えるに至った次第であります。

慰霊祭参加者募集は67号（5月号）で行う予定であります。以上の目的達成のために引き続いて会員各位の御協力をお願い致します。

以　上

お知らせ

ＣＤ〝特攻隊員達の愛唱歌集〟の発売について

従来協会は特攻史実の普及紹介に、専ら出版事業に頼っていましたが、今般特に若い世代の人達に受け容れられ易い聴覚に訴えることとして、ＣＤ〝特攻隊員達の愛唱歌集〟を発売することになりました。

一、発売　当協会

一、製作　日本人の心を伝える会（世話人代表　冨田和夫）

一、販価　二千円

購入希望の方は、葉書、ＦＡＸ又は電話で事務局にご連絡下さい。折返し現品と郵便払込取扱票をお送り致します。

前評議員安田義人氏御逝去

安田前評議員は平成17年12月10日に心不全で逝去されました。

元気で11月11日の明野忠魂塔慰霊祭に参加されましたが、18日に急に体調を崩されて入院、遂に帰らぬ人になられました。

氏は加藤隼戦闘隊（飛行第64戦隊）の名パイロットで、昭和17年5月22日に加藤戦隊長が戦死された時、戦隊長機と共に（5機）迎撃出撃されました。貴重な歴史の証人を失って痛恨の極みであります。

謹んで衷心より御冥福をお祈り申し上げます。

陸軍大尉若杉是俊

深川 巌

序文

「特攻」については名著名冊が数多く出版されている。特攻作戦に関係した方々の多くは故人となられ、出撃散華の戦友を持つ我々も早や八十歳を越した。主として体験したこと、聞き、見知ったこと、思うことを、今こそ記録しよう、この思いから本稿は草された。

攻撃精神の発現としての「体当り」から、いわば「制度」として組織された「特攻」、即ち「特攻隊」は戦況を打開する唯一の手段として陸続として編成された。弱冠二十歳、或いは未だ満たぬ若者が、国の為、同胞を守る為、天に地に海に、敢然として貴い命を捧げた。それは可惜(あたら)、青春の命であった。

大東亜戦争の末期に、特攻隊が自らの身体生命を犠牲にして、祖国を守ろうとした事実は、永遠に残るであろう。何時の世にも、何れの国に於いても、只一回しかない命を、国の為に捧げて死ぬほど尊いものはない。これが尊ばれずに、ただ生き延びる方が良いとしたならば、その民族は、民族としてのプライドはなく、民族としての永遠の命は維持し得ず消滅するであろう。

この戦争（大東亜戦争）を語るとき、日本の陸海軍の特攻攻撃は味方にも敵にも、忘れることの出来ない衝撃―その犠牲的行動―を心に残した。

「第二次世界大戦は参戦各国にとって、全く愚かな戦争であったと思う。但し唯一つだけ人類社会にとって、誠に輝かしい立派な行為があった。それは日本の青年が祖国のために一身をなげうって敵艦に体当り攻撃をした特攻である」。これはフランスの文化相をされたアンドレ・マルロー氏の話の一端である。

「民族が生きてゆきたいと欲するのであれば、その子供達に正しい死に方を教えるべきだろう。死を恐れる者は敗者として死ぬが、死を恐れぬ者は勝者として死ぬだろう」。（モーリス・パンゲ著『自死の日本史』産経新聞）

日本は戦争には負けた。然しその後、大和民族がなし得た戦後の復興、世界平和への貢献は、このことを願い散った戦友達への最大の供養となった。

「たしかに戦争には敗れたが、百年の運命に堪え、歴史の使命を果した日本国民に何の恥があろうか！」（林房雄著、『大東亜戦争肯定論』）

日本の歴史の中で、大東亜戦争に際し、一身を国に捧げた若者達のことを是非子々孫々に伝え残したい。

本書はこの意味によって草された。

特攻の心は、

真正直な、純粋さ、そして勇気、と思う。

平成十七年四月

第一回講述

私は若杉を語る時、彼の中に私が入ったり出たりした。つまり、若杉伝であると共に私の自分史でもある。本稿は首都圏明野会の特攻シリーズで、語り部として平成16年10月17日と同17年3月6日の二回にわたって偕行社での講述を記録したものである。

これから八紘第十隊若杉是俊君のことをお話し申し上げます。先ず八紘第十隊は昭和19年11月30日水戸の常陸教導飛行師団で編成完結、隊長は航士校56期敦賀眞二中尉、第二・第三小隊長は57期の若杉是俊・日野二郎両少尉で隊員は特操1期の少尉5名、下士官4名の12名12機で、一式戦Ⅲ型を装備しました。比島への前進途中3機を事故で失った。12月18日比島到着後、富永第四航空軍司令官から「殉義隊」と命名された。

12月21日敦賀隊長、若杉・日野両少尉他二機がミンドロ島南方洋上で敵大船団に突入。

12月22日二機がミンドロ島南方洋上で突入。

12月29日一機がサンホセ南方洋上で突入。

20年1月7日一機がリンガエン湾で突入した。

以上が殉義隊（八紘第十隊）の極くおおまかな経過です。

☆　☆

私は昭和20年5月4日明野陸軍飛行学校本校本部前で振武一九七隊長を命ぜられた。内示は前日の午後遅く北伊勢飛行場でした。飛行場長の金沢少佐に呼ばれ「明日本校に行くように、本校で特攻隊の編成がある、特攻隊だ」ということでした。やや間を置き乍らの仰(おしゃ)りようでした。私も又、やや間を置いて「ハイ、分りました」と返事しました。場長室を出たとき、ふと、若杉も特攻だったなあと思った。若杉は前年12月に突入戦死しております。

「若杉も特攻だった」この思いが、現在、死んだ若杉を、生き残った私が、若杉のこと、自分のことをも、ないまぜにして語りたい、記録したいと思っております。これから時系列的に述べさせて頂きます。

☆　☆

先月の9月7日から9月11日の間、私は江森敬治さんと殉義隊の航跡巡りを致しました。颱風18号が九州上陸、東進中で、9月7日博多―岡山間新幹線運休、私達は運よく新神戸駅下車、高速バスで淡路島洲本に着きました。ここは若杉君が育ったところで、強風の中、大野尋常高等小学校・（旧）洲本中学を尋ね、この道を通ったことでもあろうか、小学校の前の田圃の稲穂は今も昔も同じ風景であるに違いない、これを見入って登下校したことでもあろうか、そう思いつつ彼を偲びました。

若杉是俊君は（旧）洲本中学二年から広

島陸軍幼年学校（今後略して広幼と述べる）に昭和十三年四月に入校し十六年三月卒業しますが、卒業に際し御賜品拝受の光栄に浴します。拝受者履歴書によると、

本籍地　熊本県飽託郡供合村鹿帰瀬七百五十八番地

警察官　義治長男

広島陸軍幼年学校卒業生徒　若杉　是俊

大正拾貳年四月貳拾日生

学　歴

一、昭和五年四月一日
　兵庫県神戸市私立長楽尋常小学校へ入校
一、昭和六年三月三十日
　兵庫県山崎町立山崎尋常高等小学校へ転校
一、昭和七年三月二十八日
　兵庫県中川原村立中川原尋常高等小学校へ転校
一、昭和八年六月二十三日
　兵庫県津名郡洲本市立大野尋常高等小学校へ転校
一、昭和十一年四月七日
　兵庫県洲本市県立洲本中学校へ入校
一、昭和十三年三月二十五日
　同校第二学年修了（修了ノ上退校）
一、昭和十三年四月一日
　廣島陸軍幼年学校へ入校
一、昭和十六年三月十七日
　同校卒業

賞

長楽尋常小学校　第一学年
山崎尋常高等小学校　第二学年
中川原尋常高等小学校　第三学年
大野尋常高等小学校　第四学年
　仝　第五学年
　仝　第六学年
右六学年成績優等・無缺席ニ付キ優等賞・皆勤賞
六年生ノ時全国健康優良児トシテ文部大臣賞・県知事賞
洲本中学校　第一学年
　仝　第二学年
右成績優秀ニヨリ優等賞

実に見事なものであります。戦後、ご両親は熊本に帰られますが、母上の述懐として、「是俊の記憶は何時も机の前で勉強してゐる姿です」と、訪れた同期生の藤本靖矩君に言われたそうです。

☆　☆

幼年学校時代と訓育

若杉は昭和13年廣島陸軍幼年学校（略・広幼）に入校する。十五歳の若杉がその後の人格形成で最も影響を受けたのは、広幼での生徒監益田芳男大尉（38期）である。

陸軍幼年学校は当時、東京・広島・仙台の三校があり、一校は200名、50名毎に訓育班、更に25名毎の学班があり、教育期間は三年間、所謂全寮式で全員が起居を共にした。若杉と私は共に、第一訓育班第一学班であり、この編成は卒業迄の三年間に変わることはなかった。生徒監も持ち上りであった。生徒監は一訓育班50名の訓育指導に当り、徳操の涵養、将校生徒としての矜持を補導し、親身になっての教育であった。若杉は兵庫県淡路島洲本中学校から広幼に入校して、父親と同じ熊本県出身の益田生徒監と会い、近親感を持った。爾来その指導を受けることとなる。若杉は将校生徒たるべく精進し、杉本中佐の大義を説く益田生徒監に傾倒する。以心伝心、益田は若杉の成長を期する、まさに若杉は、正機に正師を得たというべきであろう。

若杉は初めての夏休みで帰省する。昭和十三年八月三十一日付で益田生徒監に宛てた手紙に、

起床は毎朝四時半、要塞地帯の海岸通りを尋六の弟（吏）と共に駈歩にて氏神に参拝仕り、其の往復行程は約五粁餘に有之候　帰着するや直ちに體操を行ひ冷水摩擦を為して、よくよく体を清め、先ず宮城の遙拝、皇軍の武運長久を黙祷し、生徒監殿始め各教官殿の御健康を祈り、而る後勅諭を奉読して朝の行事を終へ候

午後運動時間には裏山へ登山　頂上の廣場にて蒼洋たる紀淡の海原を眺めつつ竹刀を素振り、夕方は父の作れる菊畑へ行き撒水や手入れをなし、其の間には魚釣り、旧師旧友訪問等楽しく有意義に過し居り候　と報じている。次の年の夏休みを含めて、一度も手紙を出したことのない私は若杉の気配りに感心する。

益田生徒監は少佐に昇進し、北支に大隊長として出征することになった。離別に先立ち我々第一訓育班50名は一人一人夫々に色紙を頂戴した。私の色紙には「不撓不屈」と書いて下さった。二年生の最終学期末だった。

☆

益田さんは昭和45年2月11日に亡くなられた。何回忌だったか、一訓の数名がお宅にお伺いした時、奥様から「主人の遺品の中にありました」と言って、横長のスケッチ帖を見せて下さった。若杉が戦地の益田宛に送った慰問文であった。縦13糎横36糎の横長紙で左半分に文章、右半分はスケッチで、二ツ折り出来るようになっている。全部で20枚、表紙は「懐か志い益田生徒監殿へ　若杉是俊」とあり、次葉右に菊花輝く広幼本館を画き、昭和十五年四月と記し、左には次の文章が綴っている。

「生徒監殿　定メシ御壮健デ軍務ニ御精勵ノ御事ト存ジマス。私達ハ毎日、食堂ニテ或ハ夕食後ノ戦友顔會ヲ度ニ益田生徒監殿ノ御姿ヲ思浮ベ、生徒監殿ヲ御慕ヒスルト共ニ　又心ニ鞭ウツテ生徒監殿ノ御恩ニ報ヒ奉ル可ク努力シテ居リマス。扨此ノ写生帖ハ、軍務繁忙而モ何一ツ御心ヲ慰メル事物ノ無イ御當地を思ヒ、少シニテモ生徒監殿ヲ御慰メ申サウト、四月ヨリ書キ始メタモノデス。完成スル迄ニハ数ヶ月カカルデセウガ時アル毎ニ書イテ行キマス。ドウカ御暇ノ時、敵ヲ斬ツタ血刀デモ手入サレナガラ御覧下サイ。下手デスガ一生懸命書キマシタ。」

そうして、本館前の記念碑の池を写生しては、「青空を映して清き辺に　水草潜る魚ぞ可愛ゆき」を添え、その他自習室、運動会の華棒倒し、濠端の松、来賓職員競技、自習の時間、鐵か肉か、憧れの空へ、悪戯書き、遊泳演習、原村の廠舎、試胆会、騎

馬、勤労奉仕、河馬の絵、一訓寄書、もある。「運動会ノ華棒倒シ」では、棒を守る人、棒に登る人を画き「本年度春季運動会ニハ私ノ第二運動班ガ優勝シ、二回連覇成リマシタ」と書いている。（註、若杉は第二運動班長だった）。戦斗機の絵、東條陸相他の似顔絵、河馬親子のユーモラスなやりとり等、実に心の込もった文章であり、スケッチである。若杉が何時書いていたのか知らなかった。よくぞ書いたものだ。それにしても若杉が師を思う気持ち、戦地で受取った益田は如何程喜んだことか、砲火の中を肌身離さずポケットに。そして戦地から持ち帰り、亡くなられる迄大事にされていた。

広幼の三年間を終えて若杉達は市ヶ谷の陸軍予科士官学校に入校した。若杉は第二中隊、私は第一中隊である。当時、中隊長の交替が相次いだ。戦地の益田少佐は内地に戻り予科士官学校の第二中隊長になった。若杉と益田は再び相会した。

以下は全く私個人の推測であるが、

―戦地の益田は予科士官学校付を命ぜられ、市ヶ谷に赴任した。そこで「貴官はどこの中隊を希望するか」ということがあったとする、その時、益田は間髪を入れず「第二中隊」と答えたに違いない。それ程心惹かれる相手同志なのである。―

否、その会話はないとしても、又、師弟は巡り合う機会に恵まれた。

☆

予科を終え、航士校を卒業して戦斗機乗りとしての技倆を磨いた若杉は、体当り特攻を志願し、殉義隊として、昭和19年12月21日フィリピン・ミンドロ島西方洋上の敵艦船に突入戦死した。

戦後の一訓の集りで益田生徒監は私共によく語った。

「あの若杉は離陸する時『若杉少尉行キマス』と言ったそうだョ、『行ッテマイリマス』ではなくて、イキマスとね」

☆

益田生徒監が戦後若杉の父君義治様に宛てた手紙には、若杉への思いが、ひしひしと伝わってくる。

前略、先日『熊本偕行』誌上に於て貴方様の御住所を初めて知りました。私は元廣島幼年学校生徒監の益田芳男（当時大尉）で御座います。若杉是俊君の御戦死は終戦後間もなく承知致しましたが、御遺族の御住所が判らず失礼茲に二十二年、厚くお詫び申し上げます。

謹んで御悔み申し上げます

若杉君と私の因縁は誠に深いものがあります。広幼で約二年間、予科士官学校で約一年間、航空士官学校で約一年間、あの立派な御子息様の教官として勤めた事は、私一生の光栄であります。

若杉君は私が教育した生徒の中でも、最優秀であり特に人格方面に於ては五十七期のみならず、全期を通じて最優秀と思います。広幼時代から最も純情であり努力家であり有能であり、学術は勿論、術科でも最高でした。而も陶冶性の強い人であり、私如き者の教育をよくも受入れてくれたと感謝もし、はずかしくも思って居ります。其の後、予科も航士もトップで卒業され、其の時の私のうれしさは例え様もありませんでした。

併し当時戦局最も熾烈を極め、戦い我に有利ならず、御互いの連絡さえ出来ぬ時、若杉君から突然次の御便りに接しました。

「生徒監殿　愈々願望叶って行って参ります。歓喜に燃えて出発します。御教えの通りに実行致します。御返事はいりません」と。出発先も連絡先も言って来ず、その儘壮烈な戦死を遂げられたのでした。

終戦後、私は若杉君の戦隊長に会いました。その時戦隊長は厳粛に私に申しました。

「私は多くの特攻隊員を出しました。若い優秀な人々がそれからそれへと散華されたこと思うと、断腸の思いがあります。特攻を命ずる時の苦しさ、又命を受ける青年将校の顔を見る時、健気乍ら一抹の哀愁を見ては、なほ更辛い思いでしたが、最後に若杉君を命じました時、若杉君がにっこり心からうれし相に、『ありがとう御座います。行って参ります』と、本当にうれし相に飛び立った姿は、正に神そのものでありました。私は生ける若き神を見たのです」と。

万感胸に逼り、言ふ所を知りません。こんな立派な軍神をもたれた御両親様に深く敬意を表すると共に、又御心中を拝察致します。世往々大東亜戦争と其の犠牲を無意味の如く解する者がありますが、私は世界史永遠に光彩を発揮する事を信じています。

私も本年六十二歳、埼玉県狭山市元飛行場を開墾しつつ馬齢を重ねています。御悔み申し上ぐる事が遅れて誠に申し訳ありません。

是非是俊君に御霊前に足を運び度く存じていますが、不取敢御父様から御供物を御取次願い上げます。

些少乍ら御受納の程御願い申し上げます。

呉々も御尊体御大切に祈り上げます。

謹　言

昭和四十二年八月二十五日

益田　芳男

若杉義治様

☆

若杉君と机を並べて益田生徒監の訓陶を受けた私には、益田生徒監が書面で述べられたことがよく分かります。

さて、益田さんに手塩にかけて育てられた若杉は、同期生に先だち、比島海面敵大船団に突入散華した。同期最優秀な男が先駆けたのである。

☆

以下、八紘第十隊（殉義隊）の編成から突入までを時系列に述べます。

若杉是俊を中心にして彼の日記を追い乍ら、日野二郎、敦賀眞二隊長、私のことなどを挿入します。（※は私のこと）

☆　☆

若杉是俊日記抄

昭和十九年三月十四日　火曜日　晴

一五三〇ヨリ分科発表、遠戦ト定マル。之ニテ予ノ御奉公ノ道定マレリ。夜、区隊長殿ノ個人指導アリ。

三月二十日

大元帥陛下御臨幸ヲ仰ギ奉リ、晴ノ卒業式擧行セラル。〇八〇〇頃ヨリ小雨、次デ相当ノ降雨トナリ、空中分列中止、雨天ノ様式ニヨリ執行ト決定。本部前ニ奉迎ス。一一〇〇ヨリ天覧剣術、一三〇〇ヨリ御前講演。一イチウナヅキ給ヒ聞召ス尊キ御姿ヲ拝シ、感激オク能ハズ。

御民吾れ　生ける験あり　天地の
栄ゆる時に　逢へらく思へば

皇國大飛躍ノ時、本校ヲ卒業シテ愈々第一線ニ御奉公シ得ル身ノ幸、限り無シ。式モ無事終ヘテ一六〇〇ヨリ父兄ト面接。少尉ノ軍服ニテ御迎ヘスレバ、母ハ「ヨウヤツテクレマシタ」ト涙ヲ流サレタリ。父亦「モウ死ンデモヨイ」ト。些カ親孝行ニモナリタルカト嬉シキ極ミ。然シ乍ラ累次ノ御訓示ニモアル如ク之ヨリガ眞ニ実力ノ養成。勵マンカナ。

（註）御前講演の題目は「航空兵の本領に就て」。口演者は川村勝通候補生、若杉候補生は棒で地図上の地点等を指示申し上げる役目であった。

※当日は雨天の為格納庫で天覧剣術が行われ、私はその栄に浴した。一段高い台座の机には当日出場者の氏名が試合順に一覧表となり、緑の毛氈の上に置かれ、その上に透明な硝子板が載せてあった。

陛下は台座にお立ちになり、机上の氏名表をゆっくりと御覧になった。

陛下と出場者前列との間は四～五米位で、そこで試合が行われた。私は同中隊の渡辺尚美君と組んだ、どちらが勝ったのか記憶にないが、私の次に出場した川口裕之君のことはよく覚えている。素晴らしい試合だった。双方の構えは見入る私をジーンとさせた。正眼の構えからッと、動きが見えるか見えないかの一瞬、川口の出籠手が決った。「コテ！」と言う川口君の声と共に、前列の私は思わず陛下を見上げた。一瞬頷かれる陛下！私は驚歎した。実にうれしかった。

私（深川）の両親も佐賀県から卒業式に見えた。格納庫の中は卒業生、在校生、父兄で大変混み合った。翌二十一日と思うが両親と靖國神社にお参りし、母は社頭で郷里の村岡さんの長女の方とお会いし、とても喜んでいた。天気は快晴だった。—

三月二十三日　水曜日　晴

〇九三〇ヨリ入校（水戸校）申告。三好校長閣下訓示シテ、実力ノ養成ヲ要求セラル。吉岡幹事殿ヨリモ実践窮行ヲ強調セラル。中島主任教官（凡夫50期）殿モ然リ。予ハ本校在校間、修練ノ主眼ヲ第一線小隊長トシテ最上ノ実力、徳操ノ涵養ニオク。体力ニ於テ、気力ニ於テ、特ニ又操縦技倆、智識方面ニ於テ決シテ悔ヲ残サザル如ク、総ユル方面ニ積極的ニ努力ヲ傾注セン。

※三月二十三日戦斗分科は明野本校集合、同日を以て各飛行場に分散、私は北伊勢飛行場で乙学の訓練を受けることとなった。当日、北伊勢飛行場から見る伊吹の山並には雪が舞っていた。激しい訓練を覚悟した。主任教官山本實三郎（53期）、補佐教官岡林龍之（56期）であった。

やがて、戦局は熾烈を増し、軍上層部は体当戦法つまり特攻戦法を採用するの他なしと判断したようである。—

十月二十一日　土曜日　曇

篠原中尉（修三・56期）殿水戸ヨリ帰隊セラル。飛行師団長閣下ヨリ人秘封書アリ、曰ク、決死隊要員ヲ募ルト。夫レ日本人ナル限リ、死モトヨリ問題ニ非ズ。然レドモ数次ノ本土空襲ニ全機撃墜ノ報ヲ聞カズ。何故ゾヤ。体当リ無キナリ。一機ニテモ生還センカ、敵ハ増長シテ又必ラズ来襲スベシ。戦ノ決ハ武力ニ非ズシテ魂胆ナリ。敵ヲシテ如何ナル物量ヲ以テスルモ、皇軍ハ屈セズ、従ツテ神州皇土ハ浸シ難シ。否、絶対永久ニ侵犯シ得ズ」ト思悟セシムコトコソ、戦勝最大ノ鍵タリ。其ノ法ハ如何。他ナシ。今方ニ敵ハ全力ヲ賭シテ神州ニ迫リ、一擧ニ勝敗ヲ決セント焦慮シアリ。其ノ進攻ヤ寔ニ悔リ難シ。台湾沖航空戦ニ、或ハフィリッピン上陸ニ、其ノ大半ヲ繫破シタリト雖モ、未ダ其ノ野望ヲ破砕スルニ至ラズ。全機全艦隊ヲ滅セズンバ未ダシ。予ハ誓フ。敵ニ見エタル第一日ニ敵編隊長機ニ徹底的攻撃ヲ指向シ、全弾ヲ撃チ尽クシタル後必ズ決スル所アルヲ。師団長閣下ヘノ血判忘ルマジ。名ヲ思フベカラズ。身ヲ思フベカラズ。唯、上御一人ヲ念ジ奉ルノミ。唯皇國ヲ念ズルノミ。皇國ノ天壌無窮ヲ信ジテ断行アルノミ。幼年校以来何ヲ学ビ何ヲ鍛ヘ何ヲ得タルヤ。学術科ハ人ニ負ケズ勉強シタリ。努力シタリ。唯予ノ恐々トシテ常ニ思フハ、弾丸雨飛ノ間、百機紛戦ノ間、猶ヨク平常心ヲ以テ悠久ノ大義ニ生キ得ルヤ否ヤノ一事。杉本中佐ハ一生涯ヲ通ジテ御勅諭忠節ノ項ナル「義は山嶽よりも重く死は鴻毛よりも軽し」ノ心境ニ透徹センガ為、総ユル修行ヲ積マレタリト。噫、必ズ必ズ熱貫セン。ヤラン哉。

天皇陛下　万歳
父上様、母上様、是俊ハヤリマス。

※この十月二十一日欄を敢て全文記載したのは、彼の初期の決死、体当りの考え方が、高揚した気分そのまま文字となっているからである。

若杉日記十月二十一日付「篠原中尉殿水戸ヨリ帰隊セラル。飛行師団長閣下ヨリ人秘封書アリ、曰ク、決死隊要員ヲ募ルト。」につき、平成13年6月20日、長崎住の篠原先輩に電話したところ、「当時は能代に来ていたが水戸（本飛行場）に呼ばれ、人秘封書を托されて能代に戻った。人秘封書は、パイロット全員に対してのことで、若杉個人に対してではない。私は直接の五十七期担当教官だった。若杉を教官要員にしたのだが、結果的に特攻となった。このことを戦後も済まんことをしたと思っていた。戦後の水戸の集りで、多数の五十七期の方々にこのことを伝えたところ、『それは、トップの若杉が特攻になったことで我々五十七期に、強い影響を与えた』と返事して呉れた。」との返事だった—事実、私が内命を受けた時、まっさきに思ったことは、若杉も特攻だったなぁということだった。—

（註　以後十一月二日まで記事なし）

十一月二日

午前　学生ノ後方射撃教育ヲ終ヘ（若杉は同期五十七期第二次転科学生の補助教官だった。因みに、その時の補助教官は若杉（戦死）荘司（死亡）柴田（死亡）浜田（戦死）である）昼食ニ赴カントスル時、篠原中尉殿ニコニコ走リ来リ「若杉、貴様出撃準備ノ為即刻帰隊ダ。御目出度ウ」ト仰言ラル。噫愈々出陣カ。男子ノ本懐、感激ノ極。教官拝命ニヨリ出陣ノ機当分失シタリト思ヒアリタルニ。一三三〇津川隊長殿（53期）始メ懐カシキ能代分遣隊ノ人々ト訣別。海野（裕57期）操縦ノ軍偵ニ搭乗出発ス。九七戦、一戦ニ八郎潟迄送ラレ感激ニ堪ヘズ。唯粉骨勉勵ヲ誓フノミ。嗚呼顧ミレバ能代ノ名残又盡キザルモノアリ。大鰐ニ遊ビタル際ノ純心ナル少女ノ踊リ、織田病院ニ森玉ヲ見舞ヒタル時ノみっチャン、すまチャン、寛チャン、正也チャンとの無邪気ナ戯レ、或ハ都亭ニテノ楽シミ、殊ニ「うろこ」ニ於ケル美津ノ心カラノモテナシ。人交リハ心ト心。純ナルベシ。邪無ケレバ全ク爽。能代ハ第二ノ故郷。一五三〇懐カシノ水戸飛行場ニ到着、隊長殿ニ申告ニ行クニ、父母思ヒガケズ室ニ在ス。全ク驚キタリ。第一線ニ立ツトテ隊長殿態々呼ビ下サレタルナリ。夜ハ平磯館ニ泊リ久方振リニ温キ父母ノ愛ヲ受ク。噫、予既ニ思ヒ残スコト無シ。征カン哉。征カン哉。忠則孝。念々是忠則孝。

十一月三日　雨

午前父母ヲ校内ニ案内シ、午後水戸迄御送リス。コレガ今生ノ見オサメカ。母上ノ涙、止マル無シ。父母上ハ申サレタリ「是俊ハ既ニ私ノ子デハ無イ。死ンデモ決シテ悲シミマセン。流ス涙ハ嬉シ涙デスヨ」有難キ哉。不肖ノ子乍ラ全力傾注シテ成ラザルコト無カルベシ。唯己ガ誠ヲ致サンノミ。終始世話シ呉レタル海野ノ友情感激ス。戦友ノ分モ必ズヤル。

夜ハ明治ノ佳節ヲ寿ギテ将校団ノ宴会アリ。心ヨリ祝賀且ツ御偉徳ヲ偲ビ奉リ、現下情勢突破ヲ固ク期シタリ。

十一月十八日

午前水戸ヨリ慰問団来隊。舞踊、武蔵ノ芝居ヲ観ル。終リテ昼食ニ赴ク時、篠原中尉殿ニ呼止メラレ、驚キテ尋ヌレバ能代空輸部隊帰還セリト。補佐教官連ヲ始メ、学生ノ懐カシキ面々ニ会フ。第一線ニ征ケトテ盛大ニ送ラレシ手前、未ダ居残リアルハ慙愧ニ堪エザル所、サレド懐カシサニ恥モ忘レテ談笑。緒方、立派ナ写眞ヲ贈ル。嬉シ。夜ハ早速星友寮ニ能代帰還部隊ヲ招待ス。武人ハ、特ニ航空人ハ天真爛漫物事ニ一点ノ滞リアルベカラズ。人ヲ相手トスルヨリ心乱ルルナリ。須ク天ヲ相手トシ、名ヤ外聞ヲ念外ニ、所信驀進ノミ。

※「若杉、貴様出撃準備ノ為即刻帰隊ダ。御目出度ウ」とあるが、出撃準備のため帰隊というのが意味不明である。若杉だけで日野や他の者にはどうだったろうか。出撃準備というが、その後の動きがない。してみると出撃準備帰隊とは、水戸飛行場に到着し、

「隊長殿ニ申告ニ行クニ、父母思ヒガケズ室ニ在ス」この為の即刻帰隊と考えれば合点がゆく。この時の隊長は広瀬吉雄少佐（45期・常陸教導飛行師団・第一教導飛行隊長）で、ご両親を態々呼び、若杉に飜意させる為であった。翌日、ご両親は「出来ませんでした」と報告なされたようである。これが、「翌三日午前父母を校内に案内し、午後水戸迄御送りす。これが今生の見おさめか。母上の涙、止まる無し」のくだりとなる。

戦後、熊本在のご両親宅に屢々訪問した同期生の藤本靖矩に「あの時、首に縄をつけても連れて来れば良かった」と叶わぬこと乍らも、母上は涙して話されたそうである。若杉も万感を簡潔に、母上ノ涙、止マル無シ。と記している。

因みに、編成示達は假編成命令陸亜密一一六八〇号十九年十一月十六日、編成担当常陸教導飛行師団、配属先第四航空軍、一式戦12機・12名である。

即刻帰隊は十一月二日であった。十一月十六日までは飜意可能日数であったのであろうか。

尚、十一月二日日記に出てくる森玉君に電話で問い合わせた。（平成十七年四月）

「態々見舞に来て呉れた。愈々征くことになった。元気でな、と言ってくれた。ご両親が見えたかどうかは、入院中のことだし、詳しくないが、当時、自分にも親が面会に来てくれた。どうも師団長のご意嚮があったようだ」と森玉勝文は返事してくれた。

十一月二十六日

学生ノ射撃教育、予ノ組全員合格ノ好成績ニ喜ビテ帰ルヤ、皆予ノ特攻隊編入ヲ伝フ。確実ナル内命ニハ非ザレドモ、概ネ確定ノ模様。先般ノ内命消滅ニ些カ愕然タリシ所ニ今日ノ噂、歓喜ノ至リ。愈々征カン哉。今日迄孜々修練ノ功ヲ体当リニ凝集シテ大艦ヲ屠ル、又快ナラズヤ。「人生有限名無尽、楠氏誠忠伝万古。」噫、悠遠ナルカナ人生ヤ、予死スト雖モ魂魄何ンゾ死センヤ。永遠ニ護國ノ鬼ト為リ、皇國ヲ守リ奉ラン。日本人ノ有難キハ死シテ尚生クルニアリ。純忠ノ大義ニ生クル時、肉体ハ亡ブト雖モ尚死セザルナリ。否、生死以上ニ燦然タル生ヲ稟クルナリ。何ゾ名ヲ求ムルニ非ズ。死後讃ヘラルルヲ希フニ非ズ。唯予ノ死ハ予ノ輝カシキ生ナルヲ信ジ、此ノ生ヲ得ル機ノ近附キタルヲ心ヨリ喜ブノミ。噫、噫、男子ノ本懐ナラズシテ何ゾヤ

※欣然たる彼を想起して欲しい。私は彼の日記の中でも最も好きな章である。

それにしても気になることがある。それは、編成担当の常陸教導飛行師団で編成下命が行われた形跡がはっきりしないことである。少なくとも若杉の日記から見受けられない。私の場合は前日内示を受け翌日は振武一九七隊長を命ぜられ、隊員を掌握した。―この状況は後で述べる―

十一月三十一日

昨日特操モ到着シ、我八紘第十隊ノ編成終了シ、本日出発ノ予定ナリシモ天候ノ為延期ス。夜ハ星友寮ニ遊ビ、浜田、善教、海野等ト盃ヲ交ハス。航通校ノ者トモ逢フ

（注、星野憲一）。予ノ壮途ヲ心ヨリ祝福シクレタリ。予程幸福ナル者ハ此ノ世ニ非ザルベシ。
星友寮ノ人々ノ御思又忘ラレザルベシ。楽シカリシ束ノ間、噫、頑張ラン哉。ヤランノミ。
※十一月三十一日は三十日の誤記であろう。
念の為日記コピーを見ると、当日から鉛筆書きで、十月三十一日とある。若杉でもこんなことがあるかと思うと共に、星友寮で楽しく祝盃を挙げたのであろう、ほっとする。
それにしても、昨日特操が到着したばかりで本日出発の予定なりしとは。

十二月一日

藤屋ニ於テ八紘第十隊宴会ヲ行フ。編成完結及其ノ前途ヲ祝シテナリ。隊長敦賀中尉殿ヲ中心ニ一致団結、任務ニ驀直向前センノミ。噫、義ハ山嶽ヨリモ重ク、死ハ鴻毛ヨリモ軽シ。夜退庁時、八重坊、清チャンニ荷物ヲ運ンデ貰ヒ乍ラツクヅク語ル。純情程清々シキ神々シキ徳操ナシ。予ハ子供ト話スハ大好キナリ。清チャン「兄サンノ様ダ」ト眼ヲコスレリ「俺ハ敵艦目ガケニツコリ笑ツテ体当リスルヨ。ダカラ八重坊モ清チャンモ笑ツテ俺ノ出発ヲ送ツテクレネ」
「涙ガ出チャッタ」ト二人ハ泣キ笑ヒツツ向フヲ向イテ、シマフ。八重坊自作ノ詩

若鷲の　誉も高き　特攻隊
召出されて　兄は征くらむ

全ク予ノ如キ未熟者ヲ特攻隊ニ選ビ下サレシ有難サ、コヨナキ名譽ニ唯々感泣、奮闘ヲ誓フノミ。
召出サレタ此ノ兄ハ必ズヤル。ヤル。

十二月二日　土曜日　晴

一日特操ノ訓練。二機大破ス。

☆　☆

御両親との面会

日野二郎ご両親の面会　厳父の追想記

昭和十九年十一月二十九日午後三時頃、私の家の隣りの人が西校へ電報をもって参りました。（注、当時厳父は広島県福山市府中西小学校長をされており、母堂も教職について居られた）
開いて見ると「一ヒシュツパツス　スグコイ　二ロウ」とありました。家に帰っていろいろ支度をして、漸く家を出たのは夜の九時すぎで、外は雨がしとしとと降っておりました。
福山発は夜の十二時でした。汽車は大変こんでいました。ようやく東京駅に着いたのは三十日の午後十時前でした。すぐさま省線にのりかえて上野駅に向いました。途中神田あたりで、昨夜米機の空襲があったということで、まだ燃えておりました。上野駅に着くとすぐ常磐線に乗りかえて、水戸の二つ先の佐和に急ぎました。心は少しでも早く二郎に逢いたくて胸いっぱいでした。眞夜中の二時に佐和駅に着いて、それから飛行場へと夜の関東平野の長い道を二人はてくてく歩きました。夜の事で逢う人もありません。ようやく一日四時頃飛行隊につきました。
二郎の居室に行ってから家内は、二十九日に電報を受取ってから常陸飛行場につくまでの事について早口に話しかけました。家での準備、汽車の中のことやら、その間二郎はうなずいて聞いておりましたが、「今度特攻隊に行くことになった」とひとこと言いました。
私共二人はハッと胸を打たれました。しかし、それは決して悲観した意味の驚きではありません。
それから私と二郎はその特攻隊について話し合いました。
小生「その特攻隊とは何人行くのか」
二郎「八紘第十隊敦賀隊第三小隊長として行く。人数は十二人、隊長は56期の中尉で、同期生は若杉少尉で特別操縦見習士官出身の少尉が五名、そのほか下士官が四名である」そうして
小生「出発は今日か」
二郎「出発は三日にのびた」
小生「今日これからどんな事をするのか」
二郎「今日は特操の人達を指導する。今度使う飛行機によく慣れていないから。飛行場へ行って見て下さい」

☆　☆　☆

沢山の飛行機がならんで整備兵は忙しくやっている。二郎の飛行機を見ると、赤で胴体に三本ななめに入っていた。その尾翼に「日」のしるしがあった。直掩機が戦果を見てやるためのしるしだそうです。
私共は感慨無量でした。
午前中は二郎の飛ぶのを見ていましたが、急に強い雨が降り出したので飛行は中止となり、私共は二郎と同じバスで飛行場から一里ちょっとある湊の観光ホテルに着き、ようやく旅の疲れをいやすため座につきました。

☆　☆　☆

暫くすると、特攻隊の人達も部隊の自動車に乗って帰って来ました。
二郎はその車で水戸に行くといい出しました。
小生「水戸へ何しに行くのか」
二郎「大島の叔母さんの所へ行くのだ」
三人はまた自動車に乗って水戸へ急いだ。水戸の大島さん方に着いてから、二郎は今夜宴会があるからといってすぐ帰りました。私共は上にあがって、叔母から次のような話しを聞いた。《二十六日、二郎は大命を頂き、二十七日私方（大島宅）をたずねた。
その時郷里に電報を打ったかと尋ねたら、「電報は打たぬ。会はずに行く。その方が良いと思うから」との事だった。それから二十九日、湊のホテルに面会に行った。その途中考えて、もう二度と、二郎は親に会えないから、電報を打って両親を呼んでやろうと思い、電報を打ってからホテルに行った。その事を話したら大変機嫌が悪かった。しかし、電報は打った後でどうすることも出来なかった。二十七日には二郎を写真館につれていって写真をとっている》と、叔母の心づくしの数々を聞いて心から感謝した。
大島さんの家を辞して湊に帰ったのは、夜八時頃であった。

☆　☆　☆

明くれば二日、あさ部隊から迎えの自動車が来て、特攻隊の者は部隊へ行った。午前中は編隊で高く飛行練習をしているのがホテルから見えた。私共は一日中ホテルで

あれを思いこれを思い、お國へ殉ずる二郎の雄々しい決心に強い親の気持ちになったり、時には二階の室に行って部屋付きの女中に、特攻隊に入ってからこちらへ来ての生活の様子をきいては、人間として親の子に対する気持ちになったりした。

☆　☆　☆

その日の晩五時すぎ、ホテルへ帰ったらしい元気の良い声で二階へあがる足音がきこえた。

夕食をすまして風呂に入り、浴室から帰るとき階段の所で二郎と突然あいました。

その時、

小生「今夜何か用事があるか、別になければ若杉少尉に挨拶しようか」

と申しますと、

二郎は「別に用事はないから、会って話して下さい」

とこんなに言うので二階に上って行く。丁度若杉少尉も面会に来ている同期生と話していて、私が部屋に入って、「私が日野二郎の父です。こんどは御苦労さまです」と申しますと、

「自分は若杉です。日野少尉といっしょに参ります。最後まで御奉公します」

と、快活にしかも人なつこく座蒲団をすすめて、上の方に私を座らした。そうして明朗にいろいろ話して笑っている。二郎もその中に入って朗らかに陸士時代のことを追想している。

☆　☆　☆

その時、報導班員の方が来て特攻隊員の人に会見したいという。そこにいた十名の隊員は応接室に行き、あとに同期生の人が三、四名残ってお茶を呑んでいる。

私は隊へ来てから一つ問いたい事があった。それは二郎が沢山いる同期生の中から特攻隊に選ばれて出て行くのは如何してか。このことであった。

こうした事をきくのは今だと思って、思い切って一少尉にたずねた。すると会合していた三、四名の少尉がかわるがわる次のような事を聞かしてくれた。

《〇月〇日頃、隊から書いたものが来た。

それには、

「最初に、戦局が重大になったから、空軍に身をおく者の重責、そして、敵撃滅には体当り戦法で行かねばならぬ。こうした事が書いてあって、次に、希望ありや無しや、希望の程度は熱望、普通、最後に妻のありや否や、この三項目であった。それについて各自書いて出せ」

という事であった。

これを見た五十七期の同期生〇〇名は異口同音に、自分共は去る三月二十日の卒業式に際し、畏くも大元帥陛下の親臨を辱(かたじけな)うし、その馬前で死を誓っている。今更こんなものを書いて出せとは不都合だと言うので、その書類を一まとめにして隊の幹部の方へ返した。

すると、隊の幹部の方のいはれるのに「これは隊の操縦者全部に出しているのだから、生徒隊の者も書け」ということで、われわれ五十七期同期生はみんな同じことを書いて出したのである。

その時自分らは、〝サイパン島〟の玉砕があってから敵機が帝都にやってくる。それに体当りせよということだろう位に思っていた。そうしたら南方レイテ島の作戦となり、特別攻撃隊「神風」が出るようになってその眞相がわかって来た。

そうして航空総監部から二十六日、若杉少尉と日野少尉の二人に八紘隊としての大命が下ってきた。自分共はほんとに羨しく感じている。早く第一線へ出てしかも特攻隊として敵の艦船に体当りしたいばかりです》

かような話に自分は、陸航士を卒業した若い少尉の尊い心境に、眞に頭の下がるのを感じた。醜の御楯として敵米英撃滅のために散華して行きたい気持ち、これが皇軍将校の神髄であるのか、それでこそ空軍の重責を荷って立つことが出来るのだと思った。

こんな話をしている時、特攻隊の人々は部屋に帰って来た。若杉少尉は同期生に向ってほがらかに、

「おい、貴様たち、特攻隊に行きたい事はないか、大命が下ってから毎日大変歓待を受けているぞ。今日は写眞攻めだ。同期生も今夜は軍神と寝よう」

など面白く話している。

☆　☆　☆

二郎はいつの間にか階下の室に行ったので、自分も行って見ると家内と二人だけで話し合っていた。

そこで二郎は母に大略次のような事を話していた。

「大命を頂いた日に、若杉が自分に向って貴様は郷里へ電報を打つかとたずねた。自分は打たないと答えた。すると若杉も、それなら自分も打たない事にしようと言うて、どちらも郷里から両親に面会にきてもらはぬ事にしていた。それなのに大島の叔母さんが電報を無断で打って二人に来てもらって、若杉にすまないと思っていた。ところが若杉が、お父さんと朗かに話していたので自分（二郎）も安心した。それでお母さんの所へ話しにきた」

こんな話をそばで聞いていて、はじめて二郎の電報を打たなかった気持、また早く帰ってくれと言うことが判ってきた。また、自分が特攻隊として出て行くときいて、お母さんがさぞ淋しがるだろうと思っていたのに、案外元気で勵ましているので、二郎もすっかり明朗になり、元気よく母に話しかける。

大命を受けた時の自分の心境を歌にしたから見てくれと母にさし出す。

大命を拝せしときの我が心
　莞爾とゑみて友と誓ひぬ

荒鷲の誇も高き特攻に
　召出されて我は行くなり

特攻の名にし負はん御楯我(みたてわれ)
　一機一艦いまに屠らん

こうした感激と強い決意を語る、

家内もまた、

大君の御楯となりて飛び立つを
　見送る母の顔ぞほころぶ

こうした調子で親子三人水入らず、部屋の中の空気は眞にほがらかで、十日、二十

都城特攻慰霊祭

菅原　道熙

4式戦（疾風）の特攻隊が、都城西飛行場から初出撃した4月6日を期して行われる都城市特別攻撃隊慰霊祭、今年は桜満開であった昨年とは異なり、既に半分以上散った花の間に若葉が芽生え、そこに花吹雪が舞うという一味異なった会場風景が醸し出されていた。

参会者は約440名で例年並みであったが、57期を主とする偕行会員と少飛会員は明らかにその数を減らし、初めて少飛会からの追悼の辞が捧げられなかったことは淋しい限りであった。

恒例に従い長峯市長の祭文奏上に、当協会と地元57期生会が追悼の言葉を捧げ、裏千家淡交会都城支部による献茶の後、参加者全員が献花、錦城会都城支部と都城詩道会による献詠、続いて偕行・少飛両会員合同で、加藤隼戦闘隊、同期の桜、海行かばを地元の第23普通科連隊音楽隊の伴奏で合唱した。

第23普通科連隊は、立花尊顕連隊長以下82名が、陸自第8次イラク復興支援群に3隊に分かれて参加、第3隊は今年の2月26日に帰国した処であった。

最後に遺族（6家族12人）を代表して、第179振武隊江副保郎大尉の次弟保二郎氏が、最近の世相は心のゆとりを失い、他を思いやる心に欠けていることは遺憾なことで、特攻隊員の心情を忘れることなく教訓にして貰いたいと挨拶され、11時半柔らかな陽光の下、慰霊祭は終了した。

昨年市長は挨拶の中で、式典には地元小中学生も参列させたいとの意向を表明されたが、実現しなかった。若い市長、合併で大きくなった都城市政を引続いて担当されている。慰霊祭がより地元に密着して、青年達が積極的に参加する慰霊祭になることを望んで止まない。

第23普通科連隊音楽隊の演奏

裏千家淡交会による献茶

祭　文

本日ここに、特別攻撃隊戦没者慰霊祭を挙行するにあたり、祭主　都城市特別攻撃隊戦没者奉賛会々長　長峯誠　謹んで御霊前に申し上げます。

春夏秋冬、時、季節は巡り、桜咲く中、今日の慰霊祭を迎え、感慨ひとしおのものがあります。

顧みますと、先の大戦が終わりを告げてから、六十一年の歳月が流れました。

苛烈を極めた戦いの中、軍人・軍属はもとより、徴用あるいは動員された学徒その他多くの国民が尊い生命を失われ、また傷つかれましたことは、私たちにとりましても、永遠に忘れることの出来ない、深い悲しみであります。

特に、都城市内、東と西の両飛行場から出撃し、帰らざる死出の壮途につかれました特別攻撃隊の勇士たち、その支援、援護・誘導に当たられました援護機の勇士たちの崇高なる心情を思うとき、深い感銘を覚えるとともに、哀痛の思い、胸に迫るものがあります。

これら、最愛の肉親を失われた御遺族の御心情を拝察いたしますとき、誠に痛恨極まりなく、お慰めのことばもありません。

戦後わが国は、ひたすら国の再建と発展に努め、平和と繁栄の道を築き上げて参りました。本市もまたその中にあって、年々発展を続け、南九州の産業・経済・教育・文化の拠点都市として揺るぎない地位を築いてまいりました。これもひとえに、英霊諸士の御加護と御遺族皆様方の御支援御協力のたまものであり、衷心より感謝の誠を捧げます。

一方で、私を含め、戦後生まれが国民の多数を占めるようになった現在、戦争の記憶が次第に薄れつつあるのも事実であります。数多くの尊い犠牲と御遺族の今なお変わることのない深い苦しみ、悲しみを決して忘れることなく、悲惨な戦争を二度と繰り返すことのないよう、末永く後世に平和の誓いを語り継いでいかねばなりません。

霊魂遠く去りまして、今日の平和と繁栄の喜びを共に分かち得ないことは、残念に存じますが、私たちは諸士の残された祖国愛、郷土愛を引き継ぎ、わが国の恒久平和と繁栄・発展のために、なお一層の努力を続けて参りますことを、ここにお誓い申し上げます。

今はただ、諸士の御霊がとこしえに安からんことを、また、在天の光として、今後ともわが国の繁栄と平安を見守り給うことを念じ併せ、御遺族皆様方の御多幸、御健勝を祈念いたしまして、追悼のことばといたします。

平成十八年四月六日

都城市特別攻撃隊戦没者奉賛会
会長　長峯　誠

都城東飛行場から出撃した原田栞少尉のこと

原田少尉は早稲田大学出身、特操一期、二七振武隊の一員で20年6月22日出撃、沖縄西方洋上散華。

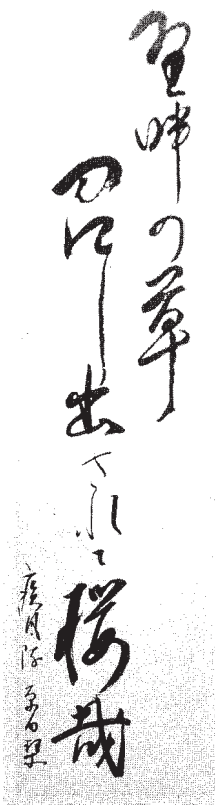
この人の次の遺詠は知覧の記念館に展示されている。

この書は熊本県菊池郡西合志町の緒方道場にあったという。該道場は一時特攻隊員の宿舎になっていたので滞在中に認めたのであろう。二七振武隊の絶筆集に原田少尉は次の通り書き残している。

「征くものは気易い　残るものの心情にはホトトギスの慟哭がある　情は涙である　そして愛は切ないされど忠ははさらに至上だ　祖国よ永久に幸あれ　幸あれ」と。

これも知覧に展示されている。

二七振武隊は2月14日明野で編成され、一時支那方面に転用、更に内地に戻り、沖縄戦末期の牛島軍司令官が自決する前日の6月22日突入している。



野畔（あぜ）の草召し出されて桜哉

都城の思い出

田中　賢一

私は19年11月から挺進戦車隊長だった。この部隊は滑空機搭載の戦車隊だったが、戦車搭載の滑空機「ク―7」の量産が不可能になったのと、戦車を使う空挺作戦など望み得ない戦局だったので、20年5月本土決戦のため財部に司令部を置く第五十七軍に配属された。それまで宮崎県の空挺部隊基地川南村の兵営にいたが、都城の東にある三股村と中郷村に移駐し、小学校などを宿舎に当てた。

軍から与えられた任務は対空挺だった。敵は昭和20年秋志布志湾地区に上陸すると判断していた。これは当っていたが、上陸と同時か内陸部進攻が始まってからか、敵空挺の大部隊が都城平地に降着するという判断は当然だった。空挺部隊が対空挺部隊にさせられてしまった。

一応居住態勢を整えた後、都城平地を隈無く偵察し、敵の侵攻が始まってから部隊を配置する場所を決めた。我が隊は戦車二個中隊を持っており、中隊は戦車二個小隊と歩兵一小隊の混成で、戦車は二式軽戦車で装甲は薄いが運動性は極めて軽快だった。降着した敵空挺との戦闘は、敵の航空攻撃を避けるため一刻も早く敵中に飛込んでしまうことを作戦方針とし、それに合うような待機位置を探した。

地形偵察の途中で東飛行場にも行ってみた。多分六月の下旬だったと思うが、爆撃の跡は生々しく我が飛行機は無かった。それまで航空特攻のことは聞いていたが、我が任務について頭が一杯で、それに特攻と言へば、五月に行はれた義烈空挺隊の沖縄殴込みの方が、我が身内のことなので関心が深かかった。

日々作戦準備に忙殺されているうちに、八月十五日になった。玉音放送は事前に通知がなかったので聞かなかったが、停戦のことはニュースで知った。財部にある軍司令部に招集があって、翌十六日に出頭した。隷下師団からは参謀長が来ていた。軍司令官西原寛治中将が停戦命令を伝達したが、第二百十二師団の高級参謀戸次中佐が「そんなことで国体が護持できますか」と軍司令官に食ってかかったが、軍司令官は「方面軍から受けた命令を伝えておく」とて相手にならなかった。

帰ってから中隊長を集め停戦命令を伝えると、いままで我が棺桶と思っていた戦車をおめおめ敵に渡すことはできぬ。志布志湾の断崖から海に捨てると意気まいたが、やがて平静になった。

思えば遠い昔話になってしまった。

萬世慰霊祭

菅原　道熙

加世田市は、平成17年11月7日、近隣の坊の津、笠沙、大浦、金峯の4町と合併して南さつま市となった。之に伴って加世田市平和記念館は、萬世特攻平和記念館と改名された。歴史的な萬世特攻の名前が正式に館名に付されるようになって、歴史伝承の観点からは却って良かったと思われた。

通算35回、南さつま市として最初の萬世特攻慰霊碑慰霊祭は、平成18年4月9日13時に海自鹿屋基地から飛来したP―3C哨戒機の慰霊飛行で幕が開いた。続いて遺族（18家族、56人）。各戦友団体代表、戦友団体が紹介され、更に国会議員、近隣首長の紹介があって、13時15分から式典が始まった。

元66戦隊員による国旗掲揚、黙祷、吉峯慰霊碑奉賛会長の祭文奉上、遺族代表、第62振武隊員倉　潔少尉の令弟倉　淳氏、戦友代表元66戦隊員（萬世特攻平和記念館名誉会長）苗村七郎氏の追悼の言葉が捧げられた。

献詠は錦城会加世田支部によって行われ、続いて参列者全員の献花、元66戦隊会員による碑に清酒を注ぐ献酒が終った処で、式次第には記載されていない、全近畿学生文化会議議長の前田多恵子さんが碑前に進んで、切々たる慰霊の言葉を読み上げた。

初めに、特攻勇士の壮挙を讃え、それを語り継いで慰霊顕彰の誠を後々までも捧げ継ぐことを誓い、一転して最近の世相の荒廃は、戦後教育を誤った結果の然らしむる処で、又拉致被害者の救済に全力を傾注しようとしない我が国の弱腰に痛憤し、前田さんは教育者志望で、教員として世に出ても単に教員としての任務を果たすことのみに止まらず、広く教育問題、拉致問題の解決に全力を取り組んで行きたい。という抱負を力強く述べて慰霊の言葉を結んだ。

若者の烈々たる決意表明を聞いて、参列者一同粛然として深い感銘を覚えた。在天の諸霊も嘸かしお喜びになったことであろう。

参加した学生は、前田代表を含めて4人（男女各2）で、志を同じくするグループが、全国何ヶ所かに存在しているが、現状未だその数は多くはないということである。このような青年が存在する限り、我が国の前途を悲観することは無いと元気づけられたと同時に、われわれ世代も生ある限り、志の高い若者の育成に努力する必要があることも痛切に感じさせられた。

この後、陸上自衛隊国分駐屯地音楽隊の伴奏で、全員で加藤隼戦闘隊を声高らかに合奏した。国旗降納も元66戦隊員の手で行われ、予定より若干遅れて14時45分閉式した。

元66戦隊員による献酒

元66戦隊員による国旗掲揚

第72振武隊の少年兵達

花曇り、風も弱く、茲数年来最も天候に恵まれ、且つ、予期せざる若者の気魄に接し得て、心豊かに祭場を後にした。

碑　文

第二次大戦とみに悪化、風雲急を告げる昭和十九年、その帰趨は決定的段階を迎える。ここ加世田市吹上浜の地に、戦勢転換の神機を期する地元民、学徒ら軍民一致の協力により万世飛行場が建設さる。

本土防衛の基地、沖縄決戦の基地として、昭和二十年三月二十八日より終戦まで、陸軍特攻振武隊、飛行第六十六戦隊、第五十五戦隊の若き勇士は、祖国護持の礎たらんとここより雲表の彼方に飛び立つ。一機また一機と。

征きて帰らざる者あまた。或は空中に散華、或は自爆、壮絶にして悲絶、これを他に求められようか。至誠尽忠の志に燃える戦士は祖国に殉じたのである。血と涙によって平和はもたらされた。

ここにその勲を讃え、霊をとこしえに慰めん。

われら生き残りたる者と心ある住民は、英霊の偉勲を偲び、後世に伝えんためにこれを建立す。

枕崎第二艦隊追悼式・旧鹿屋航空基地特攻隊戦没者追悼式

藤田　幸夫

枕崎の第二艦隊追悼式は、4月7日(金)11時から執り行われた。今年は、映画『男達の「大和」』の上映や、呉の「大和ミュージアム」の開館などで国民の関心が高まっていること、客船「ふじ丸」による洋上慰霊クルーズが企画されたことなどから、参加者も多く、市民も含めて総員500人近い盛況となった。

今年、印象深かったことは、まず、自衛隊鹿児島地方連絡部（部長一等海佐福本　出）の全面的支援が得られていたことである。例年の陸上自衛隊国分駐屯地の音楽隊に加え、海上自衛隊自衛艦隊の掃海艇2隻が入港し、ラッパ隊、隊員の参列があり、空自の地連隊員も加えると陸海空の統合支援ができていた。市民の体験航海や一般公開も実施されていたこと、次に徳之島伊仙町から、町長大久保　明氏以下、町の職員、慰霊碑修復活動中のNPOの参加があったことである。

伊仙町は、「大和」以下が沈められた4月7日に、沈没現場を望見出来る犬田布岬の慰霊碑（高松ノ宮様揮毫）前で、毎年慰霊祭を行ってきている。第39回目であった今年は、「ふじ丸」クルーズ洋上慰霊祭参加者のために繰り上げて、5日に実施された。ところが、当日は、12メートルの強風で、船が接岸できず、慰霊団代表の祭文奏上も慰霊碑修復募金の贈呈もできず、洋上からの参加になった。そのために慰霊碑前の岬沖で、単縦陣で航過する護衛艦3隻と「ふじ丸」は、大和沈没の14時23分にすれ違い、そのとき双方で「長々音」を鳴らして弔意を表し、上空には沖縄第5航空群からのP―3Cが弔問飛行するなど、陸海空呼応した感動的な慰霊祭が実現したということであった。

更に感動的であったのは、枕崎の追悼式に、上陸参列することができた「ふじ丸」慰霊団代表から前々日徳之島で予定されていた祭文奏上と伊仙町長への慰霊碑修復募金の直接贈呈が実現したことである。平和祈念展望台上は好天に恵まれ、例年に無い素晴らしい追悼式となった。

鹿屋の追悼式も好天に恵まれ、散り残った桜吹雪の中で、約千人の参列のもと、盛大に執り行われた。高齢の戦友達による「同期の桜」碑前献歌は、助け合って碑前に進み、歌の伴奏が始まるやさっと背筋を伸ばし、大きな声で合唱されたことが印象に残った。席に帰る顔には、涙の後があった。さらに、親子3代のご遺族の楚々とした姿が、何組か見受けられた。

今年は鹿児島方面の慰霊祭参加を機に私は、CD「あゝ特攻」の委託販売について、知覧や鹿屋の資料館売店に依頼する任務も果し、大変印象深いものがあった。鹿児島県を始め南九州には沢山の特攻隊慰霊碑がある。それぞれに連携は無く、何処で何時慰霊祭が行われるのかが把握されていない。沖縄、徳之島、南九州各地の陸海軍特攻基地に関しては時々慰霊行脚旅行を行って慰霊顕彰の積極的伝承を企図することに一考の余地は無いのであろうか。

［碑文の一節］……ここに退勢挽回の秘策を試みるに至った。即ち敵陸海空軍兵力の全滅を期して企てた「特攻攻撃」である。ときまさに二十年春であった。この壮烈な特攻発進の地こそ当鹿屋であって、以来八十二日間の戦闘は苛烈を極め、日々若人達は黒潮おどる沖縄へと飛び立った。あたら春秋に富む尊い生命を、祖国のために敢然と捧げたこれら若人達世上ともすれば敗戦のかげにこのような尊い犠牲を忘れがちである。こんにちことの結果はどうであったにしても、これら身を挺して祖国の難に殉じた人々の祖国愛は称賛されるべきであり、これら若人の至純の精神は…

枕崎追悼式陸自・海自音楽隊

鹿屋基地慰霊祭

豫科練雄飛会慰霊祭

小倉　利之

平成18年4月4日靖国神社で、豫科練雄飛会慰霊祭が行なわれた。

ご遺族、来賓と乙種飛行豫科練習生1期生から24期生まで、約300名が参集殿に集い12時過ぎから慰霊祭が行なわれた。

当日は、前日の強風から一転素晴らしい雲一つない晴天に恵まれた。桜の花も満開で、「同期の桜」の離れ離れに、散ろうとも、花の都の、靖国神社、春の梢に、咲いて会おうの詞のとおり、ご遺族、同期、先輩、後輩と昔を思い出しながら素晴らしい話しの輪が受付前で次々と広がっていた。

慰霊祭は、国家奉奏、修祓、祝詞奏上、祭文奏上（住友会長）、総員で「同期の桜」を献歌、2班に分かれて本殿に昇殿参拝した。祭文奏上で会長は、私たちは感謝と祈りと誇りを忘れないでこれからも頑張って行きたいと所信を述べ、最後にシンガポールのマハティール氏の、東南アジアの植民地は、この戦争がなければ、独立に、まだ100年以上かかったであろうの言葉を引用して締め括られた。

慰霊祭の後、靖国会館前で記念撮影、次いで靖国会館で直会（招魂観桜祭）が開かれた。

1期生の伊藤氏の話で、靖国の春の梢に、亡き友のことを思いつつ、同期生等の親睦を図って、すばらしい1日にして欲しいと述べられ、乾杯のもと楽しい時間を過ごした。伊藤氏は、年齢が91歳で、矍鑠として、奥様と出席しておられた。まさしく「雄飛会」の鏡であると、参会者から祝福を受けておられた。

ご遺族も、来賓も、雄飛会員の方々と積もる話をし、楽しいひと時が経過した。靖国の御社の奥深く神鎮まります乙種飛行予科練習生出身の御英霊も嘸や満足されたことであろう。

第15回震洋会慰霊祭

藤田　幸生

去る3月25日(土)、靖国神社において第15回の震洋会慰霊祭が執り行われた。当日は、陽春の穏やかな好天に恵まれ、桜の花も3分咲きであった。

11時に参集殿前で受付が始まり、其所には幾つもの談笑の輪が広がっていった。全国から上田恵之助会長以下182名の方が参加された。

慰霊祭は13時10分開始、神職の祝詞奏上に続いて名古屋茂夫副会長による祭文奏上、全員で「海行かば」を斉唱した。本殿参拝時には軍装会のラッパ吹奏が添えられた。

続いて靖国会館において、「オール震洋隊員の集い」が開催された。黒木豊幹事長から、震洋会事務局が主催する靖国神社での慰霊祭は、今年が最後で以後はそれぞれのグループが、川棚等で続けて行くことになると報告された。

その為か、上田会長の挨拶には、過去15年間を想起する深い感慨が込められていた。終って懇親会に移り各卓毎に談笑が賑やかに盛上る一刻を過し、最後に全員で「同期の桜」等を歌って、名残り惜しみつつ散会した。

図書紹介

後藤玲子著「特攻戦士の遺志に触れて」

評議員　小灘　利春

著者は元・法務省法務教官であり、現在も女性保護施設の職員を勤めている。家庭人として、また育児体験を通して、女性らしい感性で神風特攻敷島隊に始まる特攻出撃の状況、その主力となった第十期甲種飛行予科練習生出身搭乗員たちの心情観察は深い。

第二六航空戦隊司令官でありながら特攻機に乗り敵空母に体当たりした有馬正文少将の古武士の名にふさわしい「指揮官先頭」ぶりは特攻を語る場合、銘記すべきことであろう。

一身を捨て南朝へ忠節を貫いた楠正成が置かれた環境、心情に連なる神雷部隊の隊長野中五郎少佐、また回天特攻の諸戦士の逸話などの記述は分かり易い。

著者は夫婦共白髪が実現する頃となって特攻戦士ゆかりの場所を次々と巡り、シドニー港を攻撃した特潜伴勝久少佐の墓参や回天基地大津島を訪れており、今後も各慰霊施設の紹介が続くよう期待される。

豊田市の名古屋航空隊跡にある神風特攻「草薙隊慰霊碑」が、定期的に清掃して守っている愛知少年院院生たちが人生を見つめ直すよすがとなっている事実は心温まる話である。

東京図書出版会発行。
本体価格一、〇〇〇円。
発売元は㈱リフレ出版
〒113－0033　東京都文京区本郷
二－三五－一七－二〇四
℡　〇三－五八四二－六四一五

「日本人の歴史哲学」なぜ彼らは立ち上がったか

著　者　岩田　温
（磐南総合研究会代表）
発　行　展転社
価　格　一、八〇〇円＋税

序　戦後という時代
1、取り戻すべき歴史哲学
2、民族共同体としての国家
3、西郷隆盛と日本の近代
4、特攻隊と大東亜戦争
5、民族の記憶

「特攻・絶望の海に出撃せよ」

著　者　渡辺　大助
（ノンフィクションライター）
福島テレビ／小樽放送勤務

発行所　㈱新人物往来社
価　格　一、六〇〇円＋税
1、神風特別攻撃隊「敷島隊」
2、人間爆弾「桜花」
3、人間魚雷「回天」

終戦六〇周年記念ＣＤ『あゝ特攻』について

理事　藤田　幸生

かつて陸海軍特攻隊員たちが愛唱した歌や、彼らの遺書などをナレーションで綴る、約四〇分間のセミドキュメンタリＣＤ『あゝ特攻』が発売された。作成には水交会も協力している。

このＣＤは、終戦六〇周年を記念して、「日本人の心を伝える会」が製作し、「特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会」から発売されたものである。

作成は大阪学芸大学の有志が、またデザインは塚本哲デザイン事務所、更にその題字は吉田學前水交会会長が揮毫されるなど、全てボランティア活動で支えられたものである。

上がった利益は、慰霊碑建立など特攻隊戦没者の慰霊顕彰事業に当てられるという。

このＣＤを聴いた二十代のＯＬは、「これまで、特別攻撃隊については、知覧の記念館や本などで知る機会はありましたが、このＣＤのように隊員の方々の手紙を朗読すると言う形で聴きますと、すんなりと入ってきて、その気持ちで聴く歌の歌詞もまた、深いメッセージとして受け取ることが出来ました。戦争と一口に言っても、そのために戦った方々には、お一人ずつその方の人生とドラマがあった事、私達が今こうして生きていられるのも、その方々のお陰であると考えさせられました。」と言っている。

江田島の教育参考館を訪ねたとき感じる、あの気持に通じるものであろうか。

出来るだけ多くの若者たちに聴いてもらって特攻隊員のことに想いを致し、今の日本のことを考えて欲しいものである。

価格は税・送料込みで、二、〇〇〇円。購入申し込みは、葉書かＦＡＸで「特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会」（ＦＡＸ０３・３４３２・５５６７）

平成百人一首より

ああ四月西の国には薔薇咲く日
東の国にさくらにほふ日

堀口大学

お知らせとお願い

理事長

一、理事会・評議員会

平成18年第1回理事会・評議員会は、3月2日に偕行社で開催（11時・15時）され、平成17年の業務と会計収支報告が行なわれました。（資料別掲）

特別攻撃隊の五訂版作業が続けられていますが、従来の様な改訂の他に新たに、第二艦隊沖縄出撃時戦死者以下、特攻作戦に深く関わりながら特攻戦死認定を受けなかった戦死者名を、追補として記載し、誌名も「特別攻撃隊全史（特別攻撃隊五訂・追補版）」として刊行する方針が決定されました。本件に関しては、次号で詳しくお知らせする予定であります。

一、総会

第27回総会は、合同慰霊祭に引き続いて私学会館で、平成18年3月30日13時30分から行なわれました。出席者は約200名。会長は挨拶の中で、昨年7月瀬島名誉会長の発意で結成された、(財)大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会の目的達成の為の強化具体策の検討が、始められたと述べられました。財団間の交流・統合等難しい問題がありますが、各慰霊団体会員の急速な減少が至近の間に迫って来ている時に、後手を踏まない心構えが必要であると思われます。

引き続いて懇親会に移り、和気藹々の裡に15時半解散しました。

総会における会長挨拶

一、フィリピン慰霊旅行

今年も去年と同じ日程で、10月25日のマバラカット慰霊法要に参加し、以後各地を慰霊行脚致します。百聞は一見に如かずで奮ってご参加下さい。総会で小職から、お孫さんや知り合いの方等、若い方々の参加があれば、次世代会員獲得に繋がることでもあり、勧誘協力方お願い致しました。

一、会員動向

別掲理事会報告に記載されていますが、平成17年の会員数減少は115名に止まりました。平成14年には減員が400名を越え、且つ平成15年年初の会員数が二五〇〇名を割込んだ状態に較べると、何か会員の動向に底固さが生まれて来ているのかなとの感を抱きます。

僅かではありますが、一般会員は35名増加したことに心強さを覚えます。会員の皆様には未加入の昔の仲間、或は身近の若い方々への入会の呼掛けを積極的に行なって戴いて、引続いて会員増強に御協力を賜りますことを、切にお願い申し上げます。

新入会員名簿

（平成18年1月1日～3月31日）

○**青森**　畝田謹次郎　○**宮城**　侘美旭　○**福島**　円谷信一、松尾知男　○**茨城**　金箱廣美　○**埼玉**　白上進一、三ヶ田恵美子　○**千葉**　窪　洋之右、佐伯幸男、谷脇憲司、千葉　満、古川秀雄　○**東京**　池上　徹、池田玲子、諫山　廉、石井豊喜、黒岩義之、但馬オサム、玉越俊一、塚本　哲、中村栄造、原崎郁平、渡辺　功　○**神奈川**　枝元昭典、佐藤博志、野田敏司、橋本大一郎、廣瀬　毅、吉満秀雄、大貫健一郎　○**長野**　大日方邦治○**静岡**　幾田裕男、畠山　弘　○**京都**　後久四郎　○**大阪**　宮北　實　○**兵庫**　中村治彦　○**山口**　三河内健作　○**高知**　藤田典正　○**福岡**　吉田昭司○**熊本**　興梠展康

会員訃報

謹んで哀悼の意をささげます。

北海道　椎名　典義（17・12）
秋　田　長谷山小五郎（18・3）
福　島　木野内重三郎（18・1）
埼　玉　新井嘉一郎（18・2）
東　京　大戸　正徳（16・11）
　　池谷高次郎（17・11）
　　鵜沢　敏子（16・　）
　　高橋八重子（17・12）
　　吉家　寅雄（18・3）
神奈川　磯谷　修（17・10）
　　久保　哲茂（17・11）
石　川　落合　正（17・11）
山　梨　河内　尊治（17・8）
長　野　塩入　春雄（17・3）
愛　知　飯塚　昭三（17・12）

寄附者御芳名

（平成十八年一月～三月・単位千円）

一〇〇　飛行第17戦隊会
一〇〇　小島　健三
一〇〇　中台不動産㈱
五〇　岡田　豊喜
五〇　瀬島　龍三
五〇　山根　秋男
二〇　大穂　利武
二〇　椎名　典義
二〇　福井　寛治
一七　門司　親徳
一二　上尾　侑子
一〇　飯岡　哲子
一〇　大谷　安信
一〇　奥谷　正久
一〇　片岡　重子
一〇　斎藤　資郎
一〇　白川　和典
一〇　新開　崇司
一〇　杉本　良員
一〇　千里久民男
一〇　智覆特攻慰霊顕彰会
一〇　中瀬　操
一〇　難波　寿邦
一〇　根津　晴之
一〇　松本　憲二
一〇　三品　武雄
一〇　杏つばさの塔賛会
一〇　宮永　笑子
一〇　山本　卓眞
一〇　吉柳きよ子
九　秋葉　哲郎
九　町田　乾郎
八　青木　誠
八　伊藤　直之
七　岡嵜　幸平
七　川村恵美子
七　近歩　一会
七　駒井　剛
七　迫　博文
七　鈴木瞭五郎
七　野田　誠作
七　本田　毅
七　山際昭太郎
七　渡部　利久
六　角南　加男
六　高田　三郎
五　赤柴元五郎
五　飯森　盛久
五　石井　敏子
五　磯矢　修
五　板垣　正
五　市川　国雄
五　市場　敏司
五　内山　正一
五　岡田　豊
五　鍵本　栄一
五　笠松　澄子
五　上村田佳子
五　川人　盛幸
五　菊地　嘉明
五　菊池　国光
五　小島　勤
五　駒場剛太郎
五　澤部　泰
五　三本松和俊
五　島　龍三郎
五　島崎　政彦
五　菅原　道之
五　鈴木　敏
五　高田　源二
五　高橋　房之
五　田島　幸男
五　多田　龍二
五　田村　賢雄
五　徳田　外治
五　山中浩太郎
五　名執　肇
五　花塚真知子
五　布施木　昭
五　堀江　正夫
五　村田　俊夫
五　役山　明
五　山下　一助
五　山本　年男
五　吉田　文尭
五　吉峰　泰夫
五　渡部　市郎
四　上村　貞蔵
四　川瀬　常道
四　酒井　弘義
四　重富　和男
四　藤田　幸生
四　森　力男
三　中山　誠一
三　岩田　信一
三　植之原道行
三　臼田　智子
三　江村　茂夫
三　尾島　成美
三　小沼　愛
三　下出　春見
三　高畑　隆雄
三　椿　孝則
三　中村　竹雄
三　羽鳥　忠男
三　花井　博政
三　平野　保
三　藤井　常男
三　古畑　昭二
三　星　康之
三　細渕　義信
二　青山　一正
二　荒木　精一
二　安藤　英雄
二　飯島　厚
二　一橋　次郎
二　井本　尚英
二　岩澤　漸二
二　岩宮　満
二　上田　恵
二　上原　富次
二　大久保武司
二　大塚　喜衛
二　岡部　尚子
二　岡本　久吉
二　小野寺　貢
二　笠井　溢三
二　金子　亘秀
二　川井　孝輔
二　川田　信雄
二　川戸　廉介
二　川人　明美
二　木村　一吉
二　木村　恒雄
二　草刈　正一
二　清野　武雄
二　国本　鎮雄
二　鯨井　優直
二　黒木長九郎
二　河野　茂義
二　小長　啓一
二　小堀桂一郎
二　斎田伊佐夫
二　坂詰　撰二
二　白石　正
二　末岡　力
二　鈴木　章
二　鈴木　淳夫
二　炭竈　三郎
二　関口　昭平
二　(財)全慰協
二　佐藤　一志
二　高岡　正雄
二　高梨　久義
二　高松　績匡
二　高山　友二
二　谷尾　侃
二　谷川　徹
二　玉野　康
二　千葉　孝
二　辻　守雄
二　中江　正夫
二　長金　健一
二　長澤　剛
二　中村　善治
二　中村　好之
二　名倉　浩
二　西川　光男
二　西澤　哲夫
二　西村　芳行
二　根本　常示
二　野田耕一郎
二　長谷川　清
二　羽田　英男
二　服部　武志
二　花見　重一
二　濱田　芳一
二　早川　一喜
二　早田　亮彦
二　原口　英二
二　原田　誠雄
二　原田　義治
二　春山　善良
二　樋口　太
二　日比野臣三郎
二　平田サダェ
二　平田　重夫
二　平野　三郎
二　廣瀬　雍熙
二　深澤　欣一
二　福田　充
二　船水ちか子
二　星埜　清滋
二　前囿　利治
二　松浦登士郎
二　松尾　弘
二　松永　行雄
二　松本　悦郎
二　松本　太郎
二　西村秀次郎
二　道土井圭次
二　光安　良一
二　宮崎喜一郎
二　村中　一男
二　茂木　宏之
二　山西　能夫
二　山村　哲也
二　山本　健雄
二　湯澤　一枝
二　吉瀬善之助
二　米田　信
二　渡辺　悦次
一　呉　正男
一　青木　信雄
一　安達　乾
一　新　忠信
一　飯田　雍子
一　池本　愈
一　大手　良之
一　大中福太郎
一　大野かさね
一　大森　晋
一　尾関　基
一　小田　兼裕
一　河原田七郎
一　神崎　夢現
一　桑原アヤ子
一　小泉　朋美
一　小熊　一敬
一　清水　保
一　白土　四男
一　関口　秀明
一　千田洋之助
一　高橋こすみ
一　竹森　敏子
一　田澤　昌成
一　辻　外文
一　坪島　茂彦
一　飛田　靖
一　中村　猛
一　中山達二郎
一　根木　要
一　林　聖二
一　廣嶋　文武
一　藤本　松彦
一　町田　義雄
一　松井　雄
一　三宅　浅男
一　三浦　晨平
一　山根　敏史
一　吉村　伍
一　米原　明

協会への御芳志誠に有難うございました。

平成17年度事業報告

1、慰霊事業

(1)第26回陸海軍特攻隊合同慰霊祭

平成17年3月30日靖国神社挙行した。参加者は、来賓37名、遺族54名、会員等235名であった。

慰霊祭終了後、市ヶ谷の私学会館において協会の年次総会を開催し、平成16年度事業及び収支決算に関する報告が行われた。

(2)第54回特攻平和観音年次法要

平成17年9月23日世田谷山観音寺に於いて、同寺主催の年次法要が営まれた。参加者は来賓30名、遺族54名、会員等272名であった。

(3)神風特攻発進61周年慰霊祭

平成17年10月25日フィリピン・ルソン島のマバラカット市で挙行された慰霊祭に慰霊団を編成（27名）し参列した。日本人出席者は当協会ほか3団体と現地在住者を含め約150人であった。その後、慰霊団はコレヒドール、モンテンルパ、セブ、レイテ各地を慰霊巡拝した。（10月24日～29日）

(4)各地慰霊祭への協賛

ア　代表者派遣

	慰霊祭名	場所	参加者
3月26日	震洋会	靖国神社	藤田理事
4月4日	予科練雄飛会	靖国神社	菅原理事長
4月6日	都城特攻隊	都城市	菅原理事長
4月7日	第二艦隊	枕崎市	藤田理事
4月8日	鹿屋特攻隊	鹿屋市	藤田理事
4月10日	万世特攻隊	加世田市	菅原理事長
4月22日	春季例大祭	靖国神社	菅原理事長
5月3日	知覧特攻隊	知覧町	菅原理事長
5月30日	春季慰霊祭	千鳥が淵墓苑	菅原理事長
6月11日	義烈空挺隊	沖縄・摩文仁	杉山理事
8月10日	慰霊協	靖国神社	菅原理事長
10月18日	秋季例大祭	靖国神社	菅原理事長
同	秋季慰霊祭	千鳥が淵墓苑	菅原理事長
10月30日	海原会	陸自武器学校	小倉評議員
11月10日	明野忠魂塔	陸自明野駐屯地	深山評議員
11月13日	回天	山口・大津島	小瀬評議員
11月13日	若潮会	靖國神社	菅原理事長

イ　供花料送達

4月10日	荒鷲之碑慰霊祭	空自熊谷基地
9月18日	原ノ町飛行場戦没者慰霊祭	原ノ町
10月9日	水戸つばさの塔慰霊祭	ひたちなか市

2、その他の事業

(1)古野一正、落合重温両会員から特攻勇士之像に、副碑を寄贈したいとの申し出があり、6月28日靖國神社の神官により勇士之像前に於いて除幕、清祓の儀を行い礎石を献納した。会長以下理事、評議員、遺族、礎石関係者等30人が昇殿参拝後列席した。

(2)機関紙「特攻」62号～65号を発行、会員その他に配布した。

(3)特攻平和観音堂改修は平成15年秋から始められたが、腐食等の範囲が意外と広くこのため5月に第2次寄金を会員等に募った。その結果、620万円余りの寄進（第1次437万円）があり9月に改修が完了した。

(4)今年度末の会員数は三、五五二名あった。退会者二六一名、入会者一四六名で一一五名減少した。会員の内訳は、陸軍関係者二、四五〇名（六十九％）、海軍関係者七〇八名（二〇％）、一般三九四名（十一％）で、一般会員が三十五名増加した。

以　上

収　支　計　算　書

(平成17年1月1日から平成17年12月31日まで)

(第13年度)　(単位:円)

科　目	予算額	決算額	差額	備考
Ⅰ 収入の部				
1 年会費	10,000,000	9,488,000	512,000	
2 基本財産運用収入	2,670,000	2,481,380	188,620	
3 特別会費収入	4,500,000	4,907,700	-407,700	
4 寄付金1収入	1,500,000	1,266,000	234,000	
5 寄付金2収入	0	6,204,300	-6,204,300	注1
6 懇親会費収入	1,300,000	1,280,000	20,000	
7 出版事業収入	300,000	676,000	-376,000	
8 雑収入	100,000	96,632	3,368	
当期収入合計(A)	20,370,000	26,400,012	-6,030,012	
前期繰越収支差額	23,662,000	24,337,006	-675,006	
収入合計(B)	44,032,000	50,737,018	-6,705,018	
Ⅱ 支出の部				
1 管理費				
人件費	4,770,000	4,719,200	50,800	
旅費交通費	200,000	185,954	14,046	
通信費	60,000	180,807	-120,807	
会議費	300,000	387,493	-87,493	
事務所経費	810,000	807,600	2,400	
消耗品雑費	500,000	470,140	29,860	
リース料	200,000	201,600	-1,600	
租税公課	70,000	70,000	0	
予備費	150,000	0	150,000	
2 事業費				
慰霊祭等事業費	6,000,000	12,365,885	-6,365,885	注2
史実調査研究費	100,000	6,480	93,520	
資料収集費	100,000	19,158	80,842	
出版事業費	30,000	234,005	-204,005	
広報活動費	4,700,000	4,533,355	166,645	
予備費	400,000	0	400,000	
当期支出合計(C)	18,390,000	24,181,677	-5,791,677	
当期収支差額(A)－(C)	1,980,000	2,218,335	-238,335	
次期繰越収支差額(B)－(C)	25,642,000	26,555,341	-913,341	

注1. 世田谷特攻観音堂の改修が大幅に増え、計画外に会員等から改修費の第2次募金を行ったため。

注2. 改修費の第2次募金額を世田谷山観音寺に寄進したため。

平成18年2月17日

監　事　志賀 昭夫 ㊞

監　事　伊集院 雅英 ㊞